METAL HAMMER JAPAN

メタルハマー・ジャパン　第5号

Vol.5

追悼 *Alexi Laiho*
アレキシ・ライホ
特集：フィニッシュ・メタルの血統

The Documentary
BAND-MAID

ハロウィン
プリティー・レックレス
ゴースト
エイリアン・ウェポンリー
ヘイトブリード
LOVEBITES
聖飢魔II
谷原章介

THE 50 BEST ALBUMS OF 2020
から考察する
日英メタル・ミュージック・ムーブメントの同異点

Special Feature

EVANESCENCE

Rittor Music Mook

METAL HAMMER JAPAN

[Vol.1]、[Vol.2]、[Vol.3]&[Vol.4]好評発売中!

お求めは全国の書店・web サイトにて

METAL HAMMER JAPAN Vol.1　価格：1,500 円（+税）

◎ CONTENTS
Special Feature **オジー・オズボーン**

○最新インタビュー
○ 40 年目の『ブリザード・オブ・オズ～血塗られた英雄伝説』
○オリジナル&ソロ・ギター・スタイルで弾く「グッバイ・トゥ・ロマンス」

フィリップ・H・アンセルモ／ BABYMETAL ／スリップノット／アウトレイジ／デイヴィッド・エレフソン／トリヴィアム／ KOЯN ／エヴァネッセンス&ウィズイン・テンプテーション／アモン・アマース／バロネス／ LOVEBITES　...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.2　価格：1,500 円（+税）

◎ CONTENTS
Special Feature **ドリーム・シアター／ジェイムズ・ラブリエ**

○ 1992 年のドリーム・シアター
○アイアン・メイデンはいかにしてプログレッシブになっていったのか!?
○『メタル・ジャスティス』はどうプログレッシブなのか?
○インテリジェント・アグレッシブ＝ジェントの進撃

メガデス／キング・ダイアモンド／ミルクル／メシュガー／コード・オレンジ／ディジー・ミズ・リジー／ジューダス・プリースト／サバトン／ブラッド・インカンテンション　...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.3　価格：1,500 円（+税）

◎ CONTENTS
Special Feature　**from 1985 to 2001 アイアン・メイデン LIVE の刻印**

○ジューダス・プリースト：『ブリティッシュ・スティール』40 周年
○炎立つスラッシュ・メタルの 1986 年
○今、このヘッドフォン&イヤフォンでメタルが聴きたい

MR.BIG ／ハロウィン／アーチ・エネミー／メガデス／ラム・オブ・ゴッド／ペリー・トゥモロー／メイク・ゼム・サファー／ KOЯN　...and More!

METAL HAMMER JAPAN Vol.4　価格：1,500 円（+税）

特別付録：BABYMETAL
オリジナル両面ポスター

◎ CONTENTS
Special Feature **BABYMETAL**

彼女たちが突き進んだ 10 年……その視線の先にある未来

○ブラック・サバス：『パラノイド』50 年目のドゥーム・ロード
○メタルだったら部屋でも激音　最強の“卓上&小型”ギター・アンプを探せ

カーカス／アイアン・メイデン／ナパーム・デス／ブリング・ミー・ザ・ホライズン／パワー・トリップ／ゴーストメーン／ LOVEBITES ／水野真紀　...and More!

[Vol.6]は2021年6月発売予定!

□編集部からの叫び!　日々のオフィシャル Twitter はこちら>> @MetalHammer_Jp

METAL HAMMER JAPAN

一周年記念
2号連続オリジナルTシャツ
合計500名様プレゼント企画 - 第2弾!

読者諸兄＆世界中のメタル・ミュージシャンの応援もあり、本号Vol.5にて2年目に突入した『METAL HAMMER JAPAN』。その感謝の意を込めて、2号連続で《オリジナルTシャツ・プレゼント・キャンペーン》を実施中！　第2弾となる今回は、こちらの限定Tシャツを250名様にドドンとプレゼント！　通常の読者プレゼントに比べ当たる確立が高くなっているので、ドシドシご応募くださいませ。
街でおそろいシャツの仲間とすれ違ったら、こっそりメロイック挨拶をしておこう★

これが『METAL HAMMER JAPAN Vol.5』限定Tシャツだっ！

●カラー：ブラック・ボディ×ホワイト・プリント
●サイズ：Lのみ
● Vol.5用プレゼント数：250枚
※画像はイメージです。実際の製品では多少の変更がある場合があります。

▲Vol.4でのオリジナルTシャツ（※応募は締め切っています）。

前号Tシャツ同様、デザインを担当してくれたのは、ルーマニア人アーティストのコスティン・キオレアヌ氏だ。アーチ・エネミーやゴーストなど著名バンドのアートワークを担当しており、彼の作品を目にしている人も多いだろう。前号キャラクターのイーヴィルな雰囲気をそのままに、さらにダーク・ヒーロー的熱気も帯びた表情に注目！

【応募方法】
希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、プレゼント枠に《① Vol.5 オリジナルTシャツ》と記入してご応募ください。
●締め切り：[2021年6月10日（木）]
●プレゼント発送予定日：2021年7月上旬
当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております！

in Japan

BABYMETAL

10 BABYMETAL BUDOKAN［DOOMSDAY – Ⅰ & Ⅱ］

19,20TH JAN
@NIPPON BUDOKAN

SETLIST

1. IN THE NAME OF
2. DISTORTION (FEAT. ALISSA WHITE-GLUZ)
3. PA PA YA!! (FEAT. F.HERO)
4. ギミチョコ！！
5. ド・キ・ド・キ☆モーニング
6. OH! MAJINAI (FEAT. JOAKIM BRODÉN)
7. メギツネ
8. KARATE
9. STARLIGHT
10. ヘドバンギャー！！
11. ROAD OF RESISTANCE
12. THE ONE
13. イジメ、ダメ、ゼッタイ

LIVE PHOTO BY TAKU FUJII

BABYMETAL

CONT

Special Feature

EVANESCENCE

オリジナル・スタジオ・フル作としては、実に10年ぶりとなる『ザ・ビター・トゥルース』をドロップするエヴァネッセンス。<ヘヴィロック×女性ヴォーカル>というスタイルの新たなる形を築き上げた先駆者＝エイミー・リーが、本作を通してこの時代に思うこととは。

最新インタビュー

エイミー・リー P.10

本作を作るきっかけとなった創造の根源について、さらにはロック・シーンにおける女性ヴォーカリストとしての想いなど、現在のエイミーだからこその言葉を聞く。

ウィル・ハント P.16

重厚かつ生々しいドラミングで楽曲にグルーヴを吹き込むウィルは、新作でのプレイ、また自身が持つドラム・ポリシーを大いに語る。

艶麗なるメタル・サウンドのしらべ P.20
女性シンガー 躍進のヒストリー

シーンを築き上げたエヴァネッセンスを始め、古今東西、斬新なアプローチで個性豊かなヘヴィ・ミュージックを彩ってきた女性ヴォーカル・バンドたち。その歴史と活躍をクローズアップ。

ALEXI LAIHO, FOREVER… P.30

卓絶のギタリスト　アレキシ・ライホ

希代のフロントマンとして、2000年代のメタル・シーンを牽引してきたアレキシ・ライホ。彼の悲報はいまだファンの胸を締めつけ続けているが、きっとアレキシならば"いつまでもくよくよせず、オレの曲で頭を振ってくれよ！"と言っているはず。彼の残した言葉、ギタリストとしての類い希なセンス、人間的魅力に改めて触れていきたい。

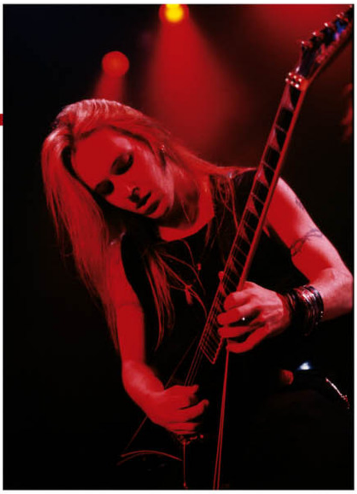
Alexi Said So!　アレキシ・ライホ名言集　P.34

ギターを愛し、ギターに愛されて　ギタリストとしての比肩なき個性とその功績　P.38

関係者が語る素顔のアレキシ　P.42

アレキシ・ライホ～チルドレン・オブ・ボドムを育てた
"森と湖に潜む激音"＝フィニッシュ・メタルの血統　P.44

フィンランド大使館で聞く
一般層から見てもフィンランドは"メタル大国"なのか!?　P.49



The Documentary　P.88

BAND-MAID

新作『Unseen World』をリリースし、2月には初の日本武道館公演を控えていた彼女たちだったが、同公演はやむなく中止に。この"延期"ではなく"中止"という決定には、メンバーの強い意志と自信が込められていた。コロナ禍を突き進み続けるバンドの"ここまで"と"これから"を、小鳩ミク&SAIKIが語る。

フィンランド発　P.51

ルオカンガス・ギターズがくり出す無二のメタル・トーンに注目！

LET'S TALK METAL!　P.82

谷原章介

4月からスタートする情報番組『めざまし8』のメイン・キャスターに就任した谷原章介は、エクソダスを筆頭としたスラッシュ・メタルをこよなく愛するヘッドバンガーでもあった！　俳優・司会者として、さまざまな顔を観せる彼だが、そこには音楽と共通する軸があったのである。

ENTS

ヘヴィの流儀
HALLOWEEN P.54

自身が持つヘヴィ・サウンドへのこだわりを聞く《ヘヴィの流儀》、今回はハロウィンからカイ・ハンセンが登場！　スピード感満載の楽曲、明るいメロディを持つ楽曲も魅力のハロウィンは、どのようなヘヴィ・サウンドを目指していたのか!?

From UK

P.26

THE PRETTY RECKLESS

美貌とパワー・ヴォイスを備えるテイラー・モムセン率いるプリティー・レックレスのニュー・アルバムは、これまで以上にロックでヘヴィな作品となった。新作から“アヒル軍団”についてまで、リスナーの質問を一刀両断！

From UK

HATEBREED P.76

『ヘッドバンガーズ・ボール』の司会も務めるジェイミー・ジャスタは、現代メタル／ハードコア・シーンをさらに広い世界へと導く先導者でもある。音楽業界を生き抜きたいのであれば、彼の声に耳を傾けるべきだ。

Passion and Determination　P.60

LOVEBITES

“コロナを乗り越えて世界に栄光あれ”という想いを込めた､最新 EP『グローリー、グローリー、トゥ・ザ・ワールド』。その願いは激烈なサウンドとなり、作品から飛び出してくる。今回は楽曲の芯を担うフロント・ウーマン＝ asami が、メタル・シンガーとしての信念からアプローチ法までをじっくりと話してくれた。

From Hell with Love to Guitar!　P.96

聖飢魔Ⅱ

ギンギンとしたロック／メタル・ミュージックには、やっぱりカッコいいギター･サウンドが必須！　そこで、同シーンきってのギター・コンビネーションを誇る聖飢魔Ⅱのルーク篁参謀&ジェイル大橋代官に、エレキ・ギターの魅力を存分に語っていただきましょう！　地獄より“ギター愛”をこめて。

GHOST From UK P.104

2010 年のデビュー以来、各方面で大きな話題を振りまいてきたゴーストだが、スタートまでの道のりは、決して順風満帆ではなかった。首謀者トビアス・フォージによる、10 年の回顧録。

ALIEN WEAPONRY From UK P.110

今、最も勢いに乗る若手スラッシュ／ヘヴィロック・バンドとして、ニュージーランド出身の彼らをお薦めしたい。マオリの魂をそのサウンドに乗せる闘志溢れるサウンドは、未来のメタル・シーンを席巻するか!?

P.66

「THE 50 BEST ALBUMS OF 2020」から考察する日英メタル・ミュージックの同異点

またまたこの企画の時期がやってまいりました！　英『METAL HAMMER』誌が発表する年間トップ 50 アルバム・ランキングを、日本目線でチェック！　“なぜこのアルバムがこんな上位に!?”、“そもそもメタルか!?”まで、日本と欧米でのメタル認識の違いを分析&考察！

STARS' WORDS P.80
DISC REVIEWS P.118
METAL NEW GEAR P.123
CRYSTAL LAKE × KISS RUM P.126

Their Roars Break the Downtime!!

彼女たちの歌が暗闇を吹き飛ばす！

いつの時代も、力強い歌声は目の前の壁を打破するための助力となる。スポーツなどに限らず日常生活のなかにもたくさんの闘いがあり、そのとき音楽は応援歌となって背中を押してくれる。仕事に向かうその一歩、勉強と向き合うその一歩にやる気と勇気を注いでくれるのだ。

だから楽曲の先頭として飛び込んでくる歌には、体の内側から熱くなれるようなエネルギーが宿っていなければならない。こと強烈な音で武装したヘヴィメタル・ミュージックにおけるシンガーの歌声は、それらサウンドと対等に渡り合い、乗算され、巨大なエネルギーを発する。だからヘヴィメタルは、まさにエールとなる音楽だと言えるのではないか。

もちろんそこにジャンルや曲調の垣根はない。ましてや、男性ヴォーカル、女性ヴォーカルの差なんてない。爆走するヘヴィ・チューンであっても、美しいメロディに包まれたロック・バラードであっても、そこから放出されるパッションは同様にリスナーを鼓舞してくれる。エイミー・リーの力強く伸びやかな歌声、アレキシ・ライホの鋭く激情的なグロウル……本号に登場する多様なシンガー／ミュージシャンたちは、常に僕らが時代を進むための原動力になってくれるのだ。

まだまだ世界中が平常とはほど遠い、暗い靄に包まれている状態だ。またそれぞれに特有の逆境もあるだろう。それでも日々一歩ずつ前進し、光明を見出す。メタル・ミュージックのエールを受けて。

―― 岡見高秀（メタルハマー・ジャパン編集長）

Photo by Joseph Okpako/WireImage

EVANESCENCE
エヴァネッセンス

Latest Interview-1

Interview by Takahide“THUNDER”Okami
Translation by Tommy Morly

AMY LEE
エイミー・リー

デビューから 18 年、シーンのパイオニアとして光を放ち続けるエヴァネッセンスだが、今回リリースされる『ザ・ビター・トゥルース』は、オリジナル・スタジオ作としては実に 10 年ぶりとなる。その間にはメンバー・チェンジもあり、ヘヴィ・シーンにおけるトレンドの移ろいもあった。そのなかで“エヴァネッセンスそのもの”といえるエイミー・リーは、どのようなメッセージを本作に込めたのか。創造の源、ファンとの関係、シーンにおける女性ヴォーカリストとして……彼女が導き出した音楽の内面にある想いを聞く。

『ザ・ビター・トゥルース』
ユニバーサル

●通常盤（CD）／UICN-1101
●初回限定盤
デラックス・エディション
（CD＋DVD）／UICN-9038

スペシャルエディション・ボックスも発売！
【封入】CD × 2、カセット・テープ、ブックレット、アート・ポスター・プリント

今回に関しては、伝えたいことがあまりにもあって。

――本日は弊誌のインタビュー、ありがとうございます。

こちらこそありがとう。本当に日本が恋しくてたまらないの！　昨日と今日と日本のメディアから取材を受けているけど、おかげでホームシックみたいな感覚になっちゃっているわ。

――新型コロナ・ウィルスによる現在のアメリカの状況はいかがですか？（※１月末取材時）

今住んでいる周辺は全然問題ナシよ。もちろんニュースなんかで知っていると思うけど、私たちの国は不安定な状態にある。最近は新しいリーダーの選挙があって、彼に対して国民はみんな期待を込めているし、私は本当に何かが変わるんじゃないかと強く想っているわ。でも私たちはたくさんのことを経験してきたし、とてもヘンな時代に生きているとも痛感している。これは地球上の人たちみんなそうかもしれない。政

アルバムをこの時期にリリースすることには意味があって、それだけ私は吐き出さなければならない想いがあったということ。

治的なストレスを感じている人もたくさんいるわけで、ステイ・ホームで閉じ込められていること以上にみんなストレスを感じているんでしょうね。

――世界的にそのような状況下で、待望の新作『ザ・ビター・トゥルース』がリリースされます。実際には2020年発売予定でもあったようですね。

当初の予定ではそうだったけど、そこには障害があってね。アルバム自体は去年の段階で完成していたのよ（笑）。

――新作を作りたいという構想はいつ頃から？

2019年あたりからアルバムを作りたい……いや、作らなきゃと少しずつ考えていて。2017〜18年は『シンセシス』(2017年）に伴うツアーで、その後も私たちだけのロック・ショウでツアーもしていたわ。それが終わったあたりから"やっぱりルーツに戻らなくちゃ。私たちのサウンドを再発見しなくちゃ！　近い将来に向けて、このラインナップで今のサウンドを作らないと！"ということになったのよ。

――やはり、ツアーの合間を見て作業に入るという感じですよね。

2019年はライヴをしていたけど、ツアーの前後で一週間くらい集まって作曲のためのセッションを行なって。スケジュール感をハッキリと決めてはいなかったけど、曲の骨組みはできていて、クリエイティブな状態にいたの。2019年の終わり頃にはレコーディングに向けスタートが切れる状態で、すべての楽曲ができていたわけではなかったけど、いくつかレコーディングを開始して、去年3月のツアーに出るまでの時間を有効活用することにしたのね。今となってはあの時点で4曲完成させられていたのはラッキーだったと思うし、2020年中に発信もできた。リリースと制作を同時に行なうということは、ファンをいたずらに待たせないので、とても良かったとも思っているわ。

――純粋なスタジオ・アルバムとしては、前作『エヴァネッセンス』から10年という期間が空きました。当時、次作までにこれほどの時間が空くと思ってはいましたか？

それはどうかしらね（笑）。正直なところ私は、1stアルバム（『フォールン』2003年）を除けば、今までアルバムを作るたびに"これが最後の作品よ"と思ってやってきた。インスピレーションに素直に従って、ハートのなかに閉まってあるものをすべて吐き出すことは、私にとって大切なことなの。クリエイターとして、バンドの一員としてやっていくということは、人によって捉え方が異なるとは思うけど、私は完全主義じゃないかと思うほどかなり真剣にやっていて、制作やツアーを始めるとそれが自分のすべてになってしまうのね。私の時間や心のなか、そして思想のすべてが音楽一色になって、その一方でそれらが終わって家族と一緒にいる時間になれば、また地に足のついた普通の生活に戻ることができて。

――あなたのイメージどおりとも言えそうです。

だから私はその両者の間を行き来しているような感覚で、単に義務感だけではなく、"どうしてもそれをやらなければならない"という強い理由がなくてはならないの。

――なんとなく"そろそろ作るか"くらいの気持ちでは、行動に移せないと。

そう、ただツアーをすることは例外で、私は常にファンと接していたいと思うから、それ以外に理由なんて求めてはいない。でも新しいアルバムを丸ごと作るとなると、新しいインスピレーションを得なくてはならないわ。何か大きくて、自分の言葉で語らなければならない理由が必要なの。同じような音楽をくり返し作り続けるなんてもってのほかね。そうやって真剣に作った音楽を人々が聴いてくれたら嬉しいし、そこにはいつだって初めて音楽を作ったときの燃えさかる炎のような衝動が欲しいの。

――今回、その制作に心を向けるインスピレーションがあったということですね。それは一体なんだったんでしょう？

映画音楽やサウンドトラック、子供向け音楽を作っているときだったり、家族といるとき、子供が生まれたとき、そういったさまざまなことからインスピレーションを受けるけど、今回に関してはあまりにも伝えたいことがたくさんあって。バンドとして長くやってきて、特にこの10年の歩みで私は胸の奥にたくさんのことを感じてきた。そんな状況にも関わらず2020年はさらに強烈な一年だった。それで"ここで立ち上がらなくては！"というインスピレーションと決意を胸に秘め、私たちのまわりにある間違いに対して意思を表明することにしたの。アルバムをこの時期にリリースすることには意味があって、それだけ私は吐き出さなければならない想いがあったということなのね。

keyが下がっていくほど私は高く歌えるようになって（笑）。

――あなたの歌唱で幕を開ける「アートファクト／ザ・ターン」から、バン！と解放する「ブロークン・ピーセズ・シャイン」は、まさに新作への期待感をそのまま形にしたような、理想的な幕開けでもあります。この流れは強く意識したのでは？

そのとおりよ！　アルバムのオープニングに関しては、以前よりかなり明確なヴィジョンを描いていたわ。私は作曲しているときに"よし、これはエヴァネッセンス用の曲ね"なんて考えることはなくて、とにかく書いたものをバンドに持っていくの。そして一緒に音を出して、バンドとして使えるかを確かめてみる。最終的なプランや結論ありきで曲を書くのではなくて、音楽によってプランや方向性を決めればいいと思っている。

――なるほど。

この曲のイントロはかなり昔に書いていて、夜遅くホテルの部屋でパソコンの内蔵マイクを使って、隣の部屋の人を起こさないように静かな声で歌って作ったのよ（笑）。自分のなかから湧き上がってきた歌詞や思いが私のハートに響き、マントラのようになって没頭してしまったわ。この曲は3年前に亡くなってしまった兄弟について歌った曲で"あなたはいつも私と一緒にいる。私のなかにいるのよ"と歌っているの。

――歌詞を追わなくても、そういったイメージが伝わってくる音楽でした。そこからは一転、各パートがパワフルなプレイを聴かせる「ブロークン〜」へと続きます。

この曲のイントロはスコット・カークランド（クリスタル・メソッド）とのコラボレー

ションなの。私たちはツアーで出会い、互いにアイディアを送り合いながらほとんどのパートをインストゥルメンタルで作り、私の歌のアイディアも入れてそれがイントロとなった。この２曲を流れるようにつなげてみたら、アルバム全体のヴィジョンが浮かんできて。ただこの時点では「ブロークン〜」はサビ以降がまったくなくて、完成させること自体がチャレンジングな曲でもあって。アルバムの冒頭を飾る曲になるわけだから、グレイトかつヘヴィ、アルバム全体……ひいては私たちというバンドを象徴するようなものにしなくてはならなかったから、ハードルが上がってしまったのね。「ブロークン〜」のサビはニック（ラスキュリネッツ／プロデューサー）のスタジオでプリプロダクションのときに、９パターンくらい書いたんじゃないかしら（笑）。

――ヘヴィロックにありがちなギターのロー感だけでなく、ベースによる自然な低音感がしっかりとあり、それがバンドとしての生々しさにもつながっていると感じます。全体のサウンドとして目指したモノとは？

ティム（マッコード／b）と一緒に答えたいところね。それは彼の選択によるところも大きいけど、ニックによる力添えも大きいわ。ニック自身もベーシストだから、ロー・エンドについては彼なりの考え方もあるみたい。私は冗談めいて“3オクターブも下の世界が聴こえるけど、あなたクレイジーよ！”なんて言うこともあって。

――ハハハ、ヘヴィすぎて。

私たちはアルバムを作るたびに、自分たちにとって最高のものにしたいと思っている。それが必要であればヘヴィにさせたいし、それに伴ってチューニングをドンドン下げることがあるかもしれない。エヴァネッセンスがロック・バンドとして特別な状況に置かれている理由のひとつは、そもそも私が女性の声を持っているということだと思っている。クラシックなロック・ソングにベストだと言われているようなkeyと、私の声がマッチするkeyというのは異なっていることが多くて。

――つまりEやA、Gではなく、という。

そう。C、B、Dのkeyというのが私にとってピッタリなことが多くて、ほかのバンドよりもどんどん下がっていくことが多いの。

keyが下がっていくほど私はどんどん高く歌えるようになっていって、これって一般論とは真逆よね（笑）。アルバムごとにライヴで歌いやすいものを目指してきたけど、なぜだか曲を書くとドンドン高い音を使うようになっているのよね（笑）。

――それこそ、エヴァネッセンスの魅力のひとつでもあると思います（笑）。先行して公開された「イェー・ライト」はインダストリアル・ロック・テイストも入りつつ、昔ながらのエヴァネッセンス感もあり、新旧織り交ぜたファンの期待度を煽る楽曲でした。新曲を作る際、初期のサウンドを意識することは？

ある程度は意識しているわ。今までやってきたものが好きだし、私の核となっているものや好きなサウンドを常に大切にしてきたから。エヴァネッセンスという名のもとで20年近く音楽を作ってきたけど“とにかく何でもいいから、好きなものをやればいいわ”なんて考えることはなくて、私たちのファンや培ってきた歴史も大切にしていきたいの。

――ファンとしての気持ちも持っているということですよね。

私だっていち音楽ファンとして、その気持ちもわかっているから。ファンに満足感を与えることも然り、私自身エヴァネッセンスでいられることに満足感も感じている。“新たなサウンドを提唱した”と言われることはおもしろいことでもあって、それはアルバムにおいて従来なかったカラーを使ったということでもある。どの曲にも連れていってくれる場所があるけど、この曲は少し横道に逸れているようなところもある。だけど私はその逸れ具合も気に入っていて、それは自分に正直に作った結果だからでもあるでしょうね。

――どの曲にも共通する点として、歌唱のスケールが大きくなったということが挙げられます。それも曲に導かれて自然とそうなっていった結果？

私は常に成長しようとしていて、昔の自分たちの曲を聴くたびにもっとベターなやり方があるはず、と感じるの。『フォールン』での20〜21歳の頃の私の声は別物と感じるし、ナチュラルさはあるけどサウンドが今とは違うとも感じる。

――その要因とは？

“自信”……ね。それにテクニック的にはビブラートを闇雲に利かせないことや、歌詞の真ん中でブレスを取らないことなど、

ファンは大切だけど、彼らが期待するイメージをそのまま提供したいとは考えないのね。

常にそういったことを意識してガチガチな状態で歌っていたから。でも今は私らしくあることのみに集中している。私のハートのなかにあるものを純粋に届けることを大切にしていて、ほかの誰かみたいに歌おうとかそういったことは考えないわ。歌い始めた頃とは違い、もっと自由に歌えていると感じるの。

――またシンガーはアスリートと近い性質があると思います。年齢や体質の変化などで、声質や発声での体の使い方に何か変化はあったと思いますか？

そもそも、私の声は別物になったと思っているわ。今は話し声でさえ低くなっていて、昔の自分のインタビューの声を聴くと、まるで子供が喋っているように感じるくらい。でも、これってクールなことだと思っていて。もちろん加齢による影響もあるだろうけど、長年いくつものコンサートで歌ってきたことで、声質は大きく変わってきたと思う。具体的に何がとは説明できないけど、発声方法も変わってきたし細かなテクニックによるところもある。でも多くの部分は自然な変化とも言えるでしょうね。

困難で傷つくこともあるけど そこでは特に多くを学ぶことになる。

――この 10 年間で、バンド内における最も大きな変化は何だったと考えますか？

最大の変化といえば、やはりメンバー・チェンジね。テリー（バルサモ／元 g）はこのバンドのクリエイティブなプロセスにおける大きな原動力で、『ザ・オープン・ドア』（2006 年／ 2nd）では特に貢献してくれたコラボレーターだった。私たちはヴァイブを持っていて、彼がいたおかげでクリエイティビティを高く保つことができたの。クリエイティブさっていうのは単に作曲だけじゃなく、ライヴの作り方にも言えることよ。ライヴでどうグルーヴを作るのか理解していたけど、テリーがいなくなってその方法は変わってしまった。

――彼に替わり、ジェン・マジューラが加入します。

ジェンになったことで、曲を作る段階からバンドのダイナミクスも大きく変わったわ。テリーは私と一緒に Pro Tools を使いながらリフやメロディ、コード進行をいくつも提案してくれていた。今回もそういったことを各自が少しずつやっていたけど、その割合はかなり減ったと思う。私がひとりで書いたものをバンドに提案するか、バンド全体で集まってジャムりながらその場でアイディアを出すというやり方だったので、曲の作り方は大きく変わったポイントね。

――先ほどの話にも挙がりましたが、あなた個人としては、家族を持ったことがエヴァネッセンスでのアウトプットに影響をもたらせていると思いますか？

もちろん大きな変化を与えてくれたわ。私の心の大きな部分は息子で占められていて、彼の日々の生活をケアすることは私のキャリアの一部でもあるの。それによって大きく左右されるのはツアーを組むことね。6 週間もツアーに出るにはどうしたらいいのか？　最初の 2 週間は一緒に連れていき、学校が始まったら家に返して、しばらくしたらまたツアー先で合流して……みたいなことも考えなくてはならない。ティムにも小さな子供がいるから、同じように考えるわね。少し難しくはなったけどチャレンジングなことだし、私たちはそれに対してどうすればいいのか、みんなで向き合っている。互いの苦労もわかり合っているからこそ、問題なくやれているわよ。

――時間の流れによって自分たちの音楽的嗜好が変化していき、それが新曲に反映されたということは？

音楽的なインスピレーションは常に変化しているし、それは単に私たちが成長し続けているからなの。私はロックしか聴かないというタイプじゃなくて、どんなジャンルの音楽も聴いている。むしろ今のロックはどういったものなんのかを知るために、少し聴くくらいね。トラップなんかも好きで聴いていて、ビリー・アイリッシュは今の私のお気に入りよ。

――そうなんですね。

さまざまなものから影響を受けているし、それは音楽に限ったことではないわ。家族と一緒に過ごす時間だったりと、いろいろな経験から学ぶし、困難で苦しむような経験によって傷くこともあるけど、そこでは特に多くを学ぶことになる。人生そのものがインスピレーションを与えてくれて、それはもちろんシチュエーションや立場によってほかの人とは異なるし、チャレンジの意味も違ってくる。

――そして、そのときどきの経験が、音楽に反映されるという。

今までリリースしてきたアルバムは当然ながらすべて時期が異なっていて、そこにはそのとき過ごした人生の局面が反映されていると思うわ。そのときどきで伝えたいことは異なって然るべきで、もしそうでなければ単に音楽を作業として作り続けるだけの人間になってしまうわ。

――そういった変化は当然のことのようにも感じます。逆に、初期からのファンの気持ちを汲んで、そのフィールドから逸脱しないようにということも？

私はファンをハッピーにさせたいと思っているけど、昔からのファンたちと私たちが関係を保てているのは、そもそも最初から私自身が型にハマらずやってきたからでしょうね。私は固定化されたイメージに縛られたくないと考えているの。ファンは大切だけど、彼らが期待する私のイメージをそのまま提供したいとは考えていないのね。真実を本当の自分のなかから紡ぎ出していきたいし、それがファンに受け入れられているとも思っている。決まりきったサウンドをコピーし続けるくらいならほかのことをやっていたいわ。

――そういう意味では「フィーディング・ザ・ダーク」、「ベター・ウィズアウト・ユー」は昔からのファンにマッチする曲調とも言えそうですが、それも意図的ではなく自然の成り行きということですね。

それはおもしろい指摘ね。この２曲は異なるプロセスから生まれていて、作った時期も違っていて。「ベター・ウィズアウト・ユー」は最初からこのバンドのみんなで作った曲だけど、「イェー・ライト」、「フィーディング〜」、「テイク・カヴァー」はまったく異なるオリジンから来ていて、カラーも異なっている。私は外部のソングライターと組むことはせずに、基本的にバンドで曲を作ってきたのね。でも今回は例外的にウィル・ハントという、偶然ながら私たちのドラマーと同じ名前のプロデューサー／プログラマーとコラボレーションを行なっていて。

――彼は『シンセシス』のプロデューサーでもありますね。

これまでもずっと一緒に曲を書いてきたのね。実際に『エヴァネッセンス』と今回のアルバムにはそれらの曲が収められているのよ。「イェー・ライト」、「フィーディング〜」、「テイク・カヴァー」の３曲は私がウィルと10年くらい前から書き始めた曲で、やっとお披露目することができたわ。バンド全員が力を尽くしてくれていて、私ひとりでは想像がつかなかったくらいに素晴らしい仕上がりになった。いろいろあって10年間日の目を見ることがなかったけど、現在の形を聴いて、むしろ10年前の状態で出さずに良かったとすら感じているわ。

自分が女であることをネガティブに感じたことなんてなかった。

――デビューからは18年の月日が経ちました。それまでにもハードなサウンドのもとで歌う女性シンガーはいましたが、エヴァネッセンスが出てきたことで、その裾野は大きく広がったと思います。あなた以降の女性シンガーたちに、大きな可能性を示したのではないでしょうか？

そう言えるかどうかはわからないけど、そうであってほしいとは思うわ。あなたの言うとおり、私以前にもたくさんの女性シンガーがいて、私はインスパイアされてきた。特に私が聴いて育った90年代は多くの女性シンガーがいた。私はジャンルにこだわって考えたことはないけど、ロックやオルタナティブ・ロックの分野にはたくさんいたし、それが文化的にも受け入れられていたとも思っているの。トーリ・エイモスなんて私にはロックなアーティストだけど、彼女はポップとして扱われることもある。それでも私にとって彼女はロックなサウンドで、“何をやってもトーリ・エイモス”だったわ。ビョーク、ヴェルーカ・ソルト、ガービッジ、スマッシング・パンプキンズのダーシーだっていたし、彼女たちを観ていて、私は自分が女であることをネガティブに感じたことなんてなかった。

――それはロック・ミュージックの世界において、ということですよね。

私たちがシーンに入ってきたとき、ロックはまだ男の世界のように扱われていて、“男臭さを全面に押し出してこそロック”みたいに捉えられていたことがあった。

――ヘヴィ・ミュージックでは特にそうだったと思います。

そう、だから私は異端児扱いされていた。そのなかでやり続けてきたことで私たちはあらゆる意味で特別な存在となったけど、その道のりには常に障害やチャレンジすべきことが存在していたわ。それによって問題を感じる日もあれば、それがむしろ個性になったこともあったけど、どれもポジティブなこととして受け取り糧としてきた。ただほかと異なることっていうのは一長一短で、“メインストリームでやっていきたいのか？”、それとも“異なることをやりたいのか？”のどちらかを取るしかなく、私はその後者を歩んできた。

――ほかに類似がなく、さらにメイン・ストリームでもあるのがエヴァネッセンスだとも思います。

いまだにその意味がどういったものなのか完全に理解したわけではないけどね。激しいロック・シーンでは女性が一般的ではなかった頃から私たちは歩んできて、生き残れている。近年になってツアーに出て女性がフロントマンとしてステージに上がっているのを目にするし、もしくはバンド・メンバーが全員女性なんていうバンドも最近では珍しくなくなってきたけど、そういった光景を目にすると私自身嬉しいしインスパイアされるようなところもあるのよ。そうやって考えると、シーンに大きな変化が起こったのだと感じるわ。私が初めてフェスに出演した際は私だけが唯一の女の子で、ステージに女性が上がることなんて私以外ありえなかった。あのときはどうして私だけが女性だったのか、その理由や答えがわからなかったわ。

――今回は新譜についてからロック・シーンにおける女性シンガーとしてまで、貴重な話をありがとうございました。今年の後半、もしくは来年の早い時期に日本で会えことを楽しみにしております。

私もそれを願っているわ。本当にお願いよ！　私の体はラーメンを欲しているの（笑）。私はニューヨークに13年ほど住んでいたけど、パンデミックの直前に引っ越していて。おかげで近所にはラーメン屋なんて一軒もないし、美味しいラーメンが必要なの。ぜひ日本に戻って本物を味わいたいところよ！

――ハハハ、では来日の際は手土産としてラーメンを持っていきましょう！

本当に期待しちゃうわよ！　もし持ってきてくれたら、あなたたちとはベスト・フレンドよ（笑）。飛びっきりにスパイシーなトンコツラーメンをお願い！

――ぜひぜひ。そのときまで、体調に気をつけながらツアーをしてくださいませ。

日本のみんなも体に気をつけてね。バイバイ！

EVANESCENCE

Latest Interview-2

Interview by Takahide"THUNDER"Okami
Translation by Tommy Morly

WILL HUNT

ウィル・ハント

エイミーの歌声を支える楽器チームが一丸となることで、エヴァネッセンスならではのヘヴィ・サウンドが生まれているわけだが、そのなかでも本作にて重要な役割を果たしていると感じられるのがドラム・パートだ。ややもすると無機質にもなりがちな音像において、リアルなグルーヴを演出し、エイミーの歌声と他パートをより近づけ楽曲を持ち上げている。それを実践しているのが彼、ウィル・ハントなのだ。

ほかの楽器とシンコペーションすることでもっとグルーヴィになれるんだ。

――早速ですが、オープニング的「アートファクト／ザ・ターン」から「ブロークン・ピーセズ・シャイン」は、フロア＋ロー・タムとスネアでのスケールの大きいドラミングによって、楽曲の壮大さがよりアップしていると感じますね！

それはありがとう！

――ミックス具合も含め、ドラムが近く感じられます。プロデューサーのニックとは、どのようなサウンドを目指したのでしょう？

俺らはニックと作業ができて、とても満足しているんだ。だって彼は何よりも音楽ファンだからさ。2011年にアルバム（『エヴァネッセンス』）を作った頃の話に戻るけど、実は俺とニックはラウドネスの大ファンで。

――おぉ、そうだったんですか！

常にラウドネスのことばかり話していたし、ほかのスタッフが帰ったあと俺がドラム・キットに座ってニックはギターを取り、お遊びで彼らの曲をいくつもプレイしていたんだよ。それに限らず俺らは共通して好きなバンドや音楽がたくさんあって、同じ理解や感覚が体に流れている。

――そうなると、純粋に話が早くなりますよね。

今回のアルバムを作るとき、俺にはやってみたいアイディアがいくつかあって。それをひとりでやってもよかったんだけど、ニックみたいに素晴らしい人が側にいてくれたことで作業はよりはかどったよ。スタジオにPAシステムを組んで実際のライヴ音源サンプルを流し、俺が叩いたドラムとミックスしながら聴いて改めてプレイしてみたんだ。

――あの臨場感の演出には、そんな秘密の方法があったんですね。

大抵はシンバルとスネアがラウドだから細かい音作りがしづらいんだけど、この方法だと自由にバランス調節ができて、ユニークなサウンドに仕上げることができたよ。だからドラム・サウンドのなかの何かに気づいてくれたのはとても光栄なことだし、俺らはとにかく徹底的に追及していった。俺のほうからニックに何か提案をすると"じゃあこういうのは？　これもやってみよう"と、どんどんフィードバックがあって、それはリスナーからしても気づきやすいポイントだったのかもしれないね。

――「イェー・ライト」はエレクトリックも多く、生楽器であるドラムはそこに馴染ませること自体が難しくもあり、意識しなければいけないことも多かったのでは？

サンプルを始めとしたバックグラウンドで流す音楽は、おもにアンビエントや空気感を作るためのものなんだ。そもそもドラムってかなり基礎的な楽器で、特にリズムはリスナーがまず感知する最初の要素だよね。それにドラムによって特定のフィーリングやエモーションを表現することが可能だし、そもそもフィーリングやグルーヴを生み出しているのもドラムさ。この曲のヴァースはポップな要素もあって、ポップ・ソングで鳴らすべきドラムってどんなものかと考えるようなところがあった。俺らは自分たちを何かの形にはめることなく、クリエイティブに感じたことをプレイしている。その結果、この曲が持つべき雰囲気をしっかりと作り出すことができたんだ。俺にとっ

ひとつの部屋で音を出し合い、お互いにその場で刺激し合って生まれたんだよ。

てエレクトロニックな要素とともにドラムをプレイするというのは、ある意味パレットのなかの色を増やしておくようなものだね。

──ほかにも「テイク・カヴァー」などを筆頭にインダストリアル・ロック・ライクな曲をあくまでロック調に聴かせているところは、ドラムのグルーヴが全体を引っ張っているからだとも感じます。

　俺もそう思うよ。リズム的かつ音楽的なことが起きていて、ドラムがグルーヴを作り、ヴォーカルやギターがドラムのグルーヴとともにシンコペーションをしていて、ちょっとした心地よさを作っている。そのシンコペーションの置き場所が各パートごとに異なり、ちょっとしたポケットを作って耳を引き寄せるんだ。ギターだけでもグルーヴは作れるだろうけど、ふたつの楽器でひとつのものを作るとさらに強力になるんだ。ドラムってそれ単体だけでグルーヴを作れるけど、ほかの楽器とシンコペーションして組み合わせることで、もっとグルーヴィになれるんだ。俺は常にそうなるよう、土台となるグルーヴを作っていきたいと思っているよ。

ティムとオレがそろうことでさらに高みに至った気がする。

──「ウェイステッド・オン・ユー」の前

半はサンプリングでの音色だと思いますが、バンドがインしてからの、世界がパッと広がったアレンジがいいですね。これは誰のアイディアだったんでしょうか？

この曲はエイミーが持ってきてくれたんだ。具体的にはヴァースのピアノとサビ部分のアイディアで、それらをどうつなげるかまだ悩んでいたようだった。ともにピアノで弾き語っていたんだけど、ヴァースを聴いた瞬間にかなりスペイシーだと思ったし、アンビエントな電子ドラムで作ったものがマッチすると感じたよ。俺のドラム・キットには電子ドラムも組み込んであって、作曲の段階でもそれらを使えるようにしていたんだ。こうしたことで本当にたくさんの色が使えるようになったからね。

――実はリアルに叩きながら組み立てられていたんですね。

いろいろ実験をしてみんなに聴かせたら気に入ってくれて、ニックとエイミーは一緒になってサンプルをファイン・チューニングしてこのパートを作っていったよ。サビに入るところのフィルなんて実際にリアル・タイムでプレイしてみせたんだ。このアルバムはみんな事前に練ったアイディアを持ち寄ったところもあるけど、ひとつの部屋で音を出し合いヴァイブを感じ、その瞬間の音を出すことで進んだところがけっこうある。互いにその場で刺激し合って生まれたんだよ。

――ちなみに、ライヴではどのように再現しようと考えていますか？

このパートはスタジオでプレイしたとおり俺のドラム・キットでも再現できるから、ライヴでもこのままやることになるだろうね。もちろんライヴでもある程度はPro Toolsを使っているけど、それはアンビエントなキーボードやバンド・メンバーだけではカバーしきれない音を再生するのがほとんどだ。この曲の95%くらいは俺たち自身がライヴ状態で演奏していて、ドラムなんかほとんどすべて俺がプレイしているからさ。

――また本作では、ベースの存在感もいいアクセントになっていると感じました。エヴァネッセンスにおける、リズム体のコンビネーションの重要なポイントとは？

ティム（マッコード）は才能豊かなベーシストで、アイツのクールなところはベース・ラインのなかでメロディをしっかりと聴かせることだ。エキサイティングなラインを作るためのクールなセンスとフィーリングを持っているんだよ。

――そう感じますね。

それに俺とティムはキック・ドラムとベースのパターンについてかなり深く突き詰めていて、ふたりだけで多くの時間を費やしている。レコーディングでもふたりだけで録音するってことがけっこうあって、“今のラインをこんな感じで続けて、ここにスライドを入れてみたら？”なんて具合に俺のほうから提案することもあったよ。だから最終的なサウンドに至るまでに、しっかりとしたデザインを引いているんだ。ティムが才能豊かなのは明らかだけど、それだけではなく、俺たちふたりがそろうことでさらに高みに至っている気がするよ。

――「ベター・ウィズアウト・ユー」でも、ベースとドラムの生々しいプレイが迫力を演出しています。ここも、あなたとティムのコンビネーションを語るいい例と言えそうですね。

俺もそう思うよ。この曲っておもしろくて、レコーディングした日……あれは彼の娘の誕生日だったかな？　ティムはひと足

カムバックした１発目のライヴは、今まで最もビューティフルなステージになるだろうね！

先に帰宅したんだ。残った俺たちは作業を続け、ニックが代わりにベースをプレイしてヴァースのパート書いてさ。

――ほうほう。

翌日ティムは俺たちが作ったものを聴き、それから俺と彼でリズムに関して深く突き詰めていった。サビはドラムとベースによる見せ場にもなっていて、キックのパターンやティムが多用しているスライドなんかは曲にエネルギーを与えているよね。だから君が言うとおり、このサビのパートは俺とティムのコンビネーションを示す代表的な例だと思うよ。

優先するべきは、メンバーが快適にプレイできる環境を作ること。

――これまでDark new Day、一定期間ですがブラック・レーベル・ソサイエティ、最近ではヴィンス・ニールを含め各サポートなど幅広いバンド活動もしていますね。当然曲調は違いますが、各バンドでプレイする際、それぞれのカラーに合わせてドラム・プレイのベーシック自体にも違いをつけているものですか？

俺は常にそのバンドの音楽性にリスペクトを持っている。俺がエヴァネッセンスに参加したのは2007年のことで、２枚目のアルバム（『ザ・オープン・ドア』）のレコーディングが終わったあとのことだった。だからそこでレコーディングされたドラム・パートに対して、リスペクトを持って叩いていったよ。それでいて俺のエネルギーやバンドにもたらせたい力を発揮していったんだ。グルーヴはそのままに、俺なりのパワフルさを加えていったという感じだね。

――なるほど。

今作のデモを作っていたときは細かいパートもかなり考えていったけど、それでいてとにかく自分らしさを残すことも重要視したよ。アルバムを作るときは自分のなかで常に最高のものを出そうとする、自分との戦いがあるんだ。それに対してメンバー間で意見の相違があるのはプロセスとしては健全だし、当たり前のことだと思っている。みんな頭のなかにあるのは、最高のアルバムを作りたいという願いだからね。互いにリスペクトを持っていて、ニックやエイミーに“ちょっとそこ叩き過ぎじゃない？”なんて言われれば本当にそうなんだろうし、そこは気持ちを切り換えて“じゃあ自分に何ができるんだ？”と考えるよ。

――“バンドのためが一番”ですからね。

そう、自分だけが腑に落ちるところを探すのではなく、みんなが納得できるところを目指すんだ。ときにはクレイジーで滅茶苦茶に速いものを叩くこともあるけど、そういったものはスタティックXやBLSでやればいいことさ。俺個人としては、テクニックの幅を開拓するという意味でも、そのときにベストなものをやっていきたいと思っているよ。

――同じエヴァネッセンスということでは、『フォールン』の曲を叩くときは当時のノリを再現するようになど、作品の時代に合わせプレイするなどはある？

『エヴァネッセンス』と今回のアルバムはともに自分自身のスタイルだから、それをプレイするのはとてもナチュラルで簡単なことだよね。しかし1stアルバムはジョシュ・フリーズが叩き、2ndアルバム（『ザ・オープン・ドア』）はロッキー（グレイ）だった。俺とロッキーのドラミングはかなり異なっていて、彼のスタイルを学ぶことはおもしい経験にもなったね。実際グレイトだと感じることも多々あったし、「ウェイト・オヴ・ワールド」は演奏して楽しい曲だったね。そういったものにはリスペクトを持って接し、あまり大きく変えずにあくまでも俺のパワーとフィーリングを加えるくらいの気持ちでやっているよ。ジョシュによるかなりシンプルなプレイは『フォールン』の曲調ともマッチしていたし、むしろ俺が解釈する余白が残されていたような気もするよ。ヘヴィなグルーヴとパワーを加えたとしても曲そのものを大きく変えるようなことはしないし、いうなればもっとスイングさせるように演奏しているね。

――やはり、そこには曲やバンドへの尊敬が第一にあると。

“トミー・リーの代役としてモトリー・クルーで叩かないか”と電話をもらったときのことを思い出すと……まず何よりも俺は彼らの大ファンだったし、彼らの曲は体に馴染んでいた。とはいえ実際には２時間半のフル尺なわけで、子供の頃に聴いていた曲ばかりではなく、コピーしてこなかった曲もプレイしなくてはならない。そういった環境でバンドに参加するとなると、可能な限りレコーディングに忠実になるようにする。そこから時間をかけて少しずつ自分らしいスタイルを無理なく混ぜ込むようにしていて、『カーニバル・オブ・シンズ』ツアーの最後の７公演を初参加にして乗り切ったんだ。

――あのときは、そういう方法論で参加していたんですね。

誰かの代役で参加するような形になったとき、優先すべきはバンド・メンバーが快適にプレイできる環境を作ることだと考えている。エヴァネッセンスに関してはもう13年目くらいになるのかな？　長い間やってきたこともあって自分らしいパートをどんどん出してきたし、それでいてみんなが快適でいられるようにやってきたつもりさ。最終的には一層ヘヴィでグルーヴィになっているけど、どのバンドでも最初は“オリジナルに忠実に”というところを大切にしてきたよ。

――さて、本年秋頃からはツアーも検討されているとのこと。これは各国の頑張りと我慢、そして神様の力を信じてという感じですよね。

俺らだってライヴがしたくて腹ペコだし、喉だってカラカラさ！　これは日本やアメリカ、ヨーロッパ、南米だけじゃなくて世界中のみんながそういう状態だよね。先進国はどこも努力をして解決に向かおうとしていて、アメリカでは最近になってやっとトランプという弊害がいなくなり普通の生活に戻ろうとしている。俺らミュージシャンやパフォーマーたちは、ファンや友人の前に出る機会にとても飢えていて、みんなが喜んでくれるならぜひともプレイしたいよ。俺から言えることは、望みを捨てずに辛抱強く待つということ。バンドは絶対に戻ってくるし、こっちもそのときが待ちきれないという感じさ。カムバックした際の１発目のライヴは、俺たちが今までやってきたなかで最もビューティフルなステージになるだろうね！

艶麗なるメタル・サウンドのしらべ

女性シンガー躍進のヒストリー

文：舩曳将仁

Profile
1974 年生まれ。大阪在住の音楽ライター。CD ライナーや雑誌などで執筆。著書に『ブリティッシュ・ロックの黄金時代』ほか。メタルとは関係ないですが、娘と『魔法×戦士マジマジョピュアーズ』を観て以来、ガールズ・パフォーマンスユニット Girls2 を応援しています。

先のインタビューでエイミーが語っているように、彼女が影響を受けたバンド、そして彼女たちから影響を受けたバンドまで、メタル・シーンには多様な魅力を持った女性シンガー・バンドが多く存在する。ここではその歴史彩る艶麗な女性シンガーたちを見ていこう。

Photo by Denise Truscello/WireImage

2020 年末、BABYMETAL が『NHK 紅白歌合戦』に出演し、代表曲のひとつ「イジメ、ダメ、ゼッタイ」を披露した。日本で最も伝統ある音楽番組に、ヘヴィメタルが触れた歴史的瞬間だった。少なくともヘヴィメタルに対して背徳的、あるいは退廃的な印象を抱いている人に対して、同ジャンルの健全な側面を知らしめることにはなったと思う。

特に近年は健全な女性メタル・バンドの活躍華々しいものがあり、もしかすると今後の『紅白』に LOVEBITES や Aldious、BAND-MAID などが出演するかもしれないと夢を見たファンもいたのでは？

その日が来るのを楽しみに、ここではハードロック／ヘヴィメタルのジャンルにおける女性シンガー躍進の歴史を振り返るとともに、今注目のバンドなどを紹介したい。

女性ロック・シンガーの系譜

女性ロック・シンガーのパイオニアといえば、ビッグ・ブラザー＆ザ・ホールディング・カンパニーのジャニス・ジョプリン、そしてジェファーソン・エアプレインのグレイス・スリックが挙げられるだろうか。いずれも 1967 年のデビューである。以降、「ヴィーナス」をヒットさせたショッキング・ブルーのマリスカ・ヴェレスなど、ハード系サウンドでパワフルに歌う女性シンガーがロック・シーンへ登場することになる。

より活発になるのは、1960 年代後半から 1970 年代前半のイギリスで、プログレッシブ・ロックのルネッサンスやカーヴド・エア、ジャズ・ロックのアフィニティ、ハードロックのフュージョン・オーケス

トラ、キャタピラ、ベイブ・ルースなど、女性シンガー入りロック・バンドが登場する。なかでもメジャー・シーンで注目を集めたのが、スージー・クアトロだった。

アメリカでガールズ・バンド、プレジャー・シーカーズのメンバーとして活動後に渡英。1973年に発表したソロ・デビュー・アルバム『スージー・クアトロ』が、ヨーロッパ各国や日本で大ヒットする。体にピッタリとフィットするジャンプスーツを着てベースを弾きながら歌う姿はもとより、“ベースが子宮に響くのよね”といった発言でも男性ファンを虜にした。

そんな“女性シンガーのセクシーな魅力”を武器にしたのが、1976年にデビューしたザ・ランナウェイズだった。コルセット&ガーター・ベルト姿で歌うシェリー・カーリーは、今見ても強烈な印象を与える。あの篠山紀信が彼女たちのセクシー・グラビアを撮影したことでも知られるが、良くも悪くも<女性ハードロッカー＝セックス・シンボル>というイメージが植えつけられることとなった。

ランナウェイズと同じ1976年にデビューしたブロンディは、ニューヨーク・パンク・シーンから登場したが、紅一点デボラ・ハリーのセクシーな魅力が話題に。そんなセクシーさを過激な方向に振り切ったのが、1978年デビューのパンク・バンド、プラズマティックスだった。同バンドの女性シンガーであるウェンディ・オ・ウィリアムズは、乳首に黒テープを貼っただけのトップレス&パンツといったほぼ全裸状態でパフォーマンス。彼女たちのことは日本の音楽雑誌でもたびたび紹介されていた。

このセックス・シンボル化に決然とノーを表明したのがハートだった。アンとナンシーのウィルソン姉妹により結成されたハートは、1976年にデビュー作『ドリームボート・アニー』を発表。すると、ハートの所属レコード会社が、アンとナンシーの肩まで裸の写真と《ハートのウィルソン姉妹が告白、「私たち、はじめてだったの！」》というコピーつき広告を雑誌に掲載。ハートはこれに激怒して、同レコード会社を離れている。

今もって、ドッシリとした低音を鳴らし続けるスージー・クアトロ。2019年にもソロ作をリリース。

1980年代にはヘヴィメタル・ブームがあり、ガールスクールやロック・ゴッデス、ファントム・ブルー、チャステイン、ヘリオン、健康的なプレシャス・メタルなどのガールズ・バンドや女性シンガー入りバンドがデビューしている。しかし、まだまだハードロック&ヘヴィメタル・シーンは男社会だった。

MTVの登場もあって視覚に訴える要素の重要性が増すと、ハードロック&ヘヴィメタル系アーティストのPVにはセクシー系女性がエロさ全開で出演というのが定番となる。1980年代に登場したリー・アーロン、パット・ベネター、元ランナウェイズのリタ・フォードなどの女性シンガーたちも、アルバム・ジャケットやグラビアでセクシーな衣装やポーズを要求されることに。また、ビッチのベッツィやグレート・キャットといった、過激なセクシーさを個性とする女性アーティストも登場している。

エヴァネッセンスのヒットがすべてを変えた

セクシーさが求められたハードロック&ヘヴィメタル系女性シンガーの在り方は、1990年代中頃に変化の兆しを見せる。

まずは1995年、プログレ・メタル・ブームの追い風を受けたアメリカのラナ・レーン、男性デス声＋女性ソプラノという“美女と野獣”スタイルを打ち出したノルウェーのシアター・オブ・トラジディーがデビュー。さらに、オランダのザ・ギャザリングが、女性シンガーのアネク・ヴァン・ガースバーゲンを迎えて『マンディリオン』を発表している。ここがひとつの画期となる。

次なる爆発は1997年で、オランダからシャロン・デン・アデルのウィズイン・テンプテーションが『エンター』で、フィンランドからターヤ・トゥルネンのナイトウィッシュが『エンジェルズ・フォール・ファースト』でデビュー。イタリアからはクリスティーナ・スカビアと男性ヴォーカルを有したラクーナ・コイルが1st EP『ラクーナ・コイル』を発表した。これらのシンフォニック・メタル&ゴシック・メタル系バンドの女性シンガーたちは、セックス・シンボルではなく表現者であり、各バンドの音楽性の軸として存在していた。

以降、2000年代突入までに、スペインのダーク・ムーア、アメリカのレイン・フェル・ウィズイン、オーストラリアのチャリス、

ウィズイン・テンプテーションも、欧州では大きな人気を博している。フロントウーマンのシャロンは、エイミーとともに、英『METAL HAMMER』誌の表紙もかざった。

プログレッシブな曲想と端麗な歌声で一時代を築いたラナ・レーンは、90年代の女性メタル・シンガーの代表とも言える存在だ。

クリスティーナ擁するラクーナ・コイルも、日本と欧州とで人気の差があるバンドのひとつ。日本でのブレイクを期待したい。

イギリスのマジェンタ……などなど、各国から女性シンガー入りシンフォニック＆ゴシック・メタル・バンドが登場することになる。その動きをメジャー・シーンへ一気に引き上げたのがエヴァネッセンスだった。

女性シンガーのエイミー・リーがフロントを務めるエヴァネッセンスは、2003年に発表したメジャー・デビュー作『フォールン』で米3位、英1位を記録。世界で1400万枚、グラミー賞の最優秀新人賞などの獲得というビッグ・バンを起こした。日本でもゴールド・ディスクを獲得するほどの売り上げを記録している。以降はエイミー・リー以外のメンバーが頻繁に入れ替わるが、出すアルバムのすべてがヒット。女性だからこそ表現できるヘヴィメタルがあることを世界中に知らしめたのだ。

mini review

『フォールン』

●エヴァネッセンス

沈鬱な音色のギター・リフをメインにしたゴシック・ロック・サウンドというだけならほかに埋没したかもしれないが、エイミー・リーの愁いに満ちた中低音、切なさをたたえながら伸びあがる高音を駆使した表現力豊かな歌声が、独自の美麗世界へ誘う衝撃のデビュー作。

多彩なヘヴィメタル系女性シンガーの世界

エヴァネッセンスの大成功以来、女性シンガーのヘヴィメタル・シーンへの進出が促進された。今ではほぼ毎月のように、その手の新譜が発売されるという状況になっている。

ディーヴァ系シンガー入りシンフォニック・メタル、ゴシック・メタルのジャンルにおいて、特に豊作といえるのがイタリアだ。壮大な物語に基づいたアルバムで人気のエインシェント・バーズ、元テンペランスのキアラ・トリカリコが歌うムーンライト・ヘイズ、男女ツイン・ヴォーカルのアストラリウムやシンヘレシーなどがいるが、真打ちはアングラのファビオ・リオーネが女性シンガーのジオルジア・コレルオーリと組んだエターナル・アイドルだろう。2020年発表の2作目『ルネッサンス』では、女性シンガーがクラウディア・レイラインに交代しているが、シンフォニック・メタル・ファン悶絶もののアルバムだった。アメリカからは、アヴァンタジアへの参加で知られるエイドリアン・カワンが歌うセヴン・スパイアーズ、本国でも人気上昇中のエッジ・オブ・パラダイス、マイケル・キスクとのデュオで知られるアマンダ・サマーヴィルのトリリアムなどがいる。

ある意味では正統派女性シンガー・バンドと言えるエッジ・オヴ・パラダイス。マルガリータ・モネは鍵盤もプレイするなど、マルチに活躍。

エイシェント・バーズ。イタリアのバンドらしいスケールの大きい楽曲には、やはりサラ・スクワドラーニのハイ・トーン・ヴォイスがよく似合う。男声デス・ヴォイスが絡むのも定番のスタイルと言えるか。

このジャンルではヨーロッパも盛況この上ない。スウェーデンにはザ・マーダー・オヴ・マイ・スウィート、メロディック・ドゥーム系のアヴァタリアムなどがいる。テンペランスのミケーレ・グアイトーリが歌うオーストリアのヴィジョンズ・オブ・アトランティス、メリッサ・ボニー率いるスイスのアド・インフィニトゥム、同じくスイスのフォーク・メタル・バンドのエルヴェイティや元エルヴェイティのメンバーで結成したセラー・ダーリン、ドイツのヴィジョナティカやビヨンド・ザ・ブラックなど枚挙に暇がない。

元ナイトウィッシュのアネット・オルゾンがソナタ・アークティカのヤニ・リマタイネンと組んだザ・ダーク・エレメント、そのアネットがシンフォニーXのラッセル・アレンと組んだアレン・オルゾン、元ストラトヴァリウスのティモ・トルキがチリ出身のカテリナ・ニックスをシンガーにしたケイオス・マジックなど、大御所たち絡みのプロジェクトも精力的にアルバムを発表している。

アネット＆ヤニというビッグ・タッグが話題となったザ・ダーク・エレメント。

パワー・メタルやメロディック・メタル寄りバンドの最右翼といえば、アメリカのヘイルストームだろう。グラミー賞も獲得してヒット作を連発と今後の活躍が期待される。モデル＆女優のテイラー・モムセンが歌うプリティー・レックレスは、2014年発表の２作目『ゴーイング・トゥ・ヘル』で米５位を記録。アメリカを代表するオルタナ系ヘヴィロック・バンドとしての存在感を放ち続けている。２月リリースとなった『デス・バイ・ロックンロール』もタイトルどおりかなりヘヴィな内容だ。

カナダには、４オクターブの声域を持つブリトニー・スレイズがいるアンリーシュ・ジ・アーチャーズ、トランス・シベリアン・オーケストラに起用された実力者ローザ・ラリッチウタを有するブラック・ローズ・メイズなどが注目株。スウェーデンのアマランス、メタライト、レキソリア、トリプル・ヴォーカルとトリプル・ギターの大所帯によるブラザーズ・オブ・メタル、フィンランドの国民的人気バンドのバトル・ビーストなど、北欧はメロディック・メタルも逸材ぞろいだ。

すでに名の知れたミュージシャン絡みでは、アドレナリン・モブのマイク・オーランド率いるハーチャリオット・アウェイツ、元ハロウィンのウリ・カッシュが在籍しているラスト・ユニオン、ビー・ザ・ウルフのフェデリコ・モンデッリが関わるフローズン・クラウンとメロデス色強めのヴォルトゥリアンなどが、さすがの高水準アルバムを発表している。ドイツには、デストラクションのシュミーアがプロデュースしたバーニング・ウィッチーズ

ルックスの良さとハードな歌声のギャップも魅力であるテイラー・モムセン。

mini review

『イントゥ・ザ・ワイルド・ライフ』
●ヘイルストーム

2013年にグラミーのベスト・ハードロック／メタル・パフォーマンス賞を獲得し、満を持して発表した３作目。芯の太いド直球のハードロックをかまし、リジー・ヘイルのヴォーカルも強靭さを増しているという、米５位のヒットも当然の傑作メタル・アルバム

エリーゼ・リードを含む３ヴォーカルで個性的なコントラストを聴かせるアマランス。ダンサブルかつキャッチーな楽曲は、純メタル・ファン以外の支持も高い。

エリーザ・スカルペッチョとクリスティアーノ・ティペリ（g）が中心となり結成されたラスト・ユニオン。2018年にはジェイムズ・ラブリエともコラボ。

近年の女性グロウルと言えば、アーチ・エネミーが立役者。先代のアンジェラ・ゴソウからアリッサ・ホワイト=グラズへと、その伝統は受け継がれていく。

ヨハナ・サドニスの妖艶な歌声とヘヴィロックが融合するルシファー。ルックスに違わぬ 60s サイケの雰囲気もまとった、独自の酩酊感が心地いい。

がいるが、驚きはベテラン・バンドのシナーで、2019 年の新作『サンタ・ムエルテ』から元エターナル・アイドルのジオルジア・コレルオーリを正式メンバーに迎えている。イギリスの新人女性シンガー、シェイ・ケインが 2020 年に発表した同名タイトルのデビュー作は、クレイジー・リックスのダニー・レクソンが全面的にバックアップし、1980 年代のメタル愛に溢れた内容だった。

デス・メタルやエクストリーム系女性シンガーといえば、日本ではアーチ・エネミーの前シンガー：アンジェラ・ゴソウ、現シンガー：アリッサ・ホワイト=グラズが有名だが、その先駆といえるのは、同じくドイツ出身のホーリー・モーゼスで歌うサビーナ・クラッセンだ。クリーン・ヴォイスとグロウルの使い分けが驚異的なタチアナ・シュマイラックが歌うウクライナのジンジャー、チャーミングな容姿と裏腹のデス・ヴォイスの使い手トレイシーがいる台湾のソレムンは日本でも注目が高まっている。

ほかにも、ヘラコプターズのニッケ・アンダーソンが加入したドイツのルシファー、カナダのダイアモンズ、ジャニス・ジョプリンとも比較されるエリン・ラーソンがいるスウェーデンのブルーズ・ピルズなど 70 年代風味のハードロック・バンドでも女性シンガーの活躍が目覚ましい。

mini review

『King Of Everything』
●ジンジャー

ウクライナ産プログレ・メタルコア・バンドの 3 作目。起伏の激しい楽曲、クリーン・ヴォイスとグロウルを使い分けるタチアナ・シュメイラックの美と凶暴さの交差するヴォーカルが聴き手を圧倒する。最新ライヴ作『Alive In Melbourne』もぜひ。

爆発的な盛り上がりを見せる日本のガールズ・メタル・シーン

日本のハード＆メタル系女性シンガーのパイオニアといえるのは、1974 年にデビューしたカルメン・マキ＆ OZ のカルメン・マキだろう。彼女は 1981 年にカルメン・マキ＆ 5X というバンドを結成している。1983 年には、ラウドネスの樋口宗孝がサポートした浜田麻里がデビュー。1985 年には寺田恵子が歌うガールズ・バンド SHOW-YA、ハワイ出身のステファニー（のちに SHOW-YA へ加入）がデビュー。1986 年には白塗りメイクの HIZUMI が歌うヘヴィロック・バンドのジュラシック・ジェイド、1987 年には赤尾和重が歌うテラ・ローザ、さらに同年には田村直美がカーマイン・アピス、トニー・フランクリン、北島健二と組んだパールでデビューするなど、1980 年代を通じて女性シンガー入りハードロック＆ヘヴィメタルの動きはあったが、独自のシーンを形成するまでに至らなかった。

再び動き出すのは 1990 年代の終わりで、1999 年に陰陽座がデビュー。黒猫をシンガーとし、和の要素とヘヴィメタルを融合させ

日本におけるハードな女性ヴォーカルと言えば、HIZUMI を忘れるわけにはいかない。新ラインナップとなっても、ジュラシック・ジェイド節は健在だ。

た彼らの音楽性は洋楽ファンにも注目された。2000年には松岡あの字がギター＆ヴォーカルを務める五人一首、ANZAが歌うHEAD PHONES PRESIDENTがデビューしている。2007年には、Fukiをフロントに据えたLIGHT BRINGERがミニEPを発売。同年にはインディーズで活動していた妖精帝國がヘヴィメタルにシフトしてメジャー・デビューしているが、まだまだ女性シンガーとヘヴィメタルの関係は密でなかった。

そこに楔を打ち込んだのが、2009年にEP『Dear Slave』を発表したALDIOUSだった。アゲ嬢を思わせる派手なヴィジュアルに拒否反応を示した人も少なくはないが、女性らしいエレガントさを備えたヘヴィメタルの魅力に惹きつけられたファンはそれ以上に多かったはず。ALDIOUSの成功を皮切りに、以降はさまざまなジャンルの女性シンガー入りヘヴィメタル・バンドの登場となるが、女性ばかりのバンドと女性がシンガーを務めるバンドに大別できる。

女性ばかりのバンドとしては、結成10年を超えて貫録さえ感じさせるMary's Blood、メイド服に身を包んだキュートな女の子たちが気合の入ったサウンドを聴かせるBAND-MAID、キャッチーなメロディが魅力のBRIDEARなどがおり、いずれも海外でのライヴも経験済みの実力派だ。2017年にデビューしたLOVEBITESは海外でも評判が高く、女性バンドというカテゴリーを越え躍進が期待されている本格派と言えるだろう。ほかにもTHE SHEGLAPES、実力者を集めたNEMOPHILAなど新鋭のガールズ・バンドが続々とデビューしている。

女性シンガーがいるバンドとしては、蛇石マリアが歌う正統派メタル系のMardelas、佐鳥ひなが歌うCerveteri、Naoが歌うパワー・メタル・バンドのVARIOUSTORM、元LIGHT BRINGERのFuki有するメロスピ系のUnlucky Morpheus、ALDIOUSの初代シンガーRamiが結成したRAGLAIA、メロデス色のあるDEVIL WITHINやLeopardeathなどがいる。シンフォニック系のシェーンベルク、GRAND FINALE、Amilliyah、Octaviagraceなども、それぞれに独自の世界観を持ったアルバムを発表している。

ヘヴィなサウンドとANZAのクリアかつ叙情的な歌声は、まさにこのジャンルの王道。2021年は本格的な活動に期待したい。

海外での知名度もじわじわと上げているBRIDEAR。アニソン的要素もあり、KIMIの日本語ヴォーカルも広い層に受け入れられそうだ。

“ヴァンパイア・メタル”を標榜する矢島舞依、IBUKI、CyntiaのSAKIなどソロで活躍しているメタル系シンガーもいて、まさに百花繚乱状態だ。また、ダンスとメタル・バンドの融合をめざしたASURA、Blood Stain ChildのRYUと声優の小岩井ことりのユニットであるDAWといった新しいスタイルを模索する動きもあるなど、今後も日本における女性メタル・シーンから目が離せない。

mini review

『Unlimited Diffusion』
● ALDIOUS

スタジオ・フルとしては現時点での最新作。シンガーは前任者のRe:NO。エレガントなヘヴィメタルの基礎はそのままに、メジャーで通用するキャッチーなメロディ、楽曲のバラエティさも備えるといった貫禄を見せつけている。現シンガーR!Nを迎えた新作の登場が待たれる。

『エレクトリック・ペンタグラム』
● LOVEBITES

海外ライヴを経て、日本でも注目が集まるなか発表された3作目。高速ツーバスや華麗なツイン・リード・ギターの切れ味は前2作を上回り、asamiのヴォーカル・パフォーマンスも表現力が倍増。海外を手中に収めることも夢ではないと思わせる彼女たちの最高傑作だ。

『ラディアント』
● Octaviagrace

アニメ系ジャケットから軽く見ていた自分を反省。Jポップとヘヴィメタルを絶妙の案配でミックスしている。シンガーの実稀とギターのHANAKOのルックスの良さもあり、ヘヴィメタルというジャンルをメジャー・シーンへ押し上げてくれることを期待したい。

さて、ここまでさまざまな女性シンガーを紹介してきたが、何といっても、その歌声や立ち居振る舞いが醸し出すエレガントさやキュートさは、男性にはなかなか表現できないものだ。

もちろんセクシーさも武器となるし、思わず守ってあげたくなるか弱さ、はたまた凛としたカッコよさなど、今では女性シンガー／女性バンドが表現するスタイルの幅も多彩を極め、それぞれが新しい魅力を振りまいている。

“女性だから”とか“女性らしい”などという言葉には注意が必要な昨今だけど、“女性シンガーだからこそ”という部分に抗いがたい魅力があるのも厳然とした事実なのだ。

The latest article from UK

Text by Ali Cooper
Interpretation by Mirai Kawashima
Original by『METAL HAMMER』344

THE PRETTY RECKLESS Taylor Momsen

プリティー・レックレス　テイラー・モムセン

前作『フー・ユー・セイリング・フォー』から5年、プリティー・レックレスが4枚目のアルバム『デス・バイ・ロックンロール』を生み出した。P.23にもあるように、もともとは女優であったテイラー・モムセンを中心とした当バンドであるが、そのサウンドはハードかつロッキンであり、テイラーは激情的な音楽のなかで女性ヴォーカルならではの艶も利かせる。2011年にはエヴァネッセンスのツアーに帯同するなど、本格的な歌声でロック・ファンを納得させてきた。今回はそんなテイラーに、バンドの新時代や夢のコラボレーションの実現、さらには"ガラクタの虎"について、多種多様な質問をぶつけてみた。

『デス・バイ・ロックンロール』
ソニー／ SICP-31419
まさに"死ぬほどロック"な1枚に仕上がった4thアルバム。テイラーの歌声は作品を追うごとにハードな太さを携え、ヘヴィなギターと相まって非常にドライビンに轟く。表題曲では全米ロック・チャート1位を獲得。またトム・モレロを始めとする、彼女がリスペクトするゲストの参加も聴きどころ。

――ニュー・アルバムはどんなサウンドになっているの？

素晴らしいわ！　みんなに聴いてもらうのが本当に楽しみ。リリースまでとても時間がかかって、じっとしているのが苦痛だったくらいよ。余計なことは言いたくないけど、このアルバムには自信がある。いろんな面でね。おそらく私たちのベストなアルバムよ。このバンドが生まれ変わったというか、いろいろな意味で、まるで 1st アルバムであるかのように感じるもの。

このアルバムで成し遂げたことは、体の芯から誇りに思っている。バンドの新しい章よ。このレコードには命を救われたし、みんなに聴いてもらえるなんてとてもエキサイティングだわ。

――ニュー・アルバムを聴いて、私たちは泣くでしょうか？　それともヘッドバンギングをするでしょうか？

どっちもじゃないかしら！　このレコードには、あらゆる波長が含まれているわ。闇で始まり、光で終わって、聴くものを旅に連れ出すの。前半が気に入らなくても、後半に何かを見い出せるでしょうし、その逆もある。世界中を飛び回っていた頃からの経験がすべて含まれているんだから。

このレコードの大部分は、私たちの人生において、突如としてわずかな期間に起こった多くの悲劇、喪失によって作られているの。クリス・コーネルの死、さらに私たちのプロデューサー、ケイトー・カンダワラのこともそう（※ 2018 年にバイク事故で死去）。（ケイトーは）地球上で一番の親友だったから、私はとどめを刺されたような気分だった。鬱の穴に落ちて、薬物を乱用し、そこからどう抜け出せばいいかわからなかったの。

それを救ってくれたのが音楽だった。穴から抜け出して、続けていかなくちゃと思わせてくれた。このレコードを書くことが、私に残された唯一のものだったから。アルバムを聴けば、それがわかると思うわ。

――今後のアルバムで、誰でも好きな人とコラボできると言われたら、誰を選ぶ？

うーん、わからない。私は音楽をそういう風に考えていないから。コラボレーションというのは自然にやるものだし、このス

Harley Darling

トリーミングの時代、コラボレーションはアーティストとしてのステイトメントというより、マーケティングのツールとして使われることが多いじゃない。そういうのは好きじゃないの。

私はコラボをほとんどやらないけれど、今回の新作では、サウンドガーデンが『ラウダー・ザン・ラヴ』(1989年)を、パール・ジャムが『Ten』(1991年)を録音し、そしてアリス・イン・チェインズも使ったシアトルにある［ロンドン・ブリッジ・スタジオ］でレコーディングした「オンリー・ラヴ・キャン・セイヴ・ミー・ナウ」という曲で、マット・キャメロンとキム・セイル（※両人ともサウンドガーデン）という素晴らしい人たちとコラボをしたの。そんな象徴的な場所にそんな人たちと一緒にいて、私の書いた曲に彼らと一緒に命を吹き込んだなんて、人生における最良の経験のひとつだったわ。

コラボレーションはとても自然な形で実現したのよ。多くの悲劇を通じてね。クリス・コーネルが亡くなる前の最後のツアーで、私たちはオープニングをやって絆が生まれたから。

トム・モレロがギター・ソロを弾いている「アンド・ソー・イット・ウェント」という曲も入っているわ。これも本当に素晴らしい、アーティスティックなコラボだったのね。この曲を書いたときに、コンセプトや歌詞、曲のポイントを本当に表現できるのはトムのサウンドであり、曲を次の次元まで高めてくれるだろうって、彼のことがすぐに頭に浮かんだもの。そして実際そうなったでしょ？　彼のギターが入ると、それはトム・モレロ以外の何ものでもない素晴らしいものになったわ。

——2020年から何を学んだ？

我慢。2020年以前から我慢強かったと思うけど、本当に我慢の限界を試されたわね。それに、生活のなかで見逃してしまう小さなことへの感謝も教えてくれた。だから、家で過ごすちょっとした時間を楽しんでいるの。もし今もツアーに出ていたのなら、私の小さな犬と過ごす時間はなかったでしょう……彼女はとても年寄りだから。

私の人生はいつも嵐のようで、働きづめだった。でも今は自分自身の思考、人生を見つめるほかないわね。

——音楽業界において、最初のステップを踏み出し、その世界に適応する一番の助けとなったのは誰でしたか？

とても長い間一緒にいるマネージャーたちのことを言わないわけにはいかないかな。彼らはいつも私のヴィジョンをサポートし、助けてくれる。

だけど、一番はやっぱりバンドのメンバーたち。ギタリストで、曲作りのパートナーでもあるベン（フィリップス）と、プロデューサーのケイトーと同時に出会ったことで始まったの。コピーできないケミストリー、マジックが間違いなくあったの。別世界のような何か……そういうものを信じるならね。私の人生における決定的瞬間だったから。

そしてマーク・デイモン(b)とジェイミー・パーキンス（d）とも出会って。みんなで集まってこれからどうするのかを決め、仕事を辞め、私は女優業を辞め、向こう見ずに飛び込んだの。サポート、友情、音楽や人生に対する見方、すべてが素晴らしいわ。

——女優としてのキャリアは、バンドの成功の助けになったと思いますか？　それと

マーク・デイモン(b)、ジェイミー・パーキンス(d)、テイラー・モムセン(vo)、ベン・フィリップス（g）／L to R

AN ARMY OF DUCKS OR ONE CRAP TIGER?

——アヒルの大群か、1匹のダメ虎？

も妨げになったでしょうか。人々があなたのことを“バンドをやっている女優”ではなくミュージシャンとして見るようになるまで、どのくらいかかりましたか？

乗り越えなくてはいけなかった障害、プレス的な面での助け、その両方だと思う。はじめの頃は、間違いなく名前を広めるのに役立ったわ。私は別方面で知られていたし、当時タブロイドの世界に生きていたから、それでバンドの名前も広まった。

だけど、これがバンドとして曲を書き、それで成功するということに何ら貢献したとは思わない。たくさんの記事に名前が出ていることは、何の証明にもならないから。

アルバムを、もともと持っていた概念で判断するのではなく、開かれた心で聴いてくれた人たちは、わりとすぐに気づいたわ。まぁそうではない人たちは、バンドの真価に気づくのに時間がかかったけど。見せかけじゃない、これが私たちという人間なの。

——ツアーの何が一番恋しいですか？

あなたたちファンよ！　最高の友人たちとステージに上がって、アンプをつないで、マイクで叫んで……どんなことが起こるか予想もつかないわ。

でもショウが中止になってしまっているから、そういうことがとても恋しい。ライヴのエネルギーが恋しいのよ。あんな体験はほかにないから。まるでドラッグで、あれに勝てるものはないわ。スタジオで曲を書くのは違った種類のハイを与えてくれて、それは永遠に続くけれど、ショウはただのひと晩だけ。だけど、そのひと晩に勝てないのよ。

——自身の曲、もしくはカバーでアコースティック・アルバムを作る予定はありますか？

具体的な予定はないけど、その話は何年もしているの。バンドのみんなで集まってプレイすることができないから、家からアコースティックな曲を発表しているのよ。ちょうど「ハウス・オン・ア・ヒル」（『ゴーイング・トゥ・ヘル』収録）のピアノ・バージョンをリリースしたところよ。これはずっとやりたくて、仕上がりも非常に美しいものになったと思うわ。

素晴らしい友人たち、ミュージシャンたちと一緒にやっていて、アラン・ヨハネスと一緒にクリス・コーネルの「The Keeper」もカバーしたし、マット・キャメロンとも一緒にやって、サウンドガーデンの「ハーフウェイ・ゼア」（『キング・アニマル』収録）もレコーディングしたの。ツアーに出ていたら起こらなかったようなことが起こっているのよね。

——リブート版『ゴシップ・ガール』について、どう思いますか？

観るのが楽しみよ！　SNSだったりとか、最初に放送されたときよりもテクノロジーが進化しているから、それらをどうするのか興味深いの。

あの頃も出演者に定期的に新型の電話機を使わせていたけど、始まったときはまだ折りたたみ式のガラケーだったことを覚えているし……今はみんなiPhoneにゾッコンで、スマホがなければ死んじゃうみたいな感じでしょ。社会評論的観点からだけでも、私たちが生きる現代の生活にストーリーをどう適応させるのか、興味深いわね。

——“イカしたアヒルの大群”か“本当にクソみたいな虎”だったら、どっちが欲しい？

イカした虎1匹か、大量のアヒルってわけにはいかないの？　私はわりと孤独で、孤立していて、友達もほとんどいないの。そのかわり、友情はとても深いものになるけれど。

大量のアヒルには圧倒されるから、1匹の虎のほうがいいけど、訓練をしないといけないのね。調教師によるトレーニングが必要だわ。サウンドガーデンのレコードを与えれば、理解し合えるはず。虎をリフォームしてあげる！

ALEXI LAIHO
FOREVER...

1979 - 2020

Photo by Masayuki Noda

卓絶のミュージシャン
アレキシ・ライホ

2020年12月末、2000年代を代表するミュージシャン、アレキシ・ライホが逝去した。彼が現代ヘヴィメタル・シーンに与えた影響は大きく、その遺産はこれからも我々を刺激し続け、新しい音世界へと導いてくれるだろう。

彼が世に現われた1990年代後半、ヘヴィメタルは王道の流れを汲むスタイルとはまた別の形をもって、盛り上がりの兆しを見せていた。その"ヘヴィなリフレインに別ジャンルのヴォーカル"というのちの主要ジャンルのひとつとなる音像も、当時はまだ素直にノリきれないというファンが少なくなかった頃だ。そんな時代にアレキシは降り立つ。

疾駆する楽曲で唸る強烈なヴォーカルとテクニカルなギター……ある意味では"王道"とも言えるチルドレン・オブ・ボドムの超新星的音楽は、この時代に枯渇していたサウンドのすべてを持っていたとも言えた。もちろん同じく流麗な演奏を聴かせる若手ギタリストはいたし、メロディアスに歌う匠のシンガーもいた。ただ彼らとアレキシには決定的に違った点があった。純粋にカッコよかったのだ。

秀でた体躯を持つ欧州・北欧のミュージシャンのなかにあって、彼は決して大柄な人物ではなかったが、弱冠ながらステージでのその振る舞いにはすでに余裕すらあり、金色の長髪を左右に振り乱しながらギターをかき鳴らし叫ぶ姿は……そう、ピュアにカッコよかった。これは誰をも納得させることが必須となるスターの不可避条件とも言える。

尖ったリフとクラシカルなリード・プレイの両刀を使いこなす演奏力も、ギター・ファンあこがれの的となるものだった。もちろんギター・ソロが絶対ではないが、やはりメタルの花形場面のひとつはギタリストがスポットライトを浴びて繰り出す超絶フレーズであり、それが薄らいでいた当時のメタル・シーンにあって、若いアレキシがそれを堂々と披露するさまは、同世代のギタリストではなくとも見入ってしまうものだっただろう。ランディV(シェイプ)を股に挟みネックを垂直に立て感情豊かに魅せる演奏スタイルは、高い位置でギターを構え直立不動で弾く者とはヴィジュアルの鮮烈さでもまったく違う。このステージ上でのワイルドな立ち振る舞いこそアレキシの真骨頂であり、オーディエンスを扇動し熱狂させるメタル・ミュージシャンにとって、最も重要な要素なのではないだろうか。

また豪快な言動、不敵さ、音にも現われる攻撃性……やはりメタルにはある種の"不良性"も大切だ。パーティ・ソングであろうとグルーヴ・チューンであろうと壮大なバラードであろうと、その曲の創作者に反骨心があればそれは音楽に乗り移る。チルドレン・オブ・ボドムの楽曲には、まさしくそれがあった。いかにトーンを"ワルく"しようと、そこにロックの核がなければただの音高の低い歪んだ音だ。アレキシはナチュラルボーンにその核を持ち、それを分身である音楽に落とし込み、ステージではさらに華やかさをまとわせ昇華させていく。彼自身、純然たるヘヴィメタル・ファンであり、ときには自らを傷つけながら生み出してきた音たちだからこそリアリティがあり、それにファンは惹きつけられ魅了されていったはず。

彼の勇姿は、もう観ることができない。淡麗な顔立ちからのぞくやわからな笑顔を観ることもできない。いかに映像がある音源があるとは言え、そこで補えることでもないだろう。だから、メタル界の至宝のひとりであり、卓絶たるミュージシャンであったアレキシ・ライホを失ったことを、今は素直に悲しみ、偲ぶ時間とすればいいとも思う。彼を心のなかで想うことで、我々のなかにも"リアルなメタル"が灯るはずだから。

文:岡見高秀

ALEXI SAID SO!

アレキシ、かく語りき！

もしここにアレキシがいたら、きっと“おいおい、ちまちました追悼記事なんて作ってんじゃねーぜ！”と言ってくれただろう。そこでここではドカンと彼のインパクト大な名言から、ミュージシャンとして、いち人間としての内面に近づいてみたい。

みんながショックを受けるのを見たかったんだ（笑）。

さまざまなカバー曲も披露してきたCOBだが、特に変化球だったのが「ウップス！…アイ・デッド・イット・アゲイン」（ブリトニー・スピアーズ）。“どうせやるなら自分たちがやっていないような音楽、その究極がブリトニーってわけ（笑）！”。なお、特にファンというわけではないそう。

なぜデス・メタルだったか……なんとなく当時の俺たちに合っていたんだろうな（笑）。

14歳頃からデス・メタルをプレイし始めたことについて、“ハハハ、特に理由はない！”と豪快に答えてくれた。

誰かが“ボドムって単語には重い響きがあって、バンド名にぴったりだな”って言い出したんだ。

バンド名の由来について。そこから“ボドムに合う単語をいろいろ並べた結果、一番キマっていたのが［チルドレン］だったんだよ”。

[are you dead yet?]は、“まだ生きているか？まともな生き方しようぜ”って自分に言い聞かせている言葉。

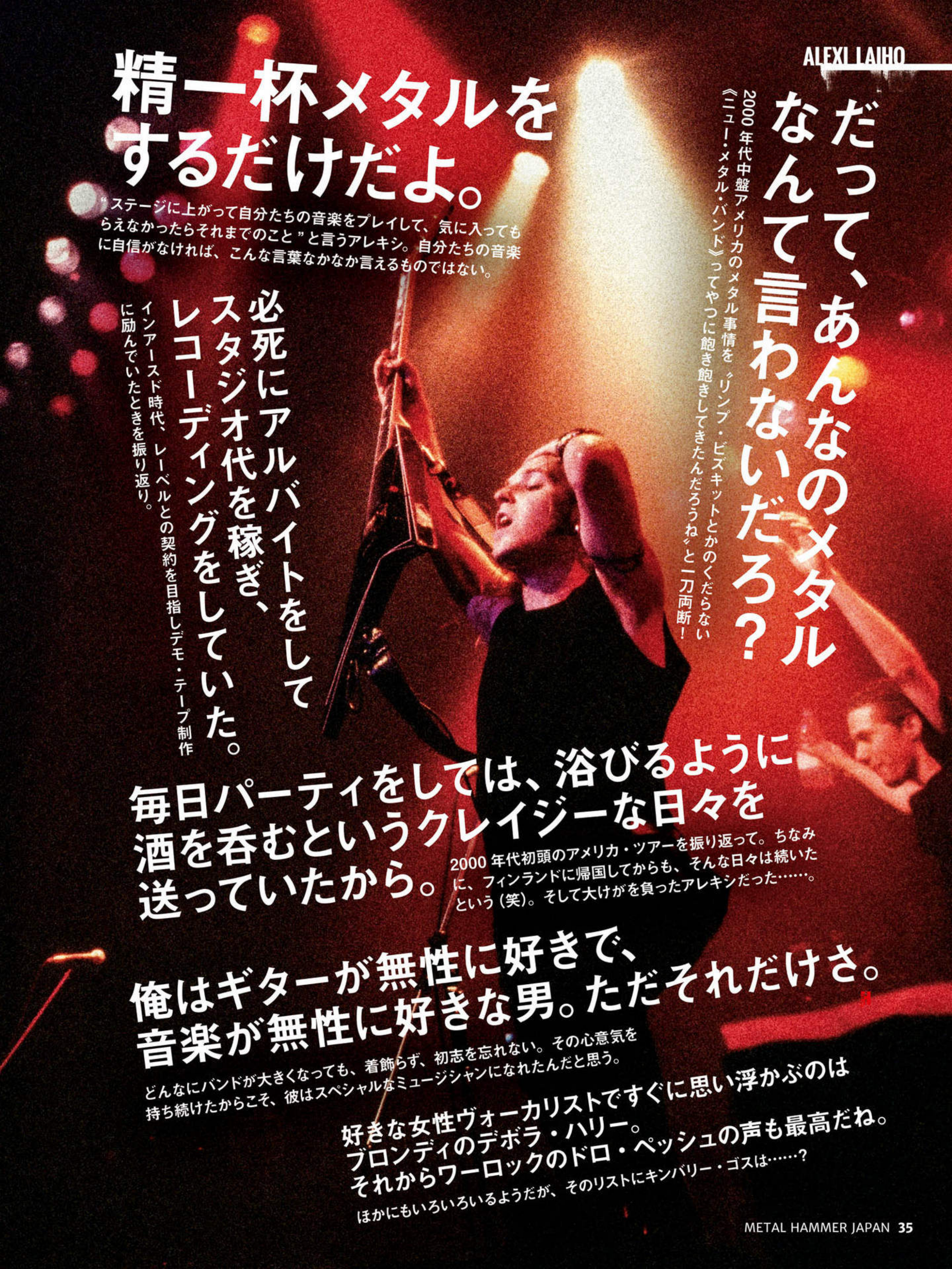
5thアルバムのタイトルを思いついたのは、破天荒な生活を経て、自戒の念が頭をよぎったときだった。

初めて手にしたギターは、トーカイの白いストラトキャスター・タイプだったね。

それは父親が買ってくれたもの。“それからは練習ばかりしていて「早く寝なさい!」って怒られていたほどさ（笑）”。

ウィスキーとカフェイン・ピルを毎日呑んで気を失い続けたら、人生で最高の歌詞を書くことができたんだ。

ならでは……というか、彼にしかできない作詞方法だろう。ウィスキーは毎日３本、三日間にわたって呑み続けられた。



精一杯メタルをするだけだよ。

“ステージに上がって自分たちの音楽をプレイして、気に入ってもらえなかったらそれまでのこと”と言うアレキシ。自分たちの音楽に自信がなければ、こんな言葉なかなか言えるものではない。

だって、あんなのメタルなんて言わないだろ？

2000年代中盤アメリカのメタル事情を〝リンプ・ビズキットとかのくだらない《ニュー・メタル・バンド》ってやつに飽き飽きしてきたんだろうね〟と一刀両断！

必死にアルバイトをしてスタジオ代を稼ぎ、レコーディングをしていた。

インアースド時代、レーベルとの契約を目指しデモ・テープ制作に励んでいたときを振り返り。

毎日パーティをしては、浴びるように酒を呑むというクレイジーな日々を送っていたから。

2000年代初頭のアメリカ・ツアーを振り返って。ちなみに、フィンランドに帰国してからも、そんな日々は続いたという（笑）。そして大けがを負ったアレキシだった……。

俺はギターが無性に好きで、音楽が無性に好きな男。ただそれだけさ。

どんなにバンドが大きくなっても、着飾らず、初志を忘れない。その心意気を持ち続けたからこそ、彼はスペシャルなミュージシャンになれたんだと思う。

好きな女性ヴォーカリストですぐに思い浮かぶのはブロンディのデボラ・ハリー。それからワーロックのドロ・ペッシュの声も最高だね。

ほかにもいろいろいるようだが、そのリストにキンバリー・ゴスは……？

うまくなりたかったら、彼女も何もかも全部忘れろ！

本気でギターに向き合う姿勢を説くアレキシ。彼も練習のために彼女を失ったそうだが、“ギターがうまければ女の子は寄ってくる”とも（笑）。

そう見られるのもイヤじゃない！

自分がギター・ヒーローとして見られることについて。〝自分が唯一うまくできて、夢中で取り組んできたことに対し、これだけみんなが支持してくれるのは、うれしいことであり光栄なことだよ〟

ロック・スターになるためにバンド活動をしているわけじゃない。

バンド躍進のなかでも〝永遠に続けられることではない〟、〝アルバム・セールスが落ち込んだら、もう辞めるべき〟と冷静な考えも持っていたアレキシ。いや、そんな状況にはならなかったじゃないか……。

どんなリフであれ、俺の要素はしっかり感じられるだろ。

意図的にプレイしなくとも、フレージングには自分の要素がしっかり出せると語る……音源を聴けば、それも納得。

日本人は世界一魅力的な国民だよ。いやいや、お世辞なんかじゃないぜ（笑）！

インタビュー最後のお約束と言えば〝日本のファンへのメッセージ〟。彼らのこれまでの日本公演や発言を見れば、これがリップ・サービスではないことがわかるはず。

ランディVの音を聴いて、俺はぶっ飛んでしまったね。

1997年頃、楽器店にアンプを探しに行った際、試奏器として出てきたのがジャクソン製ランディVだった。そこからは一所懸命にバイトをして、見事その1本を手に入れた。それ以来、彼のトレードマークは常にランディVシェイプだ。

ALEXI SAID SO!
アレキシ、かく語りき！

みんなが気に入る曲をと意識したら最後、その姿勢はメタルとは言えない。

作曲理念について。“マーケットを意識していては、自分たちの信じている音楽がダメになってしまう。そんなのは本物じゃない”。どこにいても自分らしくいることを大切にしたアレキシは、徹頭徹尾、信念を曲げることはなかった。

可能な限りヘヴィに。単純だけど、これは常にこだわってきたこと。

そして“一度やったことはくり返さない”とも。トップ・バンドとして当然とも言えることだが、そう簡単にできることではない。

怒り頭に血が上る感情を音楽に取り入れる。

“俺がおもにインスピレーションを受けるのは、自分自身の感情……特にネガティブで、怒っているときが一番好きな心理状況”。自身を不安定な状況に置き、それを楽曲へと昇華させていったアレキシならではの方法論。自らの身を削り生み出した楽曲だからこその激情が宿る。

俺たちのゴールは、常に前進し続けること。

“ニュー・アルバムが前作よりも10枚でも多く売れただけで、俺たちは充分に満足できるよ”。セールスではなく、真にメタルをプレイすることを愛していたことが伝わるひと言だ。

俺の記憶力は最悪だけど、メロディやリフのアイディアを忘れることは絶対にない。

“それだけ音楽のことを大事に思っていて、それだけ音楽以外のことはどうでもいいと思っているんだろうな（笑）”と自己分析。きっと、まわりの人々もそう感じていたことだろう（笑）。

『パッション・アンド・ウォーフェア』を聴いて、ぶっ飛んじまったんだよ！

スティーヴ・ヴァイのアルバムを聴いて、ギターのすごさに衝撃を受けたアレキシ少年。“俺にはギターしかないと強烈に思い知らされた、決定的な瞬間だったことを覚えているよ”。

挑戦は永遠に続くし、だからこそやりがいがある。

彼にとって“これで満足”という地点はない。ゴールに到達することがないからこそ、そこを目指して頑張り続けられるのだ。

Alexi Laiho

ギターを愛し、ギターに愛されて

ギタリストとしての比肩なき個性とその功績

文：成瀬正樹

Profile
ギタリスト。自身の音楽活動のほか、メタル系教則本も多数執筆している。これまでに『ギター・マガジン』などの専門誌にて、アレキシ・ライホ奏法の分析も担当してきた。

1990年代後半から2000年代において、アレキシは間違いなくギター・シーンで最も輝いていた人物だった。“誰が見てもカッコイイ！　うまい！”……これこそロック・ミュージック本来の姿であり、ギター・ヒーローだからこそできる所行である。

だから、そのプレイの何がすごかったのかを明文化して語るのは野暮でもあるのだが、ここではあえて、彼の演奏家としての個性と実力をギタリスト目線で振り返ってみたい。

縦横無尽に弾き、叫ぶアレキシのスタイルは唯一無二であり、多くの後進に刺激を与えた。ギター・シーンにおける彼の功績は計り知れない。

ギタリスト――アレキシ・ライホの誕生と彼を育んだその時代

アグレッシブさとメロディアスさを同居させ、ときに繊細に、ときにトリッキーなまでに多彩なプレイを放出し続けたアレキシのギター・プレイ。ステージでのクールな佇まいや所作も含めて、メタル・ギタリストはかくあるべきというものを体現してくれた存在であったことに異論ないだろう。そんなアレキシというギタリストがどのように形成されていったのか、まずはそこから振り返ってみたい。

1979年4月8日生まれのアレキシは7歳の頃からバイオリンを始めクラシックをたしなみ、ほどなくして姉の影響でW.A.S.Pやトゥイステッド・シスター、ガンズ・アンド・ローゼス、ポイズンなど当時のHR/HMを聴き出し、11歳でギターを手にすることになる。それからはギター一筋となり、講師につきテクニックのみならずスケールやコードといった楽典面も学んでいったという。ある時期スティーヴ・ヴァイの『パッション・アンド・ウォーフェア』に衝撃を受け、続けてイングヴェイ・マルムスティーン、そしてランディ・ローズ、ジェイク・E・リー、ザック・ワイルドといった歴代オジー・バンドのギタリストなどテクニカル・ギタリストに夢中となり、教則ビデオやタブ譜などの教材で熱心にスキルを磨いていったそうだ。13歳になると、ヤスカ・ラーチカイネン（d）と初めてのバンドを結成。それがチルドレン・オブ・ボドムの原型となり、ディール獲得のための紆余曲折を経てデビューへと至る。

†

メタル・シーンにおいて（ポピュラー・ミュージックすべてにおいてそうなのだが）欠かせない視点が時代背景。数々の歴史的名盤も“○○年の作品”という背景を知ることで、より深く味わうことができるものだ。クラシックに接することから始まったアレキシの音楽体験は、80年代という“メタルのカンブリア紀”とも言える現代メタル・スタイルの素が大量に芽生えた時代とともに進んでいく。

その頃のロック・ギター・シーンは、エドワード・ヴァン・ヘイレンによる奏法革命が起こされているなかで、中頃にはイングヴェイの登場による速弾きの革新、異才スティーヴ・ヴァイの出現による多様性の発見などによって、テクニック・レベルがそれ以前よりも凄まじいスピードで上がっていった。彼のコメントに挙がってくるギタリストの名前からも、多感な時期にそのようなプレイを大量に浴びていたことがわかる。

テクニック修得の意味で大きいのは、教則モノの爆発的な進化。今では信じられないが、70年代～80年代初頭まではタブ譜は少なく、ライヴ動画などもごくわずか（数少ないTV放映など）。レコードから音を聴き取り、音楽誌の写真から奏法を妄想（！）、誰かが記した五線譜（タブ譜ではない）があったら大ラッキーといったくらいの感じだったのだが、80年代が中期にさしかかるとタブ譜が一気に一般化していくとともに、出版される譜面の採譜レベルも向上。また、家庭用ビデオ機器の普及とともに教則ビデオが大量に登場したことも大きかった。イングヴェイ、ポール・ギルバート、ジョージ・リンチなど、名手たるギタリストが次々と教則ビデオを発表し、それまでライヴ会場で凝視していたテクニックが家にいながらにしてつぶさに学べるようになったことは、草の根レベルから大きな影響を与えたはずだ。

今では譜面に動画がつくことも当然で、そこからさらに進化を続けているが、豊潤な教材を浴びて育った第一世代たるアレキシが、90年代末に当時コンテンポラリーと呼ばれるテクニックを携えてデビューしたことは、ある意味必然とも言えるだろう。ほぼ同時期にシーンに出現したヤニ・リマタイネン、ガスG.、クリストファー・アモット、SYUといったテクニック・レベルの高いギター・ヒーローたちの顔ぶれを見ても納得できるはず。

感性と理論の二刀流アレキシ式ギター・スタイル

では本題であるアレキシのギター・スタイル、サウンド面を深掘りしていこう。

テクニック面で看板的なのは、スウィープ・ピッキング、スキッピング、タッピング、アーミングといった、いわゆるコンテンポラリーと言われていた奏法（チョーキング、ハンマリング／プリングなどのベーシックなテクニックに対して現代的という意）。そのほとんどが、広い音域を高速かつ美しく、あるいはトリッキーに奏でる弾き方だ。それを＜スウィープ＆タッピング＞や＜左手フィンガリング技＆アーミング＞、あるいは＜チョーキング＆タッピング＞などの複合技として活用するのも得意としていた（※次ページの小枠も参照）。

フレージングという視点では、楽典を理解していることによる旋律の美しさと、知っているからこそあえてはずせるスリリングさを同居させていた点が彼らしさのひとつ。コード・トーン（コード構成音）とスケール・ノートをコード進行／アンサンブルに沿って的確に用いながらも、要所にてソレ以外の音を含むクロマチック・スケール（半音階）やパッシング・ノート（経過音）を巧みに挟むアプローチを得意としていた。

フレージングの個性においては、キーボー

ドの存在も大きい。キーボード・フレーズとユニゾンやハモりでアンサンブルを支えたり、ときにはリード楽器同士として渡り合うことによって、ギター的ではないフレーズ、例えばインターバル（音と音の音高上の距離）の広いフレージングを行なっていたこともアレキシ式フレージングのひとつと言えるだろう。

また特筆したいのはそれらテクニックを用いたソロの構成力。彼のリード・パートは、チルドレン・オブ・ボドムがツイン・ギターであること、またヴォーカルと兼任であることからコンパクトなことがほとんどなのだが、起承転結感が抜群に素晴らしく、無駄な音はひとつもないと思わせる構築性の高さを感じさせてくれるものばかりだ。

それがゆえに、ライヴでもソロはほぼスタジオ・テイクのまま。違っているものでも、例えば2005年頃の「ヘイト・クルー・デスロール」でのスタジオ版との違いは、途中のディミニッシュ・アルペジオにローペ・ラトヴァラがハモリを付加したことと、ラストの速弾き部をハーモニクス＆アーミングへと一部変更しているくらいだ。それだけ作曲／アレンジ・レベルでしっかりと作り込んでいるのだろう。確信的な音のみで形成されたフレーズ作りの巧さは、アレキシの大きな個性と言える。

サウンド面では、初期のトレブル成分が際立ったトーンから、作品を追うごとにファットさも加味されていき……と変化している部分もあるが、基本となる低域から高域までスムーズに伸び、コンプレッション感のある力強いサウンド・キャラクターは一貫していたと感じられる。

それを生み出す要素のひとつは楽器／機材面のシンプルさ。ギターはトレード・マークのランディVタイプ（ジャクソン→ESP）。チューニングは全弦全音下げを基本としつつ、さらに6弦のみを全音下げたドロップCチューニングを多用。使用ペダル類は少なく、アンプもリー・ジャクソン製［GP-100］やADA製［MP-1］（いずれもプリアンプ）など時代によって変わるものの、狙いのセッティング自体は変わらず毎度ストレートなサウンドメイクを施していた。機材がシンプルだとそれだけ自身のプレイが生み出すトーンが素直に出る、ということだ。

そして、サウンドを形成するうえで何よりポイントとなるのがピッキング。生音でバチバチと鳴るほどの強さがありながら決して雑味がなく、アンプの持つコンプ感（圧縮感）を押し返すような、ヌケのあるサウンドをハジき出している。それを実現させるのが、的確に弦をヒットさせる手首のスナップ・ピッキング！　テクニカル・ギタリストと呼ばれているギタリスト群のなかでも、アレキシのスナップ・ピッキングは出色だ。ギターを弾かない貴殿貴女も、ライヴ動画を楽しむ際には新たな視点として右手首のしなやかな“振り”にも着目してほしい。本人は“ピックを強く握りすぎないこと”を意識していたようなので、ギタリストは参考にしてみるといいだろう。

“人となり”から形成される音楽性
——アレキシの残したものとは

メロディック・デス・メタルの旗手としてシーンに君臨したチルドレン・オブ・ボドムは、最初期はクラシック曲のモチーフを随所に用いるなど（「ザ・ネイル」でのベートーヴェン「運命」など）、スピード感満載のなかにネオクラシカルな要素を多分に含んでいた。そこから徐々に様式美テイストは減っていき、中期作ではグルーヴィなブルータルさや、スピードよりもパワー感で

◎必聴！ 各楽曲で聴けるコンテンポラリー・テクニック

◎スウィープ・ピッキング
●「トワーズ・デッド・エンド」0:06～／3本弦を行き来する小スウィープ連発！
●「ワン・デイ・ユー・ウィル・クライ」2:38～／アレキシ流スウィープの基本型となる、マイナー・コードのアルペジオ！
●「チルドレン・オブ・デカダンス」3:57～／キーボードとユニゾンでキメる、リズムの端正さが際立つマイナー・アルペジオ。

◎スキッピング
●「ネクスト・イン・ライン」3:36～／ソロ出だしのアーミングに続く、3連符できっちりと奏でられる端正な跳び。
●「トワーズ・デッド・エンド」4:12～／ポール・ギルバート直系のコード・アルペジオ・スキッピング。
●「ショベル・ノックアウト」0:07～／6弦から1弦へと行き来する弦跳びを含むヘヴィ・リフ！

◎タッピング
●「リヴィング・デッド・ビート」3:49～／“速さ”ではない、メロディアスなタッピングだ。
●「ヘルバウンズ・オン・マイ・トレイル」2:11～／インテリジェントな、クロマチック・スケール上を舞うタッピング！
●「マスク・オブ・サニティ」2:27～／タッピングにグリス・ダウンを組み合わせたトリッキーなメロ表現。

◎アーミング
●「トラッシュド、ロスト＆ストラングアウト」2:45～／ソロ出だしからインパクトを与えるハーモニクスにアーミング！
●「ヘルバウンズ・オン・マイ・トレイル」2:06～／ソロ冒頭、ワウも絡めたロング・トーンで聴かせる。
●「キッシング・ザ・シャドウズ」2:53～／チョーキングした音にアーミングを加えてさらに音を揺らし緊張感をアップ！

◎スウィープ＆タッピング
●「リヴィング・デッド・ビート」3:50～／高速スウィープ＆タッピングの連発！
●「ヘイト・ミー」3:54～／ソロ終盤、ダウン・スウィープから高速タッピングへ。
●「ヘイト・クルー・デスロール」／ソロのシメは、小スウィープ＆タッピング連発後に6本弦にまたがるスウィープからタッピングという大技へ！

◎チョーキング＆タッピング
●「タイ・マイ・ロープ」3:14～／チョークした音からさらに高い音へとタッピングを組み合わせた“歌う”ようなソロ・アプローチだ。
●「エヴリタイム・アイ・ダイ」3:03～／タッピングしたままチョーキング。アーミングとシームレスに聴こえるメロディックなアプローチはさすが。
●「ウェイスト・オヴ・スキン」3:08～／ソロ中間部にて、メカニカルなシュレッド・フレーズ間をつなぐチョーキング＆タッピング！

◎左手フィンガリング技＆アーミング
●「アー・ユー・デッド・イエット？」3:11～／ハンマリング＆プリングでつなぎながらクリケット奏法で独特なニュアンスを。

猛攻するモダン・ヘヴィネスを融合させたサウンド、あるいはR&R感、また後期ではレイドバックしたハードロック的テイストも含ませるなど、ひとつどころに留まらない作品を生み出し続けた。

現代のジャンルが極細分化されたメタル・シーンにおける口の悪いメタリアンにとっては、スタイルが定まり切っていなかったように感じられる向きがあったかもしれないが、筆者はまったくそう思わない。確かにテンポ感やグルーヴ感、またサウンドメイクの部分で作品ごとに幅はあるが、チルドレン・オブ・ボドムのアグレッシブな音楽性が彼の鮮烈なカラーによるものだったという点で、終始一貫されていたと言える。

歴代アルバムによるテイストの差も、アレキシが各時代の感覚で素直に表現したことであって、BPMに表わされるような表層的な面や、形式ばかりを頑に固執するよりもよほどアーティスティックなアプローチだったはず。"マーケットを意識するようなことはしない。そんなことをしていたら、自分たちや自分たちが信じている音楽もダメになる"という言葉どおりの創作活動だったと言えるだろう。

アレキシの音楽に対する真摯な姿勢は、前述したギター・スタイルにも表われている。教則モノなど豊富な情報量のなかで時代とともに育まれた面はあるのだが、あれだけのテクニックの高度さ、ライヴでも崩れない安定感は、地道なトレーニングによってのみ培われるもので間違いない。プライベートでのワイルドな逸話には心配させられたものだが、少なくともギター／音楽とひたむきに向き合ってきたことは、激鉄なるリフ・ワークにも流麗なるリード・プレイにも音となって表われている。単に型破りなだけの人間には、あのようなサウンドは構築できるハズがないのだから。

†

アレキシがデビューした90年代後半のギター・シーンを振り返ってみると、まずメタル・ミュージック自体が下火気味であり（復活の兆しを見せつつもあったが）、さらにオルタナ・ムーブメントの煽り、また80年代後半のテクニカル・ブームの反動もあり"ギター・ソロはダサイ"という風潮が蔓延していた。

そのようななかで、ギター・ヒーロー然としたアレキシが登場する。もちろん時代の流れというものは簡単に抗えるものではなく、彼ひとりが何かを作りあげたと言うつもりはないが、寒風吹きすさぶシーンにおいて、渇き切ったメタル・ヘッズの欲求を満たす良質な作品群を生み出し続けたアレキシには、いちハード／メタル・ギターのファンとして感謝しかない。今回改めて歴代アルバムを聴き直したが、ただ素直に興奮と感動を味わうことができた。時代を追って聴き直すことで、前述したような作品ごとのカラーの違い、アレクザンダー・クオファラからローペ、そしてダニエル・フレイベリへという相棒の遍歴、また、デビュー時から完成されたテクニックを持ちつつも、1st『サムシング・ワイルド』から3rd『フォロー・ザ・リーパー』にかけての微細なタッチ感の急激な向上っぷりなど、耳を研ぎすますことでより楽しむことができるだろう。

ヴォーカル&ギターとして抜群にカッコよかったその姿と、"練習することが一番大事"と語る音楽に対してまっすぐなさまをイメージしつつ、残された作品群をこれからも楽しんでいきたい。

関係者が語る素顔のアレキシ

Alexi Laiho

どんなミュージシャンにもステージでのきらびやかな姿とは別の、オフ・ステージでの飾らない顔がある。ここでは彼らをデビュー時から知る日本国内盤レーベルの担当氏に、アレキシの素顔からウラ話まで、いろいろと語ってもらった。

▲公私ともにパートナーであった、キンバリー・ゴス（シナジー）とともに。アレキシはマノウォーのパーカーを愛用。

証言：宮本哲行

［トゥルーパー・エンタテインメント］A&R、プロモーター／元［トイズファクトリー］洋楽部ディレクター

Profile

チルドレン・オブ・ボドムのデビュー作から3rdまでの国内盤をリリースした［トイズファクトリー］にて当バンドを担当。

ダンス・ミュージックのディレクター、洋楽の宣伝を経てディレクターに。就任初期にはイン・フレイムス、スピリチュアル・ベガーズ、エンペラーを担当し、同社のメロディック・デス、ブラック・メタル路線を確立した。現在は［トゥルーパー・エンタテインメント］A&Rとして、時代を反映した有望なメタル・バンドを日本に届けている。

◎個人的には「レイク・ボドム」。

――［トイズファクトリー］での洋楽部ディレクター時代、どのような経緯でチルドレン・オブ・ボドムを知ったのでしょうか？

　その頃はインターネットなんてなかったので、外盤（輸入盤）を探ったり、海外レーベルからの売り込みをチェックしたり、海外の音楽見本市に行ったりして新しいバンドを見つけていたんですよね。チルドレン・オブ・ボドムの場合は、それ以前に出したダーク・トランキュリティの所属している［スパインファーム］とつながりができていて、彼らから“今度、すごいバンドと契約したんだ”と連絡をもらったんです。しかも“あまりにもすごいんで、3枚分の契約をした”と。それで初期の音源を聴かせてくれたのかな。

――その音源を聴いたとき、宮本さん的にもコレはスゴいと？

　メタルって伝統的な部分プラス、その時代の空気を吸った革新的な部分が混ざっているというのが私の持論で。例えばアイアン・メイデンは70年代後半のパンクの空気を吸っていたし、LAメタルはアメリカの好景気の空気を吸っていたじゃないですか。ただ90年代に日本で流行っていたメタルは時代感のないバンドが多かったイメージで、ビジネスとして日本で人気のあるタイプと、［イヤーエイク］などでやっていたデス・メタルをつなげるバンドがいればなと思っていて。それでアーチ・エネミーやイン・フレイムスをやっていたんですけど、彼らではまだコアだなと。ただチルドレン・オブ・ボドムってキーボードがいるし、アレキシはルックスもいい。私が探していたバンドとぴったりで、これは最後の核弾頭だなと思いましたね。

――メンバー全員が若かったという点も重要だったのでは？

　もちろん重要です。本当にメタルを広げたかったので、どんなに海外で売れていても“8枚目のアルバムで日本盤を出す”みたいなのはダサいなと。できれば3枚目までで、そして出したからには責任を持つ。例え1枚目が売れなくても、2～3枚目も絶対に出すという意識でした。そうなると、伸びしろがあるという意味でも若いバンドはいろいろ変化もしますからね。新しい音楽と当時の環境というベクトルがすごく合っていたんです。

――では“即契約だ！”という感じだったんでしょうね。

　そうなんですけど、私が失態をしてしまい（笑）。バタバタしているうちに日本でもチルドレン・オブ・ボドムが話題になって、外盤として出ちゃったんですよ。それで他社からも手が上がったんですけど、スパインファームの担当が“これはトイズのテツが最初に出す”って言ってくれて。ありがたかったですねぇ。だから日本盤が何ヵ月か遅れたんですが（笑）。

――つまり各社が名乗りをあげるくらい、デビュー作の時点で完成度が高かったと。

　そうですね。それでみんなは「デッド・ナイト・ウォリアー」って言うんですけど、個人的には「レイク・ボドム」に衝撃を受けて。あとは「イン・ザ・シャドウ」。

◎会場入りしたときからオーラがある。

――メンバーと初めてコンタクトを取ったのは？

　スパインファームを介して少しはあったんですけど、本当のやりとりは来日してからですね。1stが遅れたこともあって、2nd（『ヘイト・ブリーダー』1999年）もすぐに出るぞという感じだったんです。“メロディック・デス”というシーンを盛り上げたいと思っていたので、リリースのあとイン・フレイムス、シナジーと一緒に呼ぼうと企画して。

――初来日でのライヴを観た感想とは？

　事前にライヴ音源を入手して聴いてはいたんですけど、1stの曲が完璧に演奏できていたんです。それで期待はしていたんですけど、リハを観てビビりましたね！　楽屋に挨拶に行ったときのことは今でも覚えていて、彼は小柄なんですけど、それを全然感じさせないんですよ。当時は19～20歳ですけど、オーラが違いましたね。

――存在感で納得させられてしまうみたいな。

　みんながみんな、ギターに詳しいわけじゃないじゃないですか。そうではなく、リスナーとして聴いて、感動するっていうアティチュードを得たいなと思っていて、そこでさらにオーラがあるというのがアレキシの最初の印象でしたね。会場に入ってきたときから近寄りがたいオーラがあるんですよ。メタルは怖くなくちゃいけないんですよ、触れちゃいけないみたいな（笑）。

――やっぱり、その“怖そうだな”っていうのも重要なんですよね。

　そうそう、ビル・スティアー怖いなとか、イー

サーシ怖いなとか。アレキシにもそういうのがあって、みんなのあこがれでしたよ。ただ、実際には好青年でもありましたね。

――日本側から、バンドへリクエストを伝えることはありましたか？

言うわけないじゃないですか！　私は会議でアーティストに指示をするのは失礼だなと思っていて、だから呑み会が重要なんです。呑んでいるときに“個人的には、こんなのが好きだ”という形でアピールをして、彼らが曲を作るときに“テツが気に入ってくれるかな”と思い出してくれたらラッキーという。

――では来日の際は、彼らともよく呑みに？

呑みまくりです(笑)。めちゃめちゃ楽しかったですよ。初来日のときは１日オフがあって、みんなで東京タワーに行きましたもん。カラオケも行って、アレキシはトゥイステッド・シスターを歌っていたのかな。フィンランド人ですからね、呑む量がおかしいんですよ。当時のマネージャーのイーヴォも酒が強かったし、大騒ぎしたのを覚えているなぁ。

――イメージどおりですね（笑）。

で、キンバリー（ゴス）はアレキシが亡くなる前月にそのときのことを電話で話したらしく、思い出のひとつとしてインスタに書いてくれたんです。“21 年前のこと覚えてくれていたんだ……”って、英語を読んで泣いたのは初めてでした。もしかしたら、彼女はわかっていたのかもしれない。だって、初来日での話なんてします？　最後にアレキシが私の話をしてくれていたっていうのは、ツラいんですけど温かい気持ちになりましたね。

◎呑みに行ってカラオケやりたいなぁ（笑）。

――バンドはその後も順調に活動の規模を大きくしていったという感じですよね。

最後の仕上げとして、ハルフォードの前座を組んだんです。そのためにプロモ来日をしていたロブに音源を渡してプレゼンしたらOK が出たので、“チルボドの完成形を見せられる”と意気込んでいたんですよ。それでライヴの前に４枚目（『ヘイト・クルー・デスロール』2003 年）の音が来て“これはヤバイ、天下取れるぞ”となっていたら、スパインファームが他社に買収されて（苦笑）。そのときの心の穴はデカかったですね〜。

――『ヘイト・クルー・デスロール』のタイミングで、日本盤の流通も変わりました。その後、彼らが目指していたヴィジョンとは？

たぶん、アメリカ進出を狙っていたんじゃないですかね。途中からライヴが終わったあとにモトリー・クルーの「ワイルド・サイド」をかけたりもしていましたから。そうなると、ネオクラシカル系はあまり好まれないから、そういった変化は自然の成り行きだったんじゃないかな。

▲イン・フレイムスのイエスパー・ストロムブラードとの３ショット。中央が宮本氏だ。

――そういったことについても、宮本さんのスタンスとしては、あくまでバンドがやりたいようにやるべきであるという。

やっぱり私は何かを言える立場ではないので。これが、もし一緒に呑んでいたときにする話であれば……ヤンネ（ウィルマン）主導の曲を聴いてみたかったですね。アレキシがほとんど書いていて、そこではヤンネもアイディアは出していたと思うんですけど、彼がもっとアイディアを出して曲を作れば、また違ったチルドレン・オブ・ボドムが観られたのかも。シナジーのときも基本的にはアレキシが書いていたんですけど、キンバリーがノーマル・ヴォイスだったこともあって、アレキシの曲作りも広がったんですよね。

――なるほど。

デス・ヴォイスでは歌メロディがつけづらい分、バックのコード進行なりドラムなりが複雑じゃないとついていけない。逆にそれがメロディック・デスのおもしろさだとも思っていて。そういう意味でも、アレキシがノーマル・ヴォイスのキンバリーとやったときの楽曲って、おもしろかったんですよ。多分それはノーマル・ヴォイスを意識して曲を作ったからなんじゃっないかな。それと同じように、ヤンネのソロ・アルバムにアレキシが参加するみたいな形があったらおもしろくないですか（笑）。

――確かに。さて彼らの存在は、2000 年代のメタルにどういった影響を与えたと思いますか？

彼らみたいなバンドがいないと、シーンがつながっていかないと思うんですよ。今で言えば BABYMETAL もそうで、そういうバンドが新しいファンを開拓して、フォロワーが出るっていうのがすごく重要なんですよね。そういう意味で言うと、アレキシが出てきて、そのフォロアーも出てきたじゃないですか。すごいメタル・バンドが出てきて、シーンができてきて、若者が来て、その若者が自分でもメタルをやりたいぜっていう数珠つなぎ。それこそトム・モレロはガキの頃ヴァン・ヘイレンの大ファンで、自分でもバンドをやるってときにまわりを見たらヒップホップが流行っているから、そのヴォーカルでやったのがレイジ・アゲインスト・ザ・マシーンだったみたいな。だからアレキシを観て感動してギターを始めた人が何年かあとにバンドを組んだとき、その時代感を背負った新しいバンドをやってくれればまた広がっていくじゃないですか。それでいつかインタビューで“実はアレキシが好きで……”ってなったら、めちゃくちゃいい話じゃないですか（笑）。そういうバトンタッチは大切だなと。

◀1999 年、初来日時のパフォーマンスを収めた『東京戦心〜トーキョー・ウォーハート』。前評判の高さから、初来日ながらその音を録音すると決めていたという。

――きっとそのバトンは、多くの若いメタル・ミュージシャンの手に渡されているはずですよね。最後に、もし天国のアレキシに会うことになったら、なんと声をかけますか？

“カラオケ行こう！”（笑）。呑みに行ってカラオケやりたいなぁ。生きていれば、またいつか呑みに行くことができたじゃないですか。もしかしたら、ボドム・アフター・ミッドナイトとして一緒に仕事ができたかもしれないし、昨年にはキンバリーが動き出すという話もあったので、ひょっとしたらシナジー再結成ということがあったかもしれない。アレキシがいてくれさえすれば、夢だけは広がるじゃないですか……寂しいですね。

アレキシ・ライホ〜チルドレン・オブ・ボドムを育てた

“森と湖に潜む激音”

フィニッシュ・メタルの血統

文：川嶋未来

アレキシ・ライホ率いるチルドレン・オブ・ボドムは、フィンランド産エクストリーム・メタルをここ日本に印象づけた、同国のバンドを象徴する最たる存在だと言えるだろう。ただ、スウェーデン、ノルウェーなど隣国と並び“北欧メタル大国”としてそれぞれが持つ個性も、ややもすると一緒くたにされてしまいがち。アレキシ・ライホという希代のミュージシャンを育んだフィンランド特有の音楽事情を改めて見ていくことで、彼の持っていた“音楽的核心”がより見えてくるのではないだろうか。

北欧のなかでも独特の立ち位置であるフィンランド

“ムーミン”に“サウナ”……普通の人々にフィンランドから連想できるものを尋ねれば、きっとこのあたりに答えが集中することだろう。だが、ヘヴィメタル・ファンにとってフィンランドとは、メタル大国にほかならない。ナイトウィッシュにチルドレン・オブ・ボドム、ソナタ・アークティカにアモルフィス、フィントロール。正統派のメタルからニッチなサブ・ジャンルに至るまで、フィンランドは本当に数多くの、そして多種多様なメタル・バンドを輩出している。

ちなみにスウェーデン、ノルウェー、デンマークとともに、北欧とひとまとめにされる（“北欧メタル”なんていう言葉も一般的だ）ことも多いフィンランドであるが、実は少々仲間はずれ感がある。他の３国の言語の違いは方言レベルと言ってもよく、それぞれが母国語で話しても会話が成立するのに対し、フィンランド語は共通の単語すらほとんどない。またジャンル的にもスウェーデンがデス・メタル、ノルウェーがブラック・メタルを得意とするのに対し、フィンランドはオールラウンドな印象だ（デンマークはマーシフル・フェイト／キング・ダイアモンドを輩出している時点で殿堂入り。得意分野などどうでもいい）。

メタル天国とも言える フィンランドの音楽シーン

“フィンランド＝メタルが盛んな国”というのは、決して“日本＝ゲイシャ”のような幻想ではない。

それどころか、フィンランドのメタル大国ぶりは、あなたの想像をはるかに超えているはずだ。ここに、フィントロールのヴォーカリスト、マティアス“ヴレス”リルモーンスの言葉を引いてみよう。

“ヘルシンキでは、どこに行ってもメタル一色。お昼にカフェに行くと、メタルがかかっていたりね。メインストリームになりたいからと、興味もないくせにメタルをプレイする奴も出てきた。そうすればラジオでかかるから”。

え、カフェに行くとメタルがかかっているの？　メタルがかかっている時点で、それはもはやカフェとは別のモノな気が。メタルをプレイすればラジオでかけてもらえる？　とても日本では（というかフィンランド以外のどの国でもだろうが）考えられない内容に思わず耳を疑いたくなってしまう。フィンランドは、メタル・ファンにとってはパラダイスなのである！（ヴレスはあまりにメインストリームになりすぎたメタル・シーンに少々ウンザリという感じであったが。贅沢な悩みですね。）

†

それにしても、一体なぜフィンランドではこれほどまでにヘヴィメタルが受け入れられているのだろう。まず考えられるのは、フィンランド固有の音楽が、メタルに近い気質を持っているということ。

“メタルは短調（マイナーkey）の曲が基本で、それがフィンランドの人々と共鳴する部分があるんだよ。聴き慣れている伝統的なフィンランドの音楽に近く、フィンランド人のメンタリティに合っている”（マティアス“ヴレス”リルモーンス）

“フィンランドの民俗音楽は、とてもメランコリックなものなんだ”。（エサ・ホロパイネン／g：アモルフィス）

また、フィンランドの国民性や気候も理由のひとつのようだ。

“フィンランドは憂鬱な人間が多いから、ヘヴィメタルにハマりやすいんだよ”（ミコ／d：レンジャー）

“年の半分がとても暗くて、冬なんかだと15時を過ぎると暗くなってくる。そういう環境がメタルと共鳴するんだろう”。（マティアス“ヴレス”リルモーンス）

だが、フィンランド人にとっても、そのヘヴィメタル人気は決して自明なものではないようだ。

“なぜメタルが人気なのかって？　私たちにとっても謎なのよ（笑）。ほかのミュージシャンと話したこともあるけど、結局答えは出なかったから”。（ノーラ・ロウヒモ／vo：バトル・ビースト）

フィンランドはいかにして メタル大国となったのか

しかし——これはスウェーデンにも言えることであるが——フィンランドはもともとメタル大国であったわけではない。

もちろんハノイ・ロックスのようなバンドは存在していたが、少なくとも80年代“フィンランド＝メタルが盛んな国”という印象を持っていた人はいなかったはず。オズ、タロット、ゼロ・ナインといったバンドはいたにせよ、彼らは決してインターナショナルな存在ではなかった。80年代初頭から活動していたストラトヴァリウスにしても、大きな人気を獲得するようになったのは、90年代後半になってからである。

それは、スラッシュ・メタルの時代になっても大きくは変わらなかった。年季の入ったスラッシュ・マニアであれば、ストーンの名前は知っているだろう。1988年リリースのバンド名を冠したデビュー・アルバムは、MCA傘下、ヴォイヴォドやヴァイオレンスをリリースした［メカニック・レコーズ］からもリリースされた。これは決して悪い作品ではなかったが、明らかにスラッシュ・メタル斜陽期のデビューであったこともあり、残念ながら大きな話題となることはなかった。

しかし、フィンランド国内での認識は大分異なっており、そのローカル・スラッシュ・シーンはそれなりの盛り上がりを見せていたようだ。

“80年代のフィンランドにもメタル・シーンは存在していたし、強力なスピード／スラッシュ・メタル・バンドもいた。ただ、フィンランド国外には、それらのバンドは知られていなかったよ。当時はどうすれば海外で活動できるのか、わからなかったんだろうね。バンドがフィンランドのレーベルと契約しても、レーベルは海外向けにはプロモートをしてくれなかったからさ”（ヤルッコ・アールトネン／b：コルピクラーニ）

“フィンランドのスラッシュ・シーンは大きかったよ。国内のレーベルが地元のバンドとサインしまくっていたし、タンペレではアルバムも出していない地元のバンドのライヴに数百人が集っていた”。（ミッコ・マッティラ／『Isten』誌・編集長）

2017年には、『Real Delusions-Finnish Speed & Thrash Metal Explosion 1987-1991』という初期フィニッシュ・スラッシュ・シーンを俯瞰するコンピレーション・アルバムがリリースされている。一部を除き、よほどのスラッシュ・マニアでないと名前すら聞いたことがないようなバンドがずらりと並んでいるが、これを聴くと、いかにフィンランドのスラッシュ・シーンが豊穣であったかがわかる。

†

80年代終盤に差しかかると、フロリダやスウェーデンを中心に、デス・メタルが大きなムーヴメントとなる。もちろんそれは、フィンランドでも例外ではなかった。初期のフィニッシュ・デス・メタル・シーンで中心的役割を果たしたのが、XYSMAである。決して一般に名の知れたバンドではないが、フィンランドにおける彼らの存在は非常に大きかった。フィンランドで初めてグラインド・コアをプレイしたとされる彼らだが、その後すぐに音楽性を変更。ブラック・サバスとデス・メタルを融合したような、独特のスタイルを築き上げた。

“XYSMAはみんなに尊敬されていたし、絶大な影響力があった。フィンランドのデス・メタル・バンドたちだけでなく、エントゥームドやヨハン・リーヴァにも影響を与えたんだ”。(ミッコ・マッティラ)

“デス・メタル・バンドの間で、誰が一番オリジナリティがあるかみたいな競争も起こっていて。当時XYSMAというバンドがいて、彼らはデス・メタルとロックをミックスしていたんだ。それで彼らへの対抗心みたいなものもあったんだよ”。(オーリー＝ペッカ・ライネ／b：アモルフィス)

彼らのデビュー・フル・レングス『Yeah』(1991年)は、オーリー＝ペッカの言うとおり、まさにデス・メタルとロックのミックス。これをいわゆるデス・アンド・ロールの端緒とするものも少なくない。

†

コンヴァルス、フューネバー、ディスグレイス、アブホレンス。現在では一冊の本が書かれるほどの素晴らしい、そして独特なバンド群を生み出したフィニッシュ・デス・メタル・シーン。そのなかからは、商業的な成功をつかむものも出現する。一番に挙げられるべきは、アモルフィスだろう。初期はコテコテのデス・メタルをプレイしていた彼らであるが、徐々にフィンランド特有のメランコリックなメロディを取り入れていく（前述のように、変化のきっかけのひとつはXYSMAだ）

1994年の2ndアルバム『テイルズ・フロム・ザ・サウザンド・レイクス』では、大胆にキーボードも導入。哀愁溢れる名盤に仕上がっている。その後、同じくフィンランドのプログレッシブ・ロック・バンド、キングストンズ・ウォールなどから大きなインスピレーションを受けた彼らは、中近東の音楽なども取り入れ、エクストリーム・メタル・ファン以外へのアピールにも成功。フィンランドを代表するロック・バンドへとなっていった。

センテンストも、同じく筋金入りのデス・メタル・バンドとしてスタートしながら、フィンランドの哀愁をうまく取り入れることに成功したバンドだ。3rdアルバム『Amok』はいわゆるメロディック・デス・メタルとしての傑作。その後はクリーン・ヴォーカルを導入し、ゴシック方面へと進んでいく。センテンストの作品はいずれの時期も、フィンランドらしい哀愁たっぷりの名盤とする声も大きい。

世界へと拡散していった フィニッシュ・メロディック・デス

そうしてメロディックなデス・メタルは、フィンランドのお家芸のひとつとなっていく。チルドレン・オブ・ボドム、カルマ、ウィンターサン、ノーサー、エターナル・ティアーズ・オブ・ソロウ、インソムニウム。フィンランドからは、特有のメランコリックなメロディを持ったバンドが数多く登場。ここ日本でも大きな人気を誇っていることはご存知のとおり。チルドレン・オブ・ボドムについては、のちほど改めて取り上げる。

アモルフィスなどもフィンランド特有のフォーク・メロディを取り入れたバンドであるが、さらにフィンランド色を全面に押し出した、いわゆる“フォーク・メタル”と言われるバンドも大きな人気を博している。アコーディオンやヴァイオリンをフィーチャーしたコルピクラーニは、Shamaani Duoという民族音楽ユニットが母体。つまり彼らは“メタルに民族音楽を取り入れた”のではなく、その逆“民族音楽にメタルを取り入れた”というべきバンドなのだ。

コルピクラーニとも所縁の深いフィントロールも、ブラック・メタルをベースにフィンランドの民族音楽を大胆に取り入れることに成功している（ただ、彼らはスウェーデン語で歌っているのだが）。そのフィントロールとメンバーを共有するムーンソロウ、よりエピックなスタイルを聴かせるエンシフェラムなども重要なバンドである。

†

ブラック・メタルというと、どうしてもノルウェーにその目がいきがちだが、フィンランドのシーンも負けてはいない。というよりも、90年代初頭、ノルウェーとフィンランドのシーンはライバル関係にあったと言ってもいい。

ノルウェーのバンドがおもにシンフォニックなスタイルを標榜していたのに対し、ベヘリットやインペイルド・ナザリーンといったフィンランド勢は、ノルウェー勢が毛嫌いしていたデス・メタルやグラインド・コアからの影響を露骨に取り入れたプリミティブさを売りとするなど、両者は美学的な相違も大きかった。

その対立に拍車をかけたのが、ベヘリットのメンバーによる“いたずら電話事件”だ。ターゲットとされたインペイルド・ナザリーンのメンバーは、ノルウェー勢からの脅迫電話だと思いパニックに陥っていたという（ベヘリットのメンバーは「犯行」を否認しているが）。

†

それにしても、90年代以降、突如フィン

シナジーでの相棒であり、二代目セカンド・ギタリストとして加入したローペ（写真右端）は元ストーン。アレキシも尊敬する存在だった。

ランドのバンドが国際的な活躍を見せるようになったのはなぜだろう。考えられる理由は、いくつかありそうだ。

“80年代にも、それなりの数のスピード・メタルやスラッシュ・メタルのバンドはいたよ。だけどほとんどのバンドはブレイクしなかった。それは英語の問題だったのではないかと思う。きちんとした英語で歌うことのできるバンドがいなかったからね。ところがデス・メタルになって、ヴォーカルがグロウルになると、英語の発音なんて関係なくなるだろ？”（オーリ＝ペッカ・ライネ）

“80年代のフィンランドのバンドは、アメリカやイギリスのバンドのマネをしようとして、結局うまくいかなかった。ナイトウィッシュ、ストラトヴァリウス、チルドレン・オブ・ボドムのようなバンドが結成されたとき、メタル・ファンは皆マネではない、独自の音楽というのを期待したんだ”。（トミ・コイヴサーリ／g：アモルフィス）

“ひとつのバンドが成功して、そのあとはそれの積み重ねということなんだろう。例えばアモルフィスが成功して、俺らなどはアモルフィスを聴いて育ったわけだけど、彼らはフィンランド国内よりも海外での活動を重視していたよね。そのおかげで俺らは最初から国内だけでなく、グローバルな方向での活動を考えることができたんだ”。（マティアス・ニーゴルド／vo：チュリサス）

†

もうひとつ忘れてはいけないのが［スパインファーム・レコーズ］、そしてそのA&Rを務めていたイーヴォ・ポーヨラの存在である。

1990年にヘルシンキで、もともとはCDの通販会社として設立されたこのレーベルは、アモルフィス、センテンスト、ベヘリット、XYSMAなど、数多くのフィンランド・バンドのホームとなった。現在はナイトウィッシュのマネージャーを務めるイーヴォも、最初はメールオーダー担当として入社。その後A&Rに抜擢され、2004年に退社するまでに、ナイトウィッシュやチルドレン・オブ・ボドム、ソナタ・アークティカらを含む30以上のバンドを発掘し、育てたのだ。

ナイトウィッシュは、1997年にデビュー・アルバム『エンジェルズ・フォール・ファースト』をスパインファームからリリース。翌年の2nd『オーシャンボーン』は、フィンランドのナショナル・チャートで5位、ドイツでゴールド・ディスクを獲得するなど、急激に人気バンドとなっていく。

なかなか日本にいると想像するのは難しいが、ナイトウィッシュの人気は少々のものではない。ヨーロッパでのライヴには万単位のファンが集まり、フィンランドでは国民的スターと言えるバンドなのだ。その成功の陰に、イーヴォの存在があったことは間違いない。イーヴォは2004年、ナイトウィッシュのマネージメントに専念するため、スパインファームを退社。現在もナイトウィッシュやビースト・イン・ブラックなどのマネージメント業務を行なっている。

†

チルドレン・オブ・ボドム発掘も、イーヴォの大きな手柄のひとつ。1993年からインアースドというバンド名で活動していた彼らだったが、すでに交わしてしまった“ぼったくり”の弱小レーベルとの契約から逃れるため偽装解散。チルドレン・オブ・ボド

Message from Ewo

元［スパインファーム・レコーズ］のA&Rで、チルドレン・オブ・ボドムを始め多くの同国バンドを世界へと導いたイーヴォ・ポーヨラが、アレキシとの思い出を語ってくれた。

――近年のアレキシは、あまり体調が良くなかったようですね。それはあなたも感じていましたか？

最近は思いっきり痩せていてからね。彼はもともと痩せていたのに、それがさらにだから、何かが変だとは思っていたよ。

――初めてアレキシを見たときの印象とは？

この人物は特別だという"オーラ"があったね。彼は非常に才能があったけれど、同時にとても地に足がついてもいて。そして、とてもおもしろい人物でもあったね。真面目になりすぎることはなくて、いつもジョークを言っていた。一方で、時折非常に暗い私的考えを持つこともあった。ひどい精神的苦痛、内面の痛みのようなね。まぁでも、繰り返しになってしまうが、とにかく地に足がついた青年だったよ。

――当時から"のちに大成する"と感じる何かを持っていた？

基本的にイエス。彼は人生のすべてをバンドとギターに捧げていたから。

――他のミュージシャンにない彼の個性とは？

もちろんアレキシと同じようにトレーニングをして、1万時間以上練習をしているギタリストは何千人もいるだろう。だけど、彼のヘアー・メタルとブラック・メタル両方への愛が、チルドレン・オブ・ボドムを特別なものにしているのさ。スティーヴ・ヴァイがディム・ボガーでプレイしているみたいなものだよ。それがチルドレン・オブ・ボドムのコンセプトだったんじゃないかな！

――あなたのお気に入りの楽曲というと？

やっぱり「エヴリタイム・アイ・ダイ」（2000年『フォロー・ザ・リーパー』収録）だね。ミュージック・ビデオに出てくる死神をよーく見てみてくれ（※イーヴォが演じているとされる）。

――彼らとの、楽しかった思い出を聞かせてください。

初の南米ツアーのときだった。《Machete Up Your Ass》というツアー名でね。コロンビアに到着したんだけど、パスポートのスタンプが足りないか何かで、入国させてもらえなかったんだ。地元のプロモーターが、当局とかけあっている間、俺たちは4〜5時間もノーマンズランド（※コロンビアに入国できていないので、どこの国にも属していない場所）の廊下で待っていなくてはいけなくてさ。進むことも戻ることもできず、20メートルくらいの何もない長い廊下に閉じ込められていたんだ。とにかくみんなお腹も空いていたから、トランジット・エリアの廊下にピザを注文したんだ。それから機材と台車を使って「小屋」を作って……タバコを吸っているのを、税関の係員や監視カメラに見つけられないようにね。そしてみんなで酒やビールを呑み始めたんだよ。アルコールは自分たちで持ち込んでいたから。だから4〜5時間後、やっと入国できたときには俺たちみんなすでに上機嫌のパーティ・ムードになっていたのさ！ショウが翌日だったのは幸いだったよ（笑）。

――日本では、チルドレン・オブ・ボドムをきっかけにフィンランドのメタル・シーンを知る人も多かったです。その功績とは？

チルドレン・オブ・ボドムを20年もの長きに渡って続けたことさ。10枚のスタジオ・アルバムに、2枚のライヴ・アルバムをリリースして、何百ものショウをやっていったから。

ムと改名し、スパインファームと契約をし直したうえで、デビュー・アルバム『サムシング・ワイルド』（1997年）をリリースしたのだ（もしイーヴォに見出されず、そのまま弱小レーベルと契約したままだったら、その後のバンドの歩みは違ったものになっていたであろうことは想像に難くない）。アレキシ・ライホというギター・ヒーローを擁し、トラディショナルなへヴィメタルにデス声を乗せた、それまでのメロデスとは一線を画するスタイルは、衝撃以外の何モノでもなく、彼らは瞬く間にスターダムへと駆け上っていった。

子供の頃、姉がいつもワスプを聴いていたことからメタルに目覚めたというアレキシ。やはり姉の影響でポイズンやモトリー・クルー、スキッド・ロウなども好んでいたというが、チルドレン・オブ・ボドムにあるアメリカンな感覚のルーツは、このあたりにあるのだろう。90年代、もはや過去の遺物となりつつあったギター・ソロに新たな息吹を吹き込んだアレキシの功績は計り知れない。

†

最後に、フィンランドのメタル・シーン最大の功労者とも言えるイーヴォの言葉を引いて、本稿を締めくくろう。

"ストーンなどが活躍していた当時は、国際的な知識を持つマネージャーがいなかったんだよ。どうやればヨーロッパやアメリカ・ツアーができるか、誰も知らなかった。80年代のフィンランドのメタル・シーンは、まだロシアみたいなものだったんだ。やがてストラトヴァリウスが海外をツアーするようになり、続いてアモルフィスやセンテンストも海外ツアーを始めた。そして、私がサインしたスパインファームのバンド、ナイトウィッシュやチルドレン・オブ・ボドム、ソナタ・アークティカなども、海外ツアーをするようになった。スパインファームで働いたことによって、世界中の音楽業界関係者とコネクションができたから、マネジメントをやるようになってからも、誰とコンタクトすればいいかわかるのさ。そして、多くのバンドが世界的に成功をするようになると、若いミュージシャンたちは夢を持って、ますます練習に励むようになる。フィンランドのシーンは、そうやって成長してきたんだよ"。

限られた紹介ではあったが、フィンランドのメタル大国ぶりをご理解いただけただろうか。ワルタリ、チュリサス、ウィンターサン、オランシ・パズズなどなど、本文で触れることができなかった重要なバンドも、フィンランドにはまだまだたくさんいる。ぜひ皆さんも、フィニッシュ・メタルの深い沼を探索してみてほしい。

フィンランド大使館で聞く

一般層から見ても“フィンランドはメタル大国”なのか!?

前項のとおり、メタル・ファンにとってフィンランドとは、まごうことなき“メタル大国”である。しかし、そこには“メタル・ファンがゆえのひいき目”が加わってはいないか？　そこで編集部はフィンランド大使館へおもむき、同国における一般目線での音楽事情について話を聞いてみた。なるほど、やはりフィンランドの皆さんはメタル大好きじゃないですか（笑）！

今回、母国の話を聞かせてくれたのは、フィンランド大使館・参事官である、レーッタ・プロンタカネンさん。普段はいわゆる広報官として、日本でのメディアおよび国際文化交流の窓口対応の職務に従事している。好きなバンドは HIM、アポカリプティカ、ナイトウィッシュ、バトル・ビースト。

——この度は、残念ながらフィンランドを代表するミュージシャンのひとり、アレキシ・ライホ氏が急逝してしまいました。

90 年代後半に私がロンドンに留学していた頃、現地のメタル好き講師に“ボドム湖での虐殺について知っているか？”と聞かれたのがきっかけで、彼らのバンドについて知りました。アレキシのことは私たち国民全員にとって悲しい出来事でした。彼の訃報を聞いたとき、私はクリスマス休暇でフィンランドにいましたが、このことは日本の NHK のような公共放送や主要な新聞の一面で扱われました。世界的に認知されているメタルという音楽について私たちは誇りに思っていて、世界中の多くのファンを魅了した彼のことを、これからも誇りに思うでしょう。

——では、一般的な視点から見たフィンランドの人々の音楽的趣向をおうかがいしたいと思います。ズバリ、ヘヴィメタルは国民的に人気の音楽？

世代によってさまざまな音楽が聴かれていますが、私の世代ではやはりメタルを聴く人が多く、フェスやライヴに行く人も多いです。“HEVISAURUS”という子供向けのメタル・バンドがいたり、メタル調のクリスマス・ソングがテレビで流れたり教会で演奏されることもあって、ニッチな音楽ではないのは事実ですね。

——メタル以外では、どのような音楽が人気なのでしょうか？

実はフィンランドはポップ・シーンも大きいんです。特に若い人たちにはフィンランド流のラップが人気で、社会的問題を題材に歌っている人がたくさんいますね。ほかにもギターで弾き語るシンガー・ソングライターたちもいます。一方で私の祖父母の世代ではタンゴが人気ですね。

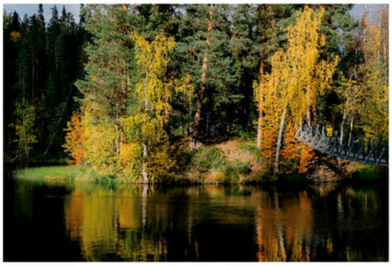
——《ユーロビジョン・ソング・コンテスト》2006 年大会では、フィンランド出身のローディが優勝しています。母国の方々も“我が国はハードなロックがお家芸だ”という感覚を持っているものですか？

メタルがフィンランド人の心の特別な位置にあることは事実でしょう。今年は BLIND CHANNEL というバンドが「Dark Side」という曲で勝ち進んでいるんですよ。外務省は 3 年前、国内のどの都市が“メタルの中心地”にふさわしいかを選ぶ《キャピタル・オブ・メタル》を共催しました。“住民ひとり当たりのメタル・バンド数が最も多い都市”が優勝となり、受賞都市は《トゥスカ・オープン・エア・メタル・フェスティバル》で紹介されたんですよ。外務省がメタルをプロモーションするなんて珍しいことかもしれませんが、そのユニークな取り組みを職務にできることは私にとってとても幸運なことかもしれませんね。

——フィンランド出身の著名なメタル・ミュージシャンは、フィンランド人がメタルに親近感を持つ理由の一例として“寒い気候”、“天気があまり良くない、日照時間が短い”ということを挙げていました。レーッタさんはどう考えますか？

ハハハ、どうでしょう。メタルに人気があることのひとつには、フィンランドの平等性を重んじる慣習にも要因があると思います。男女が平等であることのみならず、自分らしくあることに寛容で、長髪でメタルが好きでも外務省で働くことに問題はありません。世界にはメタル愛好家であることを隠している人もいるでしょうが、フィン

□フィンランドってこんな国！



○人口：552 万人
そのうち、アレキシの出身地でもある首都ヘルシンキには、約 64 万人が暮らしている。ちなみに平均年齢は 42.9 歳で、3/4 の人々が家持ちだそう……うらやましい！

○公用語はフィンランド語とスウェーデン語
ただし、88% の人がフィンランド語を第一言語としている。成人の英語力は調査 88 ヵ国中 8 位で、当然ながらバンドへのインタビューも英語で行なわれる。

○本当にメタル・バンドが多い！
住民 10 万人あたりに 53 バンド以上のメタル・バンドがいるという調査も。当然ながらその数字は世界一位で、あのオバマ元米大統領もそう認めているという！

○国土のなかで森林が占める割合：78%
“森と湖の国”と言われるように、国土の約 78% を森林が占めている。また“ボドム湖”に代表される湖の数は、なんと約 188,000 湖！そりゃ、事件くらい起こるだろう（苦笑）。

○春夏秋冬、季節の移ろいがある
オーロラなど冬のイメージが強いエリアではあるが、フィンランドにも美しい四季がある。夏の平均気温は 18℃（南部）～ 15℃（北部）と過ごしやすいが、冬の北部では平均でも－ 12℃になる。

○寒ーい冬には、やはりサウナに入りたい！
同国を象徴する施設につきその数も膨大で、国内には 320 万以上のサウナがある。これは全フィンランド人が同時に入れるほどの数なんだとか。なお、身を清めるといった意味もあり、四季を問わず入ります。

○やっぱり白夜はバイオレンス！
国土の北部を占める“ラップランド”の一部は北極圏（北緯 66.5 度よりも北の地域）となり、夏至では太陽は沈まず、24 時間明るい状態が続く。慣れないと体内時計が狂いそう……まさにバイオレンスだ！（強引）

▲大使館ではムーミンもお出迎え。作家／イラストレーターのトーヴェ・ヤンソン氏が初代ムーミンを描いたのは 1943 年のこと。

ランドではその必要はなく、異なる考えや音楽であっても受け入れられるものです。フィンランドは“幸福度ナンバー 1”の国として、3 年連続で選出されています。ヘヴィメタルのイメージからすると意外に感じるかもしれませんが、自分らしく表現できることが幸福度につながっているんだと思います。

——実際、それはとても幸福なことですよね。

メタルに関する学術的な研究によると、マイナー・コードでドゥーミィなものばかりがメタルの特徴ではないとも指摘されています。それにフィンランドでは“メタル・バンドはかくあるべし”といった形式はなく、メロディックなナイトウィッシュだけではなく、バトル・ビーストやチルドレン・オブ・ボドム、もっとオールドスクールなバンドでいえば HIM と、さまざまなバンドがいますからね。

——また、伝統的な民族音楽の影響が、激しくもメロディを持ったバンドが多いということにつながっているという意見も。

フィンランドの民族音楽はメランコリックでアップテンポな傾向があり、メタルへの影響があるかもしれません。ここに強烈な歌詞とギターが加わることで、メタルの土台ができているかもしれませんね（笑）。

——近年はたくさんのフィニッシュ・メタル・バンドが世界的な成功を収めています。国家にとっても、文化系・エンターテインメント系という点では大きな輸出産業と言えるのでは？

［ミュージック・フィンランド］という団体がまさしくそういった活動をしています。フィンランドの音楽産業は常に拡大していて、2019 年におけるフィンランドの音楽産業全体の総価値は 9 億 8800 万ユーロ（※約 1263 億 3900 万円）にも及んでいると言われています。メタルだけの数字ではありませんが、音楽関連の輸出は全体で 8170 万ユーロ（※約 104 億 7200 万円）にも上ります。この一年でライヴやコンサートに行く機会が皆無になった一方、オンラインで音楽を体験する人はもっと増えたでしょうから、その数字がどう変化したのか非常に興味がありますね。

——なるほど。では最後にフィンランドの魅力を改めて！

メタルが好きな方ならば、ぜひ夏のフェス時期にいらしてください。ヘルシンキで行なわれている《トゥスカ～》は 3 日間に及ぶ巨大なフェスです。メタル・フェスは危険で怖いというイメージを抱かれている方もいらっしゃいますが、フィンランドで実施されているさまざまな夏フェスのなかで最も犯罪件数が少ないと報告されているんですよ。昨年末には《Utopia》というオンライン・フェスが行なわれました。3月にはナイトウィッシュがオンライン・コンサートを行ないます。まだ旅行がままならない状況ですので、こういったフェスにもぜひ注目してみてください。

フィンランド発

ルオカンガス・ギターズがくり出す無二のメタル・トーンに注目！

“メタル大国”フィンランドにて、同地のミュージシャンから多大な信頼を得ている楽器ブランド“ルオカンガス・ギターズ（Ruokangas Guitars）”をご存じだろうか。高い技術によって独特かつハイ・スペックなモデルを多数ラインナップしており、無二の個性とサウンドを同時に身につけたいというメタル・ギタリストに最もお薦めしたいブランドのひとつである。今回は特にハードなプレイにピッタリの［Unicorn Artisan Valvebucker］、［Hellcat Deluxe］を紹介しよう。

□ ルオカンガス・ギターズとは？

年齢層を問わずギター・ミュージックの人気が高いフィンランドには、約50もの国産ギター・ブランドがあるが、そのなかでも個性的かつ高品位なギターを多く製作するのが、2020年で創業25周年を迎えた“ルオカンガス・ギターズ”だ。

ユハ・ルオカンガス氏が代表を務める本ブランドの特徴のひとつは、所属するルシアー（ギター製作家）全員が同様の技術訓練を受けており、同氏統括のもと分業ではなく、それぞれが1本ずつ製作を担当していくということ。そのため、どの個体も細部まで調整が行き届いたバランスのいい仕上がりとなっている。

もちろん豊富なアーティスト・リレーションによって培われたバラエティ豊かなモデルがなによりも魅力で、各機種が音楽ジャンルに必要な音、演奏性、デザインを備えている。フィンランドではジャンルを問わず多くのプロ／アマチュア・ミュージシャンが手に取るルオカンガスのギターだが、メタル界では同国を代表するバンド、ストラトヴァリウスのマティアス・クピアイネンが愛用することからも、その品質と信頼性の高さをうかがい知ることができるだろう。

◀マティアスにとって、難易度の高いストラトヴァリウスの楽曲をプレイするためには、自身オリジナルの［Hellcat］はなくてはならないギターなのである。

□ ブランド代表：ユハ・ルオカンガス氏からのメッセージ

ルオカンガス・ギターズでは、木材の持つトーン、レゾナンス、ダイナミクスといったアコースティックな特性を重視しており、その繊細さとダイナミクスがプレイヤーの音楽的感性と演奏技術をより高い次元へと導きます。

そのなかでもメタル・ギタリストに推薦するモデルのひとつが［Hellcat］シリーズです。細分化したメタル・ミュージックの要求に応えるべく、多彩なオプションを用意しています。ソロ・プレイヤーには［Aeon］も人気がありますし、クラシックなスタイルであれば［Duke］や［Unicorn］の太いトーンも大きな武器となるでしょう。

私がティーンエイジャーだった1980年代、フェイバリット・バンドのひとつはラウドネスであり、アキラ・タカサキの大ファンとなりました。40代後半になろうという今、ギターを作り続けられ、それを日本のメタル・ギタリストの手に届けられることほど誇りに思うことはありません。あなたが私の作ったギターを手に取って試してくれることを楽しみにしています。ガッカリなんかさせないぜ！

◀楽器コンベンションに並ぶルオカンガスのギター群。シェイプ、仕様の違いなど、バラエティ豊かなモデルが多数ラインナップしているのだ。

製品に対する問い合わせ：ノイベラックス ☎ 0586-76-7787 http://www.neuvellaxe.com/

Unicorn Artisan Valvebucker

価格：1,300,000円（＋税）

Specifications
- ボディ：アークティック・バーチ（トップ）、スパニッシュ・シダー（バック）
- ネック：スパニッシュ・シダー
- 指板：エボニー
- フレット数：22（ステンレス製）
- ピックアップ：バルブバッカー
- コントロール：ヴォリューム、トーン、ヴォイス・セレクト・スイッチ
- ブリッジ：チューン・O・マティック・スタイル
- 付属品：オリジナル・ハードケース

見た目のインパクトを裏切らない珠玉の1本

ルックスもゴージャスな本ギターは、メーカー設立25周年を記念して発表された限定モデルのひとつ。まず目に飛び込んでくるのは、ボディ中央に見えるインパクト大なピックアップだろう。これは真空管を使用して弦信号を増幅させる世界で唯一無二のピックアップ・システムで“バルブバッカー”という。

そのサウンドは外見を裏切らない“超”がつく個性的なものだ。通常の歪みサウンドのなかに別の飽和している音が同居しているようで、一般的なエレキ・ギターとは一線を画す出音に驚かされる。今まで体感したことのないこの豊かな倍音は、ヘヴィ・サウンドのなかでも特にオルタナティブ系にマッチしそうな感触と言えるのでは。なお、1ピックアップ仕様だが、ヴォイス・セレクト・スイッチでサウンド・キャラクターも変更できる。

もちろん本器の魅力はピックアップだけにあらず。厳選された木材を匠の業で細部に渡って入念に加工＆組み込んだ本器は、手に取った瞬間から質の良さが伝わってくる素晴らしい出来。木工は当然のこと、フレットやナットの処理、ボディ・バランスにいたるまでまさにパーフェクト。これはダウン・チューニングでラウドに弾いても、安定したパフォーマンスが期待できるものだ。

▲見ているだけでもテンションが上がる、ピックアップの両隣に搭載された真空管。この機構には永久保証がついており、そのことからも同ブランドのバルブバッカー・ピックアップに対する自信がうかがえる。

バルブバッカー・ピックアップを駆動させるために使うのが、この専用ペダル型パワー・サプライ。電源供給のほかにブースターも内蔵されており、アンプへのさらなるプッシュも可能にしている。

Hellcat Deluxe

価格：640,000円（＋税）

Specifications

- **ボディ**：アークティック・バーチ（トップ）、スパニッシュ・シダー（バック）
- **ネック**：メイプル
- **指板**：エボニー
- **フレット数**：24（ステンレス製）
- **ピックアップ**：オリジナル・ハムバッカー×2
- **コントロール**：ヴォリューム、トーン（兼コイル・タップSW）、3ウェイ・ピックアップ・セレクター
- **ブリッジ**：ゴトー製1996T
- **付属品**：オリジナル・ハードケース

サウンドとプレイアビリティを両立させた稀有な逸品

ルオカンガス・ギターズのラインナップ中、最もテクニカルな演奏に向いているであろう［Hellcat］シリーズ。

先に紹介した［Unicorn Artisan Valvebucker］同様、確かな技術によってクオリティの高い楽器に仕上げられている。ソリッド・ボディでは見かけることの少ないスパニッシュ・シダーをバック材に、トップ材にはアークティック・バーチを使用。ネックまわりはメイプルにエボニー指板という組み合わせで、やはり手に取った瞬間にわかる出来の良さに思わず感嘆。

倍音感やパワー感が優れているオリジナル・ピックアップも楽器の一部として溶け込んでおり、弦振動が非常に安定している。結果、深く歪ませても音像が崩れず、同時に深みのあるサステインを出力してくれるのだ。高い密度と剛性が感じられピッキング・レスポンスもいいので、音数が多くタイトな演奏が求められるスラッシュやスピード・メタルにはまさに打ってつけのギターと言えるのではないだろうか。

またSTディンキー・タイプのボディ・シェイプは絶妙にフィットするので、座ってのレコーディングから動きのあるライヴまで、ストレスなく演奏に集中できるだろう。木材の選定から製作にいたるまでビルダーのこだわりが詰まった、ぜひともメタルでプレイしたい1本。

▲一段分落し込みが施されているネック・ジョイント部。ハイ・ポジションでの演奏性の向上はもちろん、ネックとの接地面積を減らさないことで生まれるタイトかつシッカリとしたサウンドが印象的。

レビュー：梶原稔広
楽器写真：鈴木千佳

ヘヴィの流儀 #2

Text by Takahide“THUNDER”Okami
Translation by Tommy Morly
Live Photo by Yoshika Horita

Kai hansen
カイ・ハンセン

HELLOWEEN
ハロウィン

ヘヴィメタルをプレイするミュージシャンであれば、当然ながら、強烈なサウンドを追求していくものだ。そんな、それぞれが信念として持つ“ヘヴィの流儀”を聞いていくインタビュー、その第２回は、ジャーマン・メタルの顔的存在と言っていいだろう、ハロウィンのカイ・ハンセンが登場だ。歌心あるメロディをスピード感溢れるプレイに乗せるという楽曲は、まさにバンドのお家芸であり、当ジャンルを象徴するスタイルである。彼が生んできたヘヴィなサウンドについてを皮切りに、そのキャリアのなかで追い求めてきた理想の音楽像に迫る。

Our music was heavy, but it also had positive aspect and we were confident about that.

**俺らの音楽はヘヴィなだけじゃなく、
ポジティブな要素もあると自信を持っていた。**

エゴ丸出しだったけど、それでハッピーになりたかった。

――今回は、あなたが持っている“ヘヴィの流儀”について聞きたいと思います。音楽活動を始めた当初、実践しようとした“ヘヴィな音楽”とは？

具体的なヴィジョンを描いていたわけじゃなかったかな。俺は何でも好きなものを聴いていて、特にヘヴィロックに踏み込むきっかけを作ってくれたのはグラム・ロックだったんだ。 スレイド、スウィート、T・レックスといったバンドが自分の心に突き刺さっていき、そこからディープ・パープルやジミ・ヘンドリックスの音楽に惹きつけられていった。反逆的なロックンロールのスピリット、これがヘヴィな音楽の始まりだったと思うね。

――音とともに、その精神性にも惹かれたということですね。

うん。その後ギターをプレイするようになってから「スモーク・オン・ザ・ウォーター」みたいなロックをやりたいと思うように

どうあるべきかなんて考えず、自分が好きなこと、やりたいことを追求していたよ。

なって。ただ、曲を丸ごと練習するよりも、それを通じて学んだことを自分のものとして吐き出すようになっていって。それがドイツ人としてのルーツなのかはわからないけど、次第に好きなものすべてに影響を受けて自分の音楽を作ることにシフトしていったんだ。

――10代の頃“この音は新しいサウンドだ”、“これまでにないヘヴィな音だ”と感じていたものは？

若い頃を振り返ると、父の知り合いの息子に「ブライトン・ロック」（クイーン）をプレイしてもらったことがあってさ。それを耳にした途端“ファック！　なんだこれは？　こんな新しいものがあるのか！”となったよね。それに俺は学生の頃に交換留学でイギリスに住んでいたことがあって、ちょうどその頃ラモーンズやセックス・ピストルズが出てきたばかりで、“これもクールじゃないか。すごいぞ！”と大好きになったよ。NWOBHMの時代が来て、アイアン・メイデンやジューダス・プリーストも出てきた。アイアン・メイデンの『キラーズ』にはブッ飛んだし、常に何かしらの驚きはあるものだよ。

――自分でバンドを始めた際には、やはり“ほかのバンドよりも強烈な音を出したい”という目標を持っていたものですか？

俺はそんな風に考えたことはなかったかな。単に自分のなかで衝動的に生まれてきたものをやってたいという感じだね。影響を受けたものを咀嚼して自分なりの形で吐き出していく。どうあるべきかなんてことは考えず、自分が好きなもの、やりたいことを追求していたよ。もちろん自分がやれる範囲という制限はあったけど（笑）。そも

そも音楽って競争するものじゃないし、“誰よりも速く、そして誰よりも高くシャウトしろ！”なんて考えたことはなかったな。自分の音楽を思いどおりにってな感じで、とてもわがままでエゴ丸出しだったけど、それでハッピーになりたかったんだ。

——あくまで、自分が楽しめるようにという感じだったんですね。

そう、そういうこと。別に“これから3年で最もホットなバンドになり、世界を制覇してやる！”なんて野望はなかったからさ。音楽って名声や富を得るためのものじゃないから。もちろんそれらを得られれば悪くはないだろうけど、それが音楽を作る動機や理由にはならなかった。ロック・スターになりたかったんじゃなくて、音楽を作りたかったんだ。もし純粋にスーパー・ヒーローになりたいっていう人がいたら、もちろん“どうぞどうぞ、なってくださいな”と応援はするけどね（笑）。

ダウン・チューニングなんて
ガンマ・レイを始めるまで
考えもしなかった。

——ハロウィンが始まり、1985年に『ハロウィン』をリリースします。その後のアルバムから聴けるスタイルよりも、イーヴィルな感じもありましたよね。それは若かりし頃だからこそあったスタイルだと言えますか？　今でもあなたの一部として存在している？

もちろん今でも俺の一部分だし、健在だ。あの頃の俺らはみんな若くて、野蛮で反逆的だった。そもそもヘヴィメタルは反逆のシンボルだったからさ。レザー・ファッションや弾丸ベルトなんかを着ていて、怖くも見えていただろ？　スレイヤーやヴェノムみたいなバンドもいて、悪魔的な印象さえ持たれていたかもしれない。俺らは誰も悪魔的ではなかったけど、“中流階級で育ったガキどもが道をはずれて不良になった”なんて思われていただろうさ。

——やはり、世界共通でそういう認識をされますよね（笑）。

時代は流れてヘヴィな音楽をやっていてもそんな風に見られることはなくなったけど、あの当時のイーヴィルな部分は今でも俺の一部だ。ときには品行方正に過ごせていたらと思わないわけじゃないが、これが俺の生き方だから（笑）。

——あなたのハイ・トーン＆シャウトと相まって、高い緊張感が演出されているのもヘヴィに聴こえるポイントだったと思います。

そのとおりだよ！　俺がそういった音楽を聴いて育ったってのもあるし、それこそスウィートやスレイドの影響もあるだろう。「チャイルド・イン・タイム」でのイアン・ギランの歌唱は素晴らしくて大好きだったし、ロバート・プラントなんて甲高いスクリームするヴォーカルで、そのさらにマスターといえばロブ・ハルフォードだろ。

——まさにマスターですね。

昔AC/DCを観に行ったらその前座がジューダス・プリーストだったんだけど、俺はまだ彼らのことを知らなくて。初めて観たそのとき“このサウンドは本物だ！”と思ったよ。1stアルバムでの俺のヴォーカル・テクニックは大したことなくて経験も足りなかったけど、心の底から歌っていた。自分の頭のなかで聴こえていたサウンドを自ら実践してみたんだ。満足することばかりじゃなかったけど、今でも成長したいと願いながらやっているよ。

——その『ウォールズ・オブ・ジェリコ』（1986年）がリリースされ、翌年からの『守護神伝』（1987年～）シリーズにて、人気やスタイルが確定したとも言えます。両『守護神伝』の大きな要素として“一緒に歌えるメロディのある楽曲”という点が挙げられますが、そこが最も重要視したところでしょうか？

感じたままにやってみるべき。それで嫌われても、自分が納得するなら何の問題もない。

俺らは常にメロディを大切にしてきたよ。自分が好きな音楽のすべてにメロディがあったし、俺らの親以上の世代のシュラーガー（※ドイツの古い大衆ポップス）なんてとてもメロディックだ。ちょっとクサいメロディもあるけど、ヴァイキー（マイケル・ヴァイカート）や俺はそれに影響を受けているから。クラシックなメタルやロックンロールよりもメロディックになっていったのは、そういった背景もあるからだと思う。これは俺らが望んだかどうかとは無関係に、結果的にそうなってしまったんだ（笑）。

――その当時、チューニングを下げようと検討したことは？

それはなかったね。ハロウィンを抜けてガンマ・レイを始めるあたりまで、そんなこと考えたこともなかったよ。Eのスタンダード・チューニングで、弦のゲージだって＜.009～.042＞という最も細いヤツでプレイしていた。ダウン・チューニングが普遍的に扱われるようになったのは90年代になってからのことだったし、俺が初めてチューニングを下げたのは『サイ・ノー・モア』（1991年）からだから。どんなサウンドになるのか試しにやってみたら気に入って、そのまま採用したんだ。最近では全音から全音半下げる音楽が主流だから、確かにチューニングの違いで新旧のメタルと位置づけることもできるだろうね。

――例えば「アイム・アライヴ」や「イーグル・フライ・フリー」などのアップテンポでメロディもある曲は、チューニングを落としてプレイしても、その魅力はあまり変わらないと思いますか？

それはあり得ないかな。俺らはやっぱりこのままでプレイしていきたいね。Eのスタンダードでプレイしたほうが、どんよりとした空気にならなくて済むからさ。Cのチューニングくらいまで下げてしまうと、どんな曲もまったく別の雰囲気になってしまうだろ？　もちろん、それがいいこともあるだろうけど、必ずしも必要というわけではない。それに、ただチューニングを下げたからといって、ヘヴィになるわけでもないしさ。

――また「DR.STEIN」のような、明るい曲もハロウィンの魅力ですよね。明るいメロディとヘヴィな印象というものは、共存すると思いますか？

俺らハロウィンは、それを証明したと思っている。俺らの音楽はヘヴィなだけじゃなくて、ポジティブな要素も持っていると自信を持っていた。俺が「フューチャー・ワールド」を書いたとき、メタル・シーンではおどろおどろしいイーヴィルな雰囲気を演出するのが主流になっていた。しかしそれがあまりにも流行り過ぎてしまったせいで、バカバカしくも思えてきてさ。

――それ一辺倒の音楽ジャンルでもないのに、と。

そもそも俺たちは馬鹿げたことやユーモラスな話で笑い合う間柄で、そういったポジティブなことを音楽で表現したかったし、それでいてヘヴィにさせたかった。70年代のスウィートなんかそういったセンスで音楽をやっていたし、それを再びやるときが来たんじゃないかと思ったよ。それでヴァイキーは「DR.STEIN」を書き、俺は「フューチャー・ワールド」を書いた。両方ともポジティブな曲で「DR.STEIN」にはユーモアやおもしろさがあってクールだったし、メタル・シーンにひとつの考え方を持ってきた気がするよ。

――そのとおりで、従来の固定観念を壊す、革新性もあったと思います。そして、ヴァイキーとあなたのツイン・ギターという点も初期ハロウィンの魅力ですが、ユニゾン・リフの場合でも、ギター1本の音量を倍にするのと、ふたりでプレイするのではパワー感に違いが出ると考える？

そうは思わないかな。オジー・オズボーンはブラック・サバスの時代からずっとひとりのギタリストとやってきたけど、巨大でクールなサウンドだっただろ？　あれはそもそも音楽スタイルにフィットしていたからで、それでまったく問題はないよ。しかしアイアン・メイデンがギタリストひとりになってしまったら、それはもはや別物だろうし誰も聴きたくないだろう（笑）。ひとりかふたり、ましてや3人のギタリストでプレイすると、サウンドだけじゃなくて、作曲方法やギター・パートの組み立て方からして変わってくるものだから。

自分が自分に対して何を期待しているかが重要なんだ。

――ハロウィン脱退後のガンマ・レイはより攻撃的な楽曲が多いこともあり、ヘヴィさという点では強い気もします。

そもそもハロウィンを抜けてガンマ・レイを始めたとき、俺は自分をハロウィンであることから解放して、また違う地平線に向かって歩いて行きたいと思っていた。そしてそれは最初の3枚のアルバムで示せたと思うし、それは作曲やアルバムの雰囲気からわかってもらえると思う。本当にたくさんのスタイルがあって、どうやって1枚のアルバムに収められたのか今でも不思議に思うくらいだ。

――多様性は高いですが、一貫した印象もありますよね。

クイーンはどんな音楽であっても、自分たちが好きなものをプレイすればいいってことを証明してくれた。だって結果的に自分でプレイして歌えば自分らしいものになるからさ。自分をひとつの型にはめ込む必要はなくて、感じたままにやってみるべきなんだ。もし伝統的なシュラーガーをやりたかったら、やってみればいいじゃないか。それで嫌われたとしても、自分が納得するなら何の問題もない。誰かにどう期待されているかなんて気にするべきじゃない。自分が自分に対して何を期待しているのかが重要なんだ。それを人々が聴いてくれて気に入ってもらえたらラッキーだということだね！

――自分でも音楽を作っている人は、その言葉に背中を押してもらえたことでしょう！　テンポ感とヘヴィさの関係についてはどう考えますか？　BPMの速い曲は勢いとテンション感は高くなりますが、その分軽くなってしまう傾向もあるように思います。

速い曲はそれだけでヘヴィさを失ってしまうだろう。ツーバスをかなり速く踏めばとにかく急いでいるってフィーリングが出せるけど、本当にヘヴィなものにさせたいのならば、スロー・ダウンさせなくてはならない。つまり、ゆっくりでも通用するものをプレイしなければならないんだ。ただ、

どちらがいいか悪いかということではなくて、それぞれの良さがあるということを忘れてはならないよ。

——さてアルバムに先行して発売されるシングル「スカイフォール」は非常にハロウィンらしい、とても高揚感に満ちた曲ですね。作曲はコロナの時間を活用して行なわれた？

実は、こういった状況になる前からいろいろと作曲を始めていてね。プリプロダクションの段階になっても、世の中はまったく騒いじゃいなかったけど、次第にこんなクレイジーな状況が始まり、“まるで空が落ちてくるみたいだ。すべてが大きく変わろうとしている”という意味を込めてこの曲を作ったんだよ。

——今後予定されているアルバムのサウンド・コンセプトも、この曲の延長になるのでしょうか？

それはノーだと言わせてもらおう。このアルバムにはさまざまなソングライターたちがいて、方向性も多岐に渡っている。「スカイフォール」はあくまでもこのアルバムの一部分と言うことだね。曲ごとにメインの役割を担うシンガーやギタリストが変わるわけだし、曲もすべて異なるものばかりさ。まあ「スカイフォール」のように独特な個性を持った曲ばかりが集まったと言えるかもしれないね。

——ギター・プレイをヘヴィに聴かせるための大切な要素とは何になるでしょう？

出したいサウンドに合った、自慢のグッド・サウンドなギターを選べ（笑）！　アンプなら、今回はオールドのマーシャルに現行品のキャビネット（※同社製）を組み合わせて使ったし、エフェクトはボスのイコライザー［GE-10］とチューブ・スクリーマーを使ったね。オン・マイクを２～３本立てて、さらにルーム・マイクも立てたよ。満足のいくサウンドになるまでアンプのツマミを調整することもあるし、マイクのミックス具合でも調整するよ。曲によって異なるキャラクターが欲しければ別のペダルに変えてみることだってあるし、ギターを交換してみることもある。それにツマミをほんの少し動かすだけでも、けっこう変わってくるものだよ。

——録音では、ギターを頻繁に交換するものですか？

ライヴと一緒で、可能な限りギターは交換したくないと思っている。でも、それでもうまくいかないときは“この曲ではレス・ポール、こっちではエクスプローラーだな”という感じにはなるし、もう少しパーカッシブなサウンドが欲しければテレキャスターを使うこともあるさ。その結果、気づいたら何本か使い分けているなんてこともたまにあって（笑）。ただそうやって持ち換えたギターはリズム・ギターとのコントラストを出したいことが多いので、大体ソロやダビングで使うことが多いね。

——また、ギターの低音が必要以上に強調されていない分、マーカス（グロスコフ）のベースがいい仕事をしていて、それがしっかりとしたボトムにつながっていると感じました。

俺らの曲はギターがかなり速いこともあるし、個人的にはロー・エンドを強調した太いサウンドがいいと思っている。しかしミックス全体を考えたときに、ベースのスペースを作るためにギターのロー・エンドをカットすることもあるんだ。ミックスのことを考えれば必ず誰かしらをカットしなくちゃいけないし、それは問題じゃないさ。ギターを前に出そうとしたらベースが引っ込んでしまうこともあるからね（笑）。

——現在のハロウィンはトリプル・ヴォーカル編成（カイ、マイケル・キスク、アンディ・デリス）となります。マイケル、アンディのヴォーカルとのバランスを考えて、あなたが歌唱で意識した点はありますか？

そのとおりで、「スカイフォール」では俺ら３人とも歌っているよ。ヴォーカルの割り当てについてはいつもけっこうな議論をしているんだけど、大体はプロデューサーを交えて最終的な形に至っている。誰がどこをどれだけ歌うか言い合いになることもあるんだけど、結局はみんながハッピーになる形になっているから安心してくれ（笑）。

——ハハハ、それはなにより。

俺らは３人とも自信があって技量も確かなわけだから、そこは悩みの種でもあるんだ。でもアンディとキスクがメイン・シンガーであり、俺はあくまでもギターが本職のサイド・シンガーだともわきまえているよ。もしアルバムのなかで俺の出番がちょっとしかなかったとしても、それでかまわないさ。実際それぞれが歌ってみて誰が一番のサウンドか聴き比べてみるし、ソングライターやプロデューサーの意見にもしっかりと耳を傾けている。ただ、それも簡単なことじゃないんだけどさ（笑）。

◎ニュー・アルバムに先立ち、ハロウィン印満載のシングルがリリース！

『スカイフォール』
ビクター／ VICP-35113
※４月２日発売予定
※［VICTOR ONLINE STORE］では、Tシャツ付き限定セットも販売

取材：岡見高秀
人物写真：高宮紀徹（67531graphics）
ライヴ写真：中島たくみ

LOVEBITES
asami

疾駆するスピード・チューンからスケールの大きいロック・バラードまで、バラエティ豊かなメタル・ソングをそろえるのが LOVEBITES の魅力だ。その多彩な楽曲をひとつの個性としてまとめるのが、バンドの象徴となるシンガー＝ asami の重要な役割と言える。この 3 月にリリースされる EP『グローリー、グローリー、トゥ・ザ・ワールド』では強烈なスラッシュ・チューンを手がけた彼女の、ヘヴィメタル・シンガーとしての熱意と決意。

PASSION AND DETERMINATION

“やれることをやるしかない”という想いがあった。

──1 月・2 月に予定されていたコンサートは無事 3 月に振り替えとなりましたが、やはりここまでコロナ過が長引くと想定していたバンドは少ないかもしれません。

そうですね。突然、1 年間何もできなくなってしまって、この冬もちょっと怪しいのかな、大丈夫かなという心配はありました。

──イベント運営について、観客数のガイドラインが出ているとはいえ、数字以外の部分での開催の可否はそれぞれバンドに委ねられているところもあり、そのあたりの判断は難しいですよね。

──気持ち的にはやりたくもあるんですが、やっぱりみんなが安心して、少しでも気持ちよく来られるライヴじゃないといけないとは思っていて。東京に来るのが怖いという方もいると思いますし、チケットもお安いものではないので、早い段階から緊急事態宣言中に無理やりやるものではないなと。

──この状況は同時に、ライヴへ向けた準備にも支障を来すことでもあり。

本番が延びたとは言え、こちらはリハーサルや練習を続けていかないといけないので、そのあたりも気をつけながら少しずつ、なるべく止まらないようにやっていくようにはしています。それこそ換気や人数にも神経を使っているので、違和感じゃないですけど、音楽に集中しづらいなかでやっているなという感はありますね。

──何よりも本番でしか得られない慣れもありますから、ライヴが遠のくというのはミュージシャンにとっては致命的でもあるのでは。

ですね、本当にこんなに何もできなくなったことがなかったので。私はもともとポジティブ派なんですけど、やっぱりメンバー5 人いろいろで、ライヴができずに悲しい・悔しいみたいなほうに気持ちがいっちゃうメンバーもいますし。スタッフとも“どうやったらうまく回せていけるだろう”って悩んだ一年だったので、どの世界も皆さんそうだと思いますけど、情緒的な不安定さを伴う一年でしたね。

──そのとおりで、どのバンドも足踏みをした一年となりました。表だった活動のできない期間を曲作りに当てたミュージシャンは多くいましたが、そこは LOVEBITES も同様でしたか？

やっぱり“そのなかで、やれることをやるしかない”という想いはあったので、できる限り曲を作って、それで今回の『グローリー、グローリー、トゥ・ザ・ワールド』

『グローリー、グローリー、トゥ・ザ・ワールド』
ビクターエンタテインメント
・完全限定盤 A（CD ＋ DVD）／ VIZL-1873
・完全限定盤 B（CD ＋ CD）／ VIZL-1874
・通常盤（CD）／ VICL-65483

やっぱりその瞬間に意見を言って作りあげるほうが、お互い気持ちよく作業ができるとは思います。

が生まれたんです。それでもやっぱり難産でしたね。制作中も限られた人数でしか会えないとか、電車移動は危ないからやめようとか、本当に細かいところがうまくいかなくて。純粋に楽曲制作に集中するのが難しいなか、頑張ったなというのはあります。

――データでのやりとりを駆使して楽曲を作っていくバンドも少なくありませんが、LOVEBITESの場合は、しっかりと集まりリハを重ねて曲を作っていくという方法が一番であると。

ある程度まではコンポーザーとプロデューサーが集まって進める形ではあったんですけど、アレンジになるとみんなで相談してやってきたので。そういうのがすべてリモートになったので、その瞬間の修正や“こっちのほうが良くない？”という話し合いがリアルタイムでできなかったのは、けっこう難しかったなとは思いました。

――では今後コロナが収まったのちも、リアルで集まって楽曲を煮詰めていきたい？

やっぱりその場にいないと、その瞬間のアイディアは入れ込めないので。“それはこっちのほうがいいな”とかその瞬間にやるほうが、クオリティの高いものが作れるんじゃないかなとは思います。

――ネットを介した制作方法に効率の良さを感じたバンドもいるなか、LOVEBITESは昔ながらのロック・タイプな人たちだったという（笑）。

ハハハ、ですね！　私はその場に行きたいタイプなので。あとから“ちょっとここが……”とか言われても、作っている側か

らすると、そのときに言ってもらいたいじゃないですか(笑)。

——あとから言わないでよ、みたいな。

そうそう！　できあがってから“ここを変えて”って言われると、“そうしたら、こっちもこうしなきゃ”とか出てくるので。やっぱりその瞬間に意見を言って作りあげるほうが、お互いに気持ちよく作業ができるとは思います。

あえて聴かず、参考にもせず。自分がやりたいように書いてみた。

——そのように、普段とは勝手の違うなかで作りあげられた『グローリー～』には、《コロナを乗り越えて世界に栄光あれ》というメッセージが込められているそうですが、そのテーマは制作前からあったんですか？

いや、そんなことはなかったです。もちろん闇雲に作ってはいないんですけど、midoriの持ってきた「グローリー・トゥ・ザ・ワールド」のメロディには希望に満ちた感じがあって、第一印象から“あ、これはGLORY的な、世界に何か訴えかけられる作品に仕上げることができるんじゃないか”というのがあったので、自ずとそういう方向性に。

——なるほど。通常盤に収録される4曲は、すべてハード・チューンとなりました。これも自然な流れで？

今までと同じように、それぞれのカラーを生かして作り始めたので、特にここを目指そうというのはなかったですね。例えば私だったらスラッシュを作ろうとか、メロスピを作ろうとか、大まかにはありましたけど、最初に考えていたのはそれくらいですね。

——まさにasamiさんのペンによる「パラノイア」は、思いっきりストレートなEmのスラッシュ・メタルに仕上がっていて。バラード曲の印象が強い分、意外だなとも思ったんです。

今回はちょっと“asamiなりのメタル”というところで、初めて本気のスラッシュに挑んでみたんですね。私はもともとの畑が違うこともあって、最初はバラードなど自分の得意分野を書くことが多かったんですけど、メタルをやるようになってから、私自身がめちゃくちゃスラッシュを好きになっちゃったんですよ！　歌っていても聴いていても、スラッシュってめっちゃカッコイイなって思うようになってきて。勝手に“スラッシュ・アサミ”と名乗るくらい自分自身がものすごいスラッシュを好きになってしまったから、そこに挑戦してみよう、今度は自分で書いてみようという想いで挑戦しました。

——素晴らしい心意気ですね！

いや～、やりたくなっちゃったんですよね（笑）。ただ、ほかのメタル・アーティストの曲はあえて聴かないようにしています。やっぱり私が書いて初めて新しいものが生まれた……みたいな曲にしたかったので、あえて聴かず参考にもせずに、自分がやりたいように書いてみました。

——曲の根幹としては、どのパートからどう作っていったんですか？

今回はリフから入ったんですけど、私はギターは弾けないので、いつも思い浮かんだリフを“口ギター”で言いながらボイス・メモに録っているんですよ。そこからピアノでギターの音色を打ち込んでいき、それにコード進行を考えてAメロ、Bメロを乗せていきました。

——自分で曲を作る場合、自分の歌いやすさという点はどれくらい重視するものですか？

うーん、今回自分で作って歌えるからこそ、私も自分の歌いやすいものができるだろうと思っていたんですけど、まさかの一番レンジが広くなったというか、一番難しいことになっちゃって。自分で歌いながらできるからこそ、すごく難しいメロディが作れたっていう感じですかね。

——ちなみに、ほかの方の曲の場合は？

もちろんメロは作ってくれるんですけど、最終的には私が歌いながら“もう1個ハイトーンいったほうがカッコイイな”とか“下のラインをもっとつけたほうがいいな”とか、自分のレンジに合わせたリアレンジはやりますね。

——「パラノイア」はレギュラー、「ディストピア・シンフォニー」はドロップDなど、チューニングの違いによって、主軸となるピッチも変わってきます。歌いやすさの違いはありますか？

いや、そこは全然ないですね。レギュラーもドロップDも関係なく、みんな“asamiならイケるだろ”みたいな無茶振りで作ってくるので（笑）。私、どちらかというと下が出るほうなので、下もかなり使って作っていきますね。

どう調理したら自分らしく歌えるか探求心のほうが強くなってきて。

——LOVEBITESのフロント・ウーマンとして、メタル・ソングを歌ってきて5年強経ちました。このスタイルで歌い始めたときと今で、歌唱法として変わってきたところはあるものですか？

これはすごく難しいんですけど、私はLOVEBITESでメタル・シンガーになる前って、基本は裏方でコーラスや専門職をやってきたんですね。だから自分の歌い方や声って、はるか昔に置いてきていて。やっぱりアーティストさん、その現場、その案件に合わせて声を変える仕事をしてきたので、LOVEBITESで最初に“はいどうぞ”って言われたときに、“え、どの声でいきますか？”みたいな感じだったんですよ。それくらい自分が定まっていなかったので、ここにきてやっと“あ、これが私だな”っていうのが確立されてきたかなと思いますね。

——ポップスなどでのコーラス・ワークとメタル歌唱だと、喉や体の使い方に違いはあるものですか？

自分のなかでもこんなにハードでこんなにパワーを使う楽曲ってやってこなかったので、何もかも初めてだったんですけど、出してみたら意外と“あ、出たな”っていう感じで。テクニックとして出しているというよりは、やってみたら意外と出たっていう感じで、今はその延長上という。あとはハードな曲を最初から最後まで同じパ

▼midori (g)、miho (b)、asami (vo)、haruna (d)、miyako (g、k) ／L to R

曲によって色が変わるシンガーのほうがおもしろい。本当に両極端な曲を作りたいと思って。

ワーで歌い切るために、どこできちんと力を抜くのかを意識しないと最後まで持っていくのが大変だったりするんです。力強く歌っているように見せて、ちょっと抑えるみたいなところを作ったり。

――『THE LOVEBITES EP』や『アウェイクニング・フロム・アビス』の頃に比べると、明らかに低音の太さは増していますよね。

確かに今振り返って最初のEPやアルバムを聴くと、やっぱりまだ迷っているなって自分でも思います。歌い方に迷いがあるというか、どこかで"これでいいのかな?"というのが垣間見える。それが最近はどんどん自分のものになってきているというか、歌っていてもどんどん気持ち良くなってくるし、自然に出てくるようになったとは思います。

――一般的なメタルの楽曲はギターから作ることが多い分、EマイナーやAマイナーkeyになることが多いですよね。先ほどの話にも通じますが、そのあたりもあまり関係はなく?

そうですね、ドンと来いな感じです(笑)。それに、うちはギター先行の作曲者もいればピアノで作る人もいて、いろいろな楽曲が入ってくるので、そこもおもしろいところなのかな。

――スラッシュ系の楽曲の場合、メロディの動きが小さいなかで細かく抑揚をつけなければならないとか、そのなかで唐突にピッチが上がったりなど、"ならでは"の難しさがあるのではとも思うのですが。

本当になんでこんなにスラッシュが好きになったんだろう?っていうくらい、最初は一番苦手だったんですよ。おっしゃるとおり、ずっと同じに聴こえるじゃないですか。リフもずっとそうで、"はい、次サビだよ、ここからBメロだよ"っていうわかりやすい提示がひとつもなくて、見失ったら永遠に間違っちゃうという(笑)。しかも、これまでは曲のなかに抑揚があるものしか歌ってこなかったので、最初はどうやって歌いこなしたらいいんだっていうのが本当に難しくて。

――突然スラッシュを前にしたら、そうですよね(笑)。

ただ、そこはもともと専門職というか、そういう血が騒ぐじゃないですけど"どう調理したら自分なりに歌えるだろう"って探究心のほうが強くなってきて、やっていくうちに"きた、はまったー!"みたいになったときがあったんですよ。そこからですね、ハマっちゃってスラッシュが一番好きになったのは。今では一番歌いやすいし、レコーディングも一瞬で終わるようになって。逆にメロディアス系のほうが時間がかかるようになっちゃって(笑)。

――ハハハ、なんと! そのスラッシュ歌唱法に開眼した瞬間というのは?

「ザ・ハマー・オブ・ラス」(『アウェイクニング～』収録)をレコーディングしているときは、まだ"これでいいのか?"という

のがあったんですけど、その次の作品（『バトル・アゲンスト・ダムネイション』）のときにはもう少しずつワクワクし始めましたね。だからのちのライヴ DVD で歌ってる「ザ・ハマー・オブ・ラス」は少し変わってきてるんじゃないかな。

――確かに、作品を追うごとに自然体の力強い歌が聴けるようになりました。その分、喉のケアにも特に気を遣わなければならないのかなとも思うのですが。

とにかく冬になると、ものすごく神経質になってきますね。やっぱり乾燥が一番怖いというか、乾燥が一番喉に響いちゃうタイプなので。特に乾燥地帯のヨーロッパ遠征に行ったときなどは、毎日ひとりだけどこにも寄らずに帰って、お風呂の熱湯を出して……部屋の警報を鳴らしちゃったときもあったんですけど（苦笑）、常にそれくらいケアはしています。普段から何か飲むとかトレーニングでどうこうするっていうのはあまりないんですけど、自分のなかで一番怖いのは乾燥。

――声が出しづらくなるという具合？

そうですね、イガイガし始めるというか。ただあまり気にしないようにもしていて。それでも本当に“もうダメだ、調子悪い”という日は、ちょっとアレンジをしたりもしています。どこかのパートで気持ち程度抑えたり、絶対出さないといけないところの前で少し休んでおこうとかは考えながらやっています。

――ちなみに、ハード・リカーや辛いものを控えるなどはあるものですか？

私辛いもの大好きなんですよ。

――あ、すごく好きそうに見えます（笑）。

好きなんですけど、辛いもので喉がダメになったことは過去ずっとないので、大丈夫なのかなって。ちょっと心配のお声をいただくこともありますけど（笑）。

――ライヴ前のウォーミング・アップはどれくらい行なうものですか？

これは本当に人によると思うんですけど、私は極力声を出さないんですよ。始まる前にめちゃくちゃ声出しをしてる人もいますけど。私はなるべく声を出さないっていうのを前日までやって、当日のリハーサルから少しずつ出していきます。それで本番が丁度よくなるんですよね。

――リハーサルで徐々に温めていくという感じなんですね。

そうですね。リハもファルセットから歌い始めたり。思いっきり出さないで始めて、最後の曲だけ本気で歌っておしまいという。そのくらいエネルギーを使う曲ばかりなので、基本は温存しておきます。

――そのライヴでは、スタジオと同じように歌うようにしますか？　それともライヴらしいアレンジで歌いたい？

“CD のほうが良かった”って言われるのが絶対イヤなので、それ以上出しながらもライヴならではのものをつけ加えるみたいな。“ライヴのほうが良かったよね”って言わせるようなところは意識しています。

やっぱりメタルって曲先行でありたいというか。

――古今東西、女性ヴォーカリストを擁するメタル・バンドは多々ありますが、やはりメタルであるからには、女性ヴォーカルでもハードなテイストは多かれ少なかれ求めるところとは思います。“男勝り”を狙うバンドもいますが、asami さんはハードな面と女性らしい歌声のバランスをどう考えますか？

私はそれをしっかり決め込んじゃうよりは、曲によって色が変わるシンガーのほうがおもしろいかなと思っていて。なので LOVEBITES のときも、曲の雰囲気とか歌詞の内容によって声色を変えたりしています。ものすごく女性らしいきれいでクリアな感じで歌っている楽曲もあれば、ちょっと歪ませて強いロック色を表現したりもしているので。

――スラッシュからバラードまである LOVEBITES では、それが実践しやすいとも言えそうですね。

そうですね。それぞれの曲を聴いて“あれ違う人が歌っているの？”と思わせるくらいでいいのかなって。

――特に CD では asami さんの歌唱が女性バンドならではの個性や良さを担っているところがあると思うので、そのバリエーションは強い武器になると思います。ちなみに、今後歌ってみたい曲調はありますか？

今後もスラッシュを作っていきたいなとは考えていて、今回の『パラノイア』ではおどろおどろしさ、不気味な感じを表現したんですけど、もっといきたいなとは思っていて。そういうあまり人が作らないような狂気的なものにいけたりすると、自分がやってみたい方向に進むのかなと。で、その真逆のバラードではとにかく壮大でメロディアスなラインとキレイな歌詞……というように、本当に両極端な曲を作りたいなと思っています。

――その両方ができるって素晴らしいですよね。

そこをずっと行き来している感じです。そういうセットリストを組んでいるときもあって、その切り替えが聴いてる方もおもしろかったりするんじゃないかと思うんです。

――さて、今回の作品はもちろん、これまでの楽曲を披露するためにはライヴが不可欠です。ある程度ライヴができるような状況になっても、これまでどおりになるのは、まだまだ先とも言えます。

声を出さず、騒がず、どうやってメタルのライヴをやれば成り立つのか……まだ自分のなかでも想像ができてないんです。ライヴでのテンションをどれだけ上げながら、声を発さずに熱量を保ちながらお客さんと一緒に楽しめるか、新しいことを考えていかなきゃとは思っているんですけど、ジャンル的にも難しいですよね。

――オーディエンスとの相乗効果で盛り上がる部分も多分にありますからね。

そうなんですよね。掛け合いを重視した楽曲もたくさんありますし、全員で叫ぶという表現で成り立たせるような楽曲作りもしてきたので。それが叶わなくなるのは悲しくもありますけど、そこはみんなで手を挙げて盛り上がりたいなと思いますね。

――この春からは、もう一度ライヴをしっかりセッティングする一年にするのか、さらに曲作りをしていくのか、どういう進展を想定しますか？

もともとライヴ数の多いバンドではないんですが、状況も状況なので、私的には楽曲作りなど今できることをなるべく重視していく一年にするのがいいのかなと思っていたりはします。曲は今もハイ・スピードで作ってはいるんですけど、そこは常に止めずにやっていこうかなと。

――では、もしかしたら早い段階で、また新しい曲を聴くことができるかも知れませんね。でもまずは『グローリー～』の楽曲をステージで観たいと思います！

私たちもそれを楽しみに、そのときにベストなパフォーマンスをお届けできるように準備はしていきます。楽しみにしていてください！

THE 50 BEST ALBUMS OF 2020

CIRITH UNGOL

Making their first album in 29 years, the Californians rediscovered their passion for epic metal. And now they're never going to stop

“WE'LL PLAY UNTIL OUR DYING BREATH”

THE 50 BEST ALBUMS OF 2020 から考察する

最新 日英メタル・ミュージック・ムーブメントの同異点

英『METAL HAMMER』誌にて、その年にリリースされたアルバムを、同誌の編集者＆ライターがランキングしていく企画……を、さらに日本市場目線で考察するという本企画。2019年版（『メタルハマー・ジャパンVol.1』に掲載）でのご好評を受け、2020年版もいってみよう！　なお、本家がカウントダウン式になっているところ、当方はカウントアップ式で公開していきます。まずは全順位を眺めたのち、それぞれのテーマに合わせ日英の違いを考察した識者の分析をご覧ください。そして、自身の意見との同異点も楽しんでくださいませ！

本稿の識者

山本彦太郎
昭和49年生まれ、埼玉県出身のフリー編集／ライター。個人的な2020年の衝撃は、レイナートとマローンというふたりのショーンが相次いで亡くなってしまったこと。メタル界屈指の理知的なリズム体でした。RIP

川嶋未来
ブラック・サバスのデビュー・アルバムより1ヵ月ほど年上。10代でヴェノムに出会い、人生を狂わされる。エクスペリメンタル・メタル・バンドSIGHのヴォーカル、シンセ、フルート、尺八など担当。現在ニュー・アルバムを鋭意制作中。

脇田涼平
岐阜県出身。大学在学中はHi-STANDARDの運営に携わりながら、海外アーティストのツアー・ブッキングを行なう［RNR TOURS］を設立。2016年からは作家として2冊の音楽書を出版。現在は［RIFF CULT］、［PUNKLOID］でも活動中。

荒金良介
大分県出身。1999年からフリーの音楽ライターとして執筆。過去に英『METAL HAMMER』編集部に行く機会があり、そこで“NWOBHM”の名づけ親であるジェフ・バートンに会い大興奮した思い出がある。日英メタル・メディアの違いを見せつけられた当企画、勉強になりました。

1 デフトーンズ
オームズ

2003年発表の『デフトーンズ』以来となる、テリー・デイトをプロデューサーに迎えて制作された9作目。チノ・モレノのドリーミーに揺蕩う、もの憂げな歌声を主軸とした作風は従来どおりだが、デイト起用の影響か、ヘヴィなアンサンブルの重厚感や生々しさは格段にアップしている。特にドラム・サウンドの安定感は抜群で、浮遊するサウンドを強固に支えているかのようだ。

2 ナパーム・デス
永遠のパラドクス

グラインド・コア・シーンの重鎮の5年振りとなる通算16作目。重厚感たっぷりだったり呪術的だったりと変化球的なオープニングだった前2作と比べ、本作はのっけから勢い全開。しかも、効果的なクワイアやフックのあるギター・アレンジ、盤石のリズム体などベテランならではの熟練の技も堪能できる。さまざまなエクストリーム・メタルの源泉たる存在感を改めて示した力作だ。

3 コード・オレンジ
アンダーニース

米ペンシルヴァニア州出身のメタルコア・バンドの4作目。メタルコアの突進感にインダストリアル的無機質なエフェクトやカットアウトなども加えたサウンドで、耳に刻み込まれるような強烈な印象を残す。④の日本語やネオ・ソウル味もある⑤、キャッチー＆ダンサブルな⑧、クリーン・ヴォーカルを生かしたアルバム表題曲など予想のつかない振り幅の広さも魅力だ。

4 オランシ・パズズ
Mestarin Kynsi

フィンランドのサイケデリック・ブラック・メタル・バンドの5作目。民族音楽的なアコースティック・サウンドとサイケデリックなエフェクト、呪術的な反復リズム・パターンがなんとも不気味かつ引き込まれる音世界を作り出している。静と動の転換も練られておりクセになる音楽だ。

5 SVALBARD
When I Die, Will I Get Better?

女性ヴォーカリスト兼ギタリストのセリーナを擁する英ブリストルのポスト・ハードコア・バンド。3作目となる本作は爆走ハードコア要素を主軸としつつ、ブリストルらしいゴッタ煮感も強く、穏やかに全体を包むシンセ・サウンドや柔らかなファルセット・コーラスも印象的だ。

6位〜16位 →

比較・考察 1

『総評 ～英トップ50にはどんなバンドがランク・インしたのか!?』

分析：山本彦太郎

当「THE 50 BEST ALBUMS OF 2020」は、英『METAL HAMMER』誌の2021年1月号「2020 THE ULTIMATE REVIEW OF THE YEAR」に掲載されたもので、同誌編集スタッフやライターの投票による“2020年にリリースされたアルバムのベスト50”をまとめたものです。読者投票やセールス順によるランキングではなく、選者それぞれのこだわりや推しが強く反映されたランキングであるということを、まずは理解しておくべきでしょう。

まず結果から見てみると、トゥール、ラムシュタイン、スリップノットの新作が鎬を削った前年から比べると、どうにも地味なラインナップだという感はぬぐえません。ただこれは、トップ・バンドほど長くなりがちなリリースのサイクルや、コロナ・ウィルスによるリリースの延期／中止なども関係しており、単に“そういう年だった”と考えるしかないでしょう。それにしてもデフトーンズが1位、ナパーム・デスが2位という結果には、やはり日本と英国(欧州)の温度差や嗜好の違いを強く感じます。

ジャンル／スタイル的には＜ブラック／エクストリーム・メタル周辺:12バンド＞、＜メタルコア:7バンド＞、＜ドゥーム／ストーナー系:4バンド＞、＜プログレッシブ／アバンギャルド系:5バンド＞、＜ざっくりとハードコアまわり:5バンド＞、＜その他:17バンド＞となっており、現在のヘヴィメタル・シーンの中心軸がブラック・メタルとメタルコアに偏っていることがわかります。この辺の現状は川嶋未来氏・脇田涼平氏の項に詳しいですが、いずれにせよ、どちらかと言えば若者向けと言えそうなハイ・エナジーのスタイルが活況を呈しているというのも彼我の差を感じます。

また国別では＜UK(スコットランド含む):15バンド＞、＜US:19バンド＞、＜北欧:7バンド＞というのはともかく、スイス出身のPAYSAGE D'HIVER(23位)とトリプティコン(47位)、ニュージーランドのULCERATE(18位)とオーストラリアのメイク・ゼム・サファー(36位)などオセアニア勢、アイスランドのソルスターフィア(34位)などの存在も光ります。なかでも長らくメタル不毛地帯だったオーストラリアのシーンが活況づいているのは、アジア／オセアニア・ツアーの重要度のアップという点でも注目です。一方で一時は栄華を極めたドイツ勢が29位のジ・オーシャンのみだったり、アジア勢が皆無だったりと寂しいところもありますが、改めてメタルの世界マップの広さを示してくれました。

6位のA.A. ウィリアムズ、25位のエマ・ルース・ランドル・アンド・ザウなどシンガー・ソングライター作品や、27位のBACKXWASHといったヒップホップ・アーティスト、メタル出自ながら完全なフォーク作品となった22位のヨナタン・フルテンと50位のミルクルなど“メタルじゃないじゃん”という選出もお馴染みですが、A.A. ウィリアムズは選者37人中13が、BACKXWASHは6人(ひとりは1位に選出)が、エマ・ルース・ランドル・アンド・ザウも6人が投票しており、界隈ではそれなりの評価を得ていたことがわかります。決して奇をてらったものではないということは、昨年度ランキングで異彩を放っていたTWIN TEMPLEやHEILUNG、ザ・フーが同誌の表紙に抜擢されていることからもわかるでしょう。

全体としては、オジー・オズボーンやテスタメント、パラダイス・ロスト、セパルトゥラ、ナパーム・デスといったベテラン勢がしっかり威厳を見せつけ、トリヴィアムやラム・オブ・ゴッドなど中堅も躍進。その一方でオランシ・パズズやコード・オレンジ、LOATHEなどが次代を切り開いていく予感を感じさせる結果でした。それらメタル・シーンのニュー・ホープのライヴを体感するためにも、一刻も早い平穏の回復を祈るばかりです。

6 A.A. ウィリアムズ

フォーエヴァー・ブルー

英ロンドンの女性シンガー・ソングライター、A.A. ウィリアムズのデビュー作。ほぼすべての録音を自宅で行なったというが、チェロやピアノの音も瑞々しく淡く暗い蠱惑的サウンドを作りあげている。概ね非メタルではあるが、④⑦などのメタル的盛り上がりは非常に魅力的だ。

7 OCEANS OF SLUMBER

Oceans Of Slumber

女性ヴォーカリスト、キャミー・ギルバートを擁する米テキサスのドゥーム・メタル・バンドの4作目。グロウルも交えたプログレッシブかつドゥーミィなアンサンブルと、ソウル／R＆B的なキャミーの力強い歌声を、ミックスするのではなくあえて並列させた異色のサウンドだ。

8 トリヴィアム

ホワット・ザ・デッド・メン・セイ

米メタルコア・シーンの旗手の9作目は、勢い重視の力押しスタイルはやや控えめで、これまで以上にメロディにフォーカスした作風。より純然たるヘヴィメタルに回帰した印象だが、よく練られたアンサンブルやコーラス・ワークからは威風堂々とした大きなスケールを感じる。

9 エンスレイヴド
Utgard

ドラマーの交代を経て発表された、ノルウェーのエクストリーム・メタル・バンドの15作目。70年代プログレを昇華したオーペスにも近い作風だが、クリーン・ヴォーカルを押し出し広がりのある音風景を生み出している。

10 IMPERIAL TRIUMPHANT
Alphaville

アールデコ調のマスクを付けた、ニューヨーク出身のアバンギャルド・メタル・トリオの4作目。メシュガーのトーマス・ハーケが和太鼓で参加しており、フリーキーながらダイナミックな独自のメタルを構築している。

IMPERIAL TRIUMPHANT

11 パラダイス・ロスト
Obsidian

ゴシック・メタルの重鎮が威厳を見せつけた堂々の16作目。バイオリンを含むアコースティック・パートの挟み方や、もはや泣きに近いギターの寂寥感など、世界観を構築する要素が緻密に組み上げられた匠の技だ。

12 LOATHE
I Let It In And It Took Everything

2014年に英リヴァプールで結成されたメタルコア・バンドの2作目。細かい刻みより大きなリズムを主張する手法やロマンティックなクリーン・ヴォーカル、シューゲイザー的な空間演出など、独自のアプローチが光る。

BURY TOMORROW

13 CRYPTIC SHIFT
Visitations From Enceladus

本作がデビュー・アルバムとなる英リーズ出身のデス・メタル・バンド。1曲目から25分超と意欲的だが、SFやコズミック・ホラー的な演出、ラッシュ的な曲構成の妙などからはヴォイヴォド的な異質感も感じ取れる。

14 ポールベアラー
Forgotten Days

米アーカンソー州出身のドゥーム・メタル・バンドの4作目。どこか泥臭さや70年代っぽさを感じるアンサンブルはもちろん、オジー・オズボーンを思わせるナイーブなヴォーカル・スタイルも大きな魅力となる。

15 テスタメント
Titans Of Creation

アメリカのベテラン・スラッシャーの13作目。相変わらずエリック・ピーターソンは名リフ・メイカーで、1曲目から名作の予感がビシビシ伝わってくる。前作からの強力すぎるリズム体もその実力を遺憾なく発揮。

16 ベリー・トゥモロー
カニバル

UK総合チャートでもトップ10入りを果たし、着実な成長を見せる英メタルコア・バンドの6作目。前作よりロー・エンドの厚みが増したように感じるのは、アダム"ノリー"ゲットグッドのミキシングの影響か？

17位〜30位 →

比較・考察 2

2020年も高評価！欧州におけるエクストリーム系の活躍模様

分析：川嶋未来

本リストをざっと眺めてみると、やはりエクストリーム・メタル関連の占める割合が高いという印象を持つ。世界的に話題となったもの、海外だけで話題になったもの、海外でも話題になっていないのでは？と思うようなものまで、実にさまざま。厳密な分類が難しい部分もあるが、ジャンルごとにざっと見ていこう。

スラッシュ・メタルは、テスタメント、セパルトゥラ、トリプティコンとベテラン勢が目立つ。これらはいずれも力作であり、日本でも話題になった。一方、MIDNIGHTとHELLRIPPERのランク・インは興味深い。前者はメタル・パンクを代表する人気バンドであり、ここ日本でもカルト的人気を獲得しているので納得だが、同系統の後者は正直"そんなに話題になったっけ？"という印象。カッコいいですけどね。ちなみにどちらもワンマン・プロジェクト。

デス・メタルに関しては、ナパーム・デスが2位にランク・インしているのが驚き。日本じゃ考えられない。また、CRYPTIC SHIFT、ULCERATE、INGESTEDといった、いわゆるテクニカル・デスが3枚もランク・インしているのが目を惹く。イギリス出身のニュー・カマー、CRYPTIC SHIFTのデビュー作は、ヴォイヴォド、ノクターナスに影響を受けたというテクニカル／超プログレッシブ路線でマニアの間で話題沸騰。スウェーデンのゴシック・デス・メタル・バンド、トリビュレーションの元ギタリスト、ヨナタン・フルテンのソロ作を入れているのは渋すぎ。そもそも内容はフォークでメタルじゃないし。

ブラック・メタル関連は10枚ほどと大量のランク・イン。エンスレイヴドやULVER、アナール・ナスラックなどベテラン勢も健闘しているが、やはり今年はジェイムズ・ヘットフィールドのお気に入り、サイケデリック・ブラックのオランシ・パズズが話題をさらったと言えるだろう。アメリカのUADAあたりは、海外と日本での人気の差を感じさせるバンド。結成23年目にして初アルバムをリリースしたスイスのPAYSAGE D'HIVERが入っているのも渋い。ブラックから出発して、現在は完全にアバンギャルド路線、ニューヨークのIMPERIAL TRIUMPHANTによる4thアルバムは、ミスター・バングルのギタリスト、トレイ・スプルーアンスがプロデュースを担当しただけあり、強烈な内容。

ドゥーム／ストーナー関連もいろいろと入っているが、海外との温度差という点では、CIRITH UNGOLが一番だろう。大御所ドゥーム・バンドの29年ぶりのアルバムということで各所で話題になったが、日本ではそもそも大御所として認識されていない気が……。

LAMB OF GOD

17 ラム・オブ・ゴッド

Lamb Of God

創設メンバーだったドラマーのクリス・アドラーが脱退し、新たにアート・クルーズを迎えた5年ぶりの新作。心機一転が伝わってくる瑞々しい勢いに溢れつつ、いい意味でのキャッチーさにも磨きがかかった渾身作。

18 ULCERATE

Stare Into Death And Be Still

ニュージーランド出身のエクストリーム・メタル・バンドの6作目。非常に強靱な手足を持ったドラマーを擁するが、ゆったりと不協和的な音の流れを生み出すギターと合わさることで、不思議な開放感を演出している。

19 ULVER

Flowers Of Evil

出自はブラック・メタルなノルウェーのエレクトロニカ・バンドの12作目。ダークなa-haといった趣だが、6曲目の沈み込むロー・エンドと主張するドラム、浮遊感などはエクスペリメンタル感満載で、思わず納得。

20 マリリン・マンソン

We Are Chaos

通算11作目の本作は、アナログLPのA/B面構成を意識したというとおり、いつになく穏やかな5曲目までとダークな6曲目以降の明暗が見事。デヴィッド・ボウイ色も含め、どこかパーソナルな一面を感じられるのも新鮮だ。

21 TOUCHÈ AMORÈ
Lament

LA出身のポスト・ハードコア・バンドの通算5作目。プロデューサーはロス・ロビンソンで、ハードコアらしい突進感と、ゆったりと広がるアンサンブルの組み合わせの妙、エモーショナルな叫びがダイレクトに刺さる。

22 ヨナタン・フルテン
Chants From Another Place

元トリビュレーションのギタリスト、ヨナタン・フルテンのソロ・アルバム。ほぼ全篇アコギやピアノによる弾き語りだが、穏やかで美しいメロディと中低域が魅惑的な歌声が染み渡る。ややウェットな空気感も独特だ。

23 PAYSAGE D'HIVER
Im Wald

スイスのアンビエント・ブラック・メタル・バンド、ダークスペースのヴォーカリストによるソロ・プロジェクト。いびつなミックスながらかなり緻密に構築されたサウンドは圧巻で、SEも含めて独自のセンスを感じさせる。

24 MIDNIGHT
Rebirth By Blasphemy

数々のローカル・バンド経験を持つアメリカのマルチ・プレイヤー、アセナーによるソロ・プロジェクト4作目。モーターヘッド～ヴェノム直系の爆走ロックンロールで、DIYっぽさも含めてあの時代への愛に溢れている。

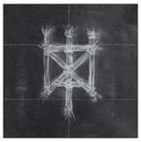
25 エマ・ルース・ランドル・アンド・ザウ
メイ・アワ・チェンバース・ビー・フル

米ケンタッキー州を拠点に活動する女性シンガー・ソングライターが、スラッジ・メタル・バンド、ザウとコラボレートした作品。激重のアンサンブルとやや醒めたエマの歌声は想像以上のマッチングを示している。

26 クヴァラータク
Splid

ノルウェー出身のハードロック・バンドの4作目。ロックンロールの軽快な疾走感と攻撃的ながらキャッチーなコーラスが魅力。②にはマストドンのヴォーカリスト、トロイ・サンダースがゲスト参加している。

27 BACKXWASH
God Has Nothing To Do With This, Leave Him Out Of It



カナダを拠点とするザンビア人女性ラッパーの2ndアルバム。ブラック・サバスの「黒い安息日」をサンプリングしたトラックもあるなど、非メタルながら奇妙にダークでドゥーミィな雰囲気を醸し出している。

28 WINTERFYLLETH
The Reckoning Dawn

2006年に英マンチェスターで結成されたブラック・メタル・バンドの7作目。野太い男声クワイアやフォーキィなアコースティック・サウンドなどの混合も見事。『The Mercian Sphere』収録曲の続篇も収めている。

29 ジ・オーシャン
Phanerozoic II: Mesozoic | Cenozoic

ドイツのプログレ・メタル・バンドの8作目で、2018年発表の『顕生代～破壊と創生 第一部：古生代』と対を成すコンセプト・アルバム。中生代～新生代という流れに沿って変化していくサウンドはとにかくドラマティック。

30 セパルトゥラ
Quadra

通算15作目となる本作は、幾何学や天文学など中世の高等教育をモチーフにしたコンセプト・アルバム。プログレッシブなアンサンブルや宗教的な荘厳さも感じさせるデリック・グリーンの歌声などさらなる魅力を開拓した。

MIDNIGHT

EMMA RUTH RUNDLE & THOU

31位～37位 →

英米ではメタル・シーンの主軸のひとつ=メタルコアはさらに拡大！

分析：脇田涼平

年々、こうした広域のメタル・チャートを占めるメタルコア・バンドの割合が増えてきているように感じる。ブラック・メタルやデス・メタルに比べればまだまだ歴史は浅いものの、そのサウンドは日々進化し続けており、何度もトレンドが移ろいながらもジャンルとしての規模は拡大。コード・オレンジがチャートの3位にランク・インしている事実が、その勢いを証明していると言えるだろう。彼らはこれまでハードコア・シーンを中心に存在感を見せつけてきたが、『アンダーニース』ではインダストリアルなアレンジでまったく新しいヘヴィ・サウンドを鳴らし他を圧倒。フォロワーすら簡単に生み出さない圧倒的なオリジナリティが、2020年代のメタルに与える影響は計り知れないものがあるだろう。

同じく、新しさで言えばシューゲイズとメタルコア／デスコアをクロスオーバーさせたイギリスのLOATHEも、1年を通じて2020年の音楽シーンを賑わせてくれた。チャート1位にランク・インしたデフトーンズの後継者とも言われており、ポスト・コロナ時代のメタル・フェスで大観衆を前に活躍する姿が容易に目に浮かぶ。

モダンなメタルコアを実直に鳴らし続けてきたベテラン勢の活躍も見逃せないだろう。2020年に結成15周年を迎えたBLEED FROM WITHINは、メタルコアとメロディック・デス・メタルを絶妙な案配でミックス。双方のシーンから支持されており、後続のFIT FOR A KINGらを牽引している。さらに、今年結成20周年を迎えたベリー・トゥモローの『カニバル』も伸びやかなクリーン・ヴォーカルをチャーム・ポイントにした良作で、優れたサウンド・プロダクションを用いてメタルコアの可能性を引き出した。オーストラリア出身のメイク・ゼム・サファーも36位にランク・インするなど、メタルコア・バンドとしてはかなり上位に食い込んでいるのも印象的。この手のサウンドにおいてオーストラリアは近年高い注目を集めており、メルボルンに拠点を構えるレーベル[UNFD]の存在も大きい。

マシュー率いるトリヴィアムも、結成から20年以上トップを走り続けながら、毎度挑戦的な楽曲制作を続けている。彼らのサウンドをメタルコアにカテゴライズするのは窮屈な話であるが、『ホワット～』がメタルコアを始めとする新時代のメインストリーム・メタルがスタジアム級のファンベースを獲得できるポテンシャルを持っているということを示してくれたのは間違いない。ブリング・ミー・ザ・ホライズンもメタルコアを通過してメインストリームへ上り詰めたわけだし、これまでになかったクロスオーバーから化学反応が起こる可能性は今後大アリだ。まだ大波にはなっていないが、R&Bを取り入れたサウンドを鳴らすサイアミーズや、ニューメタルのリバイバルによって注目を集めているALPHA WOLFなど、同シーンには高いポテンシャルと独創性を持ったバンドがひしめいている。

OZZY OSBOURNE

31 アナール・ナスラック

Endarkenment

英バーミンガムで結成されたエクストリーム・メタル・バンドの11作目。シンフォニックなクワイアと、オペラティックな感もあるヴィトリオールの歌声は相変わらず劇的で、音の激流にひと筋の光を投げかける。

32 オジー・オズボーン

オーディナリー・マン

ダフ・マッケイガン(b)とチャド・スミス(d)をリズム体に迎えた通算12作目。いずれも練りあげられた楽曲ぞろいでオジーのパフォーマンスも文句なしだが、全体的にシリアス感が強く一抹の寂しさを覚える作品だ。

33 アーマード・セイント

パンチング・ザ・スカイ

2008年に再々始動したアメリカのベテラン・メタル・バンドの通算8作目。ややブルージィな趣も強くなったが、小細工なしのヘヴィメタルは健在でジョン・ブッシュの伸びやかかつ力強い歌声は微塵も衰えていない。

本邦でも発火寸前!?　注目のブレイクスルー・アーティスト

分析:荒金良介

ヘヴィメタルという大きな傘の下に、シンガー・ソングライターのA.A. ウィリアムズからヒップホップのBACKXWASHまで許容する幅の広さ。改めて海外メディアの懐の深さを感じずにはいられない。前者は2019年4月にステージ・デビューした新人で、暗闇のなかから透徹した声色を響かせるミステリアスな雰囲気に惹きつけられる。デフトーンズやナイン・インチ・ネイルズを含むカバー作も予定しているので要注目。後者はカナダのラッパーだが、ブラック・サバスをサンプリングに引用し、エクスペリメンタルなミクスチャー・サウンドを提示したユニークな逸材と言えるだろう。

エマ・ルース・ランドル・アンド・ザウは歌姫エマ・ルース・ランドルとスラッジ・メタル・バンドであるザウとの異色コラボレーション作。地を這う重厚なサウンドのなか、妖艶な歌声が絡み合うケミストリーに背筋がゾクゾクさせられる。また、ストライク・エニウェアが籍を置く[Pure Noise Records]からリリースしている女性フロントマン擁するメロディック・ハードコアのSHARPTOOTH も期待のニュー・カマー。あのヴェノム・ポイズンに通じる男顔負けのデス声は迫力満点である。ブリング・ミー・ザ・ホライズンの新EPにも参加したノヴァ・ツインズもそうだが、近年ますます女性が目覚ましい活躍ぶりでシーンを賑わせている事実も見逃せない。

2017年に惜しくも解散した伝説のカオティック・ハードコア・バンド、デリンジャー・エスケイプ・プランのグレッグ・プシアートのソロ・デビュー作もオススメしたい。ヘヴィでノイジーでオルタナな質感を浮かべながら、美しいメロディを存分にアピール。型にハマらない独自性を発揮した魅惑作だ。

そして、メタリカのオープニングを務めた経歴を持つクヴァーラタク。前任ヴォーカルの脱退には本当にショックを受けたものの、新フロントマンを迎えた第一弾作も期待を裏切らない出来栄えだった。ミルクルの新作は、ブラック・メタルを出発点にした彼女がフォーク・ミュージックに舵を切った意欲作。メタルとは程遠いサウンドではあるけれど、聴かず嫌いはもったいない珠玉のメロディに貫かれたアルバムだ。以上、ここ日本でもっと注目されてもいいアーティストたちをリスト内からピックアップしてみた。参考になれば幸いである。

▲ UK誌では表紙も飾るミルクル。

34 ソルスターフィア
Endless Twilight Of Codependent Love

アイスランドのポスト・メタル・バンドの7作目。アンサンブルにしろサウンドにしろ非常に70年代的なアナクロ感が拭えないが、それだけに生々しさは抜群。時折顔を見せるブラック・メタル風味もいいアクセントだ。

35 カタトニア
City Burials

スウェーデンのベテラン・バンドの通算11作目。リリカルなプログレ・メタルは相変わらずで、ややヘヴィネス不足な感もあるが、音色選択も含めた熟練のアンサンブルでジワジワと引き込んでいくあたりは流石のひと言。

36 メイク・ゼム・サファー
How To Survive A Funeral

クリーン・ヴォーカル兼の女性キーボーディストを擁するオーストラリアの5人組メタルコア・バンドの4作目。キーボードもピコピコ系ではなくピアノやクワイアなどがメインで静と動の演出に大きく貢献している。

37 UADA
Djinn

米オレゴン州出身のメロディック・ブラック・メタル・バンドの3作目。全面に押し出されたツイン・リード・ギターのメロディやドラマティックなヴォーカルなどは、ブラック・メタルとしてはかなり聴きやすい作品。

SÓLSTAFIR

38位～50位 →

比較・考察 5

今やリリースの根幹を担う インディ系レーベルの個性と勢い

分析：山本彦太郎

これも総評と同じく"そういう年だった"で済んでしまう話かもしれませんが、ランキングの50アーティストの資料をまとめている際に気づいたのが、レコード・レーベルの偏りです。なかでも、いわゆるメジャー・レーベルからのリリース作品は1位のデフトーンズ（ワーナー）と32位のオジー・オズボーン（ソニー・ミュージック系列のエピック・レコード）のみで、ワーナー傘下のロードランナー・レコード（トリヴィアムとコード・オレンジ）を含めても圧倒的少数となっています。

一方で存在感を見せつけたのは、メタル系インディーズ・レーベルの老舗である米メタル・ブレイド・レコーズと独ニュークリア・ブラストで、前者はアーマード・セイントやアナール・ナスラックを始め7バンドが選出されていますが、ジ・オーシャンやINTRONAUTなどモダン・プログレ・メタルにも目を向けているのがポイント。後者はセパルトゥラやナパーム・デスなど8バンドの選出ですが、オランシ・パズズやポールベアラーなどサイケ・ブラック／ドゥームの実力者たちのピックアップが光ります。また、HELLRIPPERとKATATONIAの英ピースヴィル・レコード、2015年に復活しベリー・トゥモローを送り出した英ミュージック・フォー・ネイションズなどの名前も懐かしい安心感を覚えるのでは。

さらに、超絶仮面バンドのIMPERIAL TRIUMPHANTや、トム・G・フィッシャーの悲願達成とも言えるトリプティコンのライヴ作、ドゥームの新星OCEANS OF SLUMBERなどを輩出した独センチュリー・メディア・レコードなども、シンフォニック／ブラックだけではない幅広いフットワークを見せてくれました。また、創業は2013年という新興レーベル、米シャープトーン・レコードも"新時代の音楽の始まり"と謳うだけあり、メタルコア／ポスト・ハードコア・バンドを重点的に推し、本ランキングでも12位にLOATHEを送り込んでいます。

もうひとつ見えてくるのは、インディペンデントならではの多様性や縛りのなさです。"ヘヴィメタルはアンダーグラウンドであるべきか否か"といった議論を広げるつもりはありませんが、大きな成功を収めたスタイルを模倣し、2匹目のドジョウを粗製濫造した80〜90年代のメジャー・シーンとは異なり、現在はシーンの絶対的な成功スタイルなどはないと言っていいでしょう。オランシ・パズズやIMPERIAL TRIUMPHANTといったバンドを発掘できたのも、インディペンデントならではの地力ではないかと思います。

CIRITH UNGOL

38 ATRAMENTUS
Stygian

2012年に結成したカナダのドゥーム・メタル・バンドのデビュー作。16分超の①、インタールード的な②、23分超の③からなる三章構成でひたすらドゥーミィながら、ピアノやギターなどの彩りが美しい。

39 SHARPTOOTH
Transitional Forms

女性ヴォーカリスト、ローレン・カーシャーンを擁するアメリカのハードコア・バンドの2ndアルバム。ヘヴィなアンサンブルはもちろん、グロウルとクリーン・ヴォイスを巧みに行き来する彼女の歌声も迫力満点。

40 BLEED FROM WITHIN
Fracture

スコットランド出身のメタルコア・バンドの5作目。前作より試行されていたクリーン・ヴォーカルの導入がより明確になり、メロディがより重層的かつ開放的に進化。ただアンサンブルは変わらずアグレッシブだ。

41 CIRITH UNGOL
Forever Black

1971年にカリフォルニアで結成されたベテラン・メタル・バンドの29年振りとなる新作アルバム。ファンタジーを題材とした作風はレインボーやディオを思い起こす部分もあり。徹頭徹尾一本調子なヴォーカルも潔い。

42 INTRONAUT
Fluid Existential Inversions

米LA出身のプログレ・メタル・バンドの6作目。ポリリズミックなキメも多いテクニカルなアンサンブルだが、ヴォーカルの声質や楽曲の奇妙な浮遊感などもあって、ヴォイヴォドの流れに近い感触も感じる。

43 クリップルド・ブラック・フェニックス
Ellengaest

ゴール（Gaahls Wyrd）やアナセマのメンバーなども客演した英ポスト・ロック・バンドの8作目。ゴールはスポークン・ワード的な役割だが、ピンク・フロイド的なアンサンブルとのマッチングは意外と魅力的。

44 INGESTED
Where Only Gods May Tread

英マンチェスターで結成されたブルータル・デス・メタル・バンドの5作目。アンサンブル展開の軸をドラムが担うなどはクリプトプシーとも近しいスタイルながら、グロウルのかけ合いなどは本バンドの大きな武器だ。

45 グレッグ・プシアート
Child Soldier: Creator Of God

元デリンジャー・エスケイプ・プランのヴォーカリスト、グレッグ・プシアートのソロ作。フォーク、エレクトロニカ、メタルコアが曲ごとに入り交じる多彩な内容で、よりスウィートな歌声も大きな魅力と言える。

46 オール・ゼム・ウィッチズ
ナッシング・アズ・ジ・アイディアル

米テネシー州出身のストーナー・ロック・バンドの6作目。気怠いヴォーカルとブルース・ロックに根ざしたアンサンブルは70年代的ながら、どこか新しい不思議な感触。アコギの音色すら泥臭く、酩酊感に溢れている。

47 トリプティコン
Requiem(Live At Roadburn 2019)

トム・G・フィッシャー（ウォリアー）がセルティック・フロスト時代から温めていた連作「Requiem」を、オーケストラとともに披露したライヴ作。最終章の静謐さもさることながら、30分を超える第二章の荘厳さは圧巻。

48 LIK
Misanthropic Breed

カタトニアのメンバーなどからなるスウェーデンのデス・メタル・バンドの3rdフル・アルバム。メロデスとは一線を画す攻撃性一本槍な姿勢が刺激的だが、つい出てしまうメイデン的ツイン・リードなども聴きどころ。

49 HELLRIPPER
The Affair Of The Poisons

ジェイムズ・マクベインによる、ひとりスラッシュ・メタル・プロジェクトの2ndフル・アルバム。8曲で約30分と一気に駆け抜けるが、“オールド・スクールの新風”らしいリフや曲展開の巧みさが光り聴き応えは充分。

50 ミルクル
Folkesange

デンマーク出身の女性マルチ・プレイヤー、アマリー・ブルーンによるブラック・メタル・ユニットの3作目。タイトルどおり北欧フォークを基調としたアコースティックな作風だが透明感に混じる陰鬱さがクセになる。

英誌チャートにランク・インならずも、良作はまだまだある！

分析：荒金良介

当リストを見て、前作『アモ』で全英1位を獲得したブリング・ミー・ザ・ホライズンの『ポスト・ヒューマン：サバイバル・ホラー』が入っていないことに驚いていたら、EP部門（※英版コラム枠にて）のほうにちゃんとセレクトされていた。個人的には2020年に出たベスト作のひとつであり、ラウド衝動に回帰した作風に度肝を抜かれた。また、同じEP部門にイーサーン、ZEAL&ARDORが選ばれていることに納得しつつ、残念ながらフィーバー333の『ローング・ジェネレーション』は漏れていた。こちらはハードコアに振り切った苛烈な怒りに満ちており、メタル／ヘヴィ音楽好きには聴いてほしい1枚だ。ここまではEP部門の話。

本篇のアルバム部門だが、意外だったのはザ・ストラッツの『ストレンジ・デイズ』が選出されていなかったこと。今なおクイーンが国民的バンドとして認知されるイギリスにおいて、彼らの影響下にあるザ・ストラッツがはずされているのは理解に苦しむ。また、HIGHER POWERのロードランナー移籍第一弾作『27 MILES UNDERWATER』もスルー。彼らはTURNSTILEに続くクロスオーバー・スタイルのヘヴィネス＆キャッチーさを放つイギリス発の気鋭バンドだ。

ほかにサザン・ロックを現代に継承するブラック・ストーン・チェリーの『THE HUMAN CONDITION』に加え（ただし発売日の関係もある）、コリィ・テイラー、ストーン・テンプル・パイロッツ、ザ・ユーズド、ザ・ゴースト・インサイド、HAVOK、チャート的には振るわなかったボン・ジョヴィなど、ランク・インしていてもおかしくないバンドたちが選ばれておらず、前作に続き新作も最高だったテスタメントは堂々ランク・イン。これはエクストリーム系が強いイギリスのメディアらしい判断だろうか。ただ、S.O.D.譲りのクロスオーバー・スラッシュを炸裂させたマイク・パットン率いるミスター・バングルの『THE RAGING WRATH OF THE EASTER BUNNY DEMO』が抜けていたのはどうしたことか。

イギリス、アメリカ以外だと、ディジー・ミズ・リジー、ヒーロー、アマランス、ナイトウィッシュ、ヘイルストームも力作を作りあげていたし、選ばれてしかるべきヘヴン・シャル・バーンの2枚組の大作『オブ・トゥルース・アンド・サクリファイス』も抜け落ちていたので、これを機にぜひチェックしてほしい。

THE 50 BEST ALBUMS OF 2020

Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』343

LIFE LESSONS

JAMEY JASTA

ヘイトブリード ジェイミー・ジャスタ

**シーンの顔役として、常にメタル／コア系音楽の普及に努めている
ジェイミーが、業界の荒波を乗り越えるための術を伝える。**

ヘイトブリードのリーダーになる1994年よりも前から、ジェイミー・ジャスタはヘヴィ・ミュージックの世界で生きてきた。彼のバンドはハードコアをメインストリームに押し上げた功績があり、それはのちに後続となるキルスウィッチ・エンゲイジといったメタルコア・バンドたちが一般化させ、さらに突き詰めていくこととなる。もしそこまでが彼の功績ならば、それを石膏で固めてレジェンドと称して崇められていればいいだろう。しかし、さらに彼は復活した『ヘッドバンガーズ・ボール』のホストとなり、独自のポッドキャストも配信、なおかつ自身のレーベルも運営してシーンにおける最も影響力のある存在として知られるようになった。彼がここまでに学んできたことをひも解いていくことにしよう。

音楽を発掘することは、人生のなかで最もマジカルな瞬間だ。

俺が幼い頃から、両親はレコード・プレイヤーから音楽を流し続けていた。彼らにとって音楽は人生の大きな部分ではなかったが、80年代に育った人間なら誰にとっても特別な時間だったはずだ。MTVが始まったばかりの頃で、多くのラジオ局もスタートしていた。カレッジ・ラジオの局もあったし、何がクールだったかっていうと、パンク、スカ、ハードコア、デス・メタル、スラッシュ……と、本当にバラエティ豊かな音楽が常に流れていたから。

80年代後半、俺はまだ幼くてライヴを観に行けたわけじゃなかったけど、9～13歳くらいにかけて、パンクやメタルへの愛を深めていった。この年頃っていうのは人生のなかでとても大切な時期だよな。ガンズ・アンド・ローゼズ、クロ・マグス、メタリカ、RUN DMCと、さまざまな音楽を知ったよ。LL・クール・Jの「I Can't Live Without My Radio」のカセット・テープを手に入れ、まさにそのとおりだと思ったもの。彼らの音楽が存在していなかったら、俺は今何をしていたんだろう？　俺はあの時代のレコードを、本当にたくさん持っているんだよ。

"I HAVE NO REGRETS ABOUT THE CHVRCHES INCIDENT"

――チャーチズの件に関して、俺は後悔なんてまったくしていない。

若いヤツらがヘヴィ・ミュージックにのめり込む光景を見るのは、いつもハッピーなことだよ。

長年やってきた俺は、歳を食った連中から“ヘヴィ・ミュージックはかくあるべき”とか“そうしてはいけない”といった言葉をたくさん聞かされてきた。

例えばMyspaceが流行っていた頃、デスコアっていわれるヤツが始まったときのことを覚えているか？　昔のデス・メタルの連中は口をそろえて“一体何が起きているんだ？”、“どうしてコイツらはそんな格好をしているんだ？”、“なぜ髪が短いんだ？”とかと言っていた。でも俺はずっと“いいか、コイツらは俺らと同じなんだ。彼らは俺らと同じようにヘヴィな音楽を聴いてきた。アイツらがDJなんかの音楽を聴いてきたと思うか？”と言い続けてきたよ。

新しい人たちを受け入れることは素晴らしいことだし、彼らを歓迎してやりたいんだ。俺たちの音楽や俺のプロジェクトに関しては、常にそうし続けたいと願っているね”。

いろいろなバンドを一緒にプレイさせることが、ジャンルの垣根を取り払う。

俺がプロモーターになってローカルなハードコアのライヴを計画した際、ジャンルの垣根なんて取り払って、スラッシュやメタルのバンドを招いてプレイさせてきた。ライヴがうまくいった夜には喧嘩なんて一切起こらなくて、駐車場では野郎どもが談笑しながらビールを呑み交わしていたさ。

ナイキのタンクトップを着ているヤツもいれば、ユース・オブ・トゥデイのシャツを着たヤツもいて、そのかたわらにはアンスラックスのTシャツにロング・ヘアなんてヤツもいたよ。そしてそいつらがみんな仲良くしていたんだ。ああいった光景を目にできたのはクールなことだったな。

メタルの地位を高めるため、常に努力してきた。

チャーチズについてツイートしてきたことを、俺は一度も撤回してこなかった。むしろその直後から、こっち関連のマーチャンダイズが信じられないくらい売れ始めた

ことに気づいたよ。だから思うに、俺の考え方に賛同したヤツらもいるってことだろ!?　あの出来事に関して、後悔なんて何もしていない。彼らのファンが俺と戦おうとしてくれていたことも知っているし、それは完全に理解できることでもある。そもそも俺は、大好きなバンドのひとつであるゴジラの代わりに戦っているつもりだっただけってこと。ゴジラはチャーチズに限らず、多くのバンドをステージから吹っ飛ばしてやったことだろうよ。

俺が言いたかったのは、ハルク・ホーガンとアルティメット・ウォリアーの関係みたいなことがもっと必要だってこと（※80年代、プロレス界最大のスターであるハルク・ホーガンを、アルティメット・ウォリアーが《レッスルマニアⅥ》で倒した）。わかるだろう？　俺は偉大なバンドたちが次の世代に主役の座を譲る姿を見てみたいんだ。それこそホーガンがウォリアーにその座を譲ったみたいにね。

俺やゴジラを好きか嫌いかは別として、俺らのバンドやラム・オブ・ゴッド、ファイヴ・フィンガー・デス・パンチといったバンドが、デフトーンズ、KOЯN、ジューダス・プリーストの出演枠を狙っているんだ。俺らはラジオでかかるわけではないけど、それならどこでそんなチャンスを得ればいいんだ？　フェスティバルに出演したり、ツアーを続けることなんだよ。何かひとつのバンドを蹴散らしたかったわけじゃないが、俺がキャリアを通じてずっとやってきたのはヘヴィ・ミュージックの地位を高めることなんだよ。

メジャー・レーベルはハードコアをどう扱えばいいかわかっていないだけ……だから何だってんだ！？

ハードコアが、レーベルや音楽産業から邪魔者扱いされる姿を見てきたよ。グラムやグランジ、スカのブームを俺は覚えている。メジャー・レーベルによって“次のマイティ・マイティ・ボストーンズ”として売り出したいからということで、大したことのないスカ・バンドがスゲぇバックアップされたのを見たこともある。ただ、そういったことがハードコアというジャンルで起きたことは一度だってないよな。

俺らはメジャー・シーンのなかの孤立した小さな島みたいな状態だったけど、

"THESE A&R GUYS… THEY ARE NOT SMART"

──このA&Rのヤツらは……まったくもって賢くないね。

ニュー・ウェイブ・オブ・アメリカン・ヘヴィメタルのシーンが生まれて多くのバンドが俺らの名前を口にするようになってから状況が変わってきた。

でも、以前の孤高の存在というポジションも、実は自分たちにとってはいいことだとも思っていてね。というのも、写真撮影やテレビへの露出っていうのはあまり快適じゃなかったし、ハードコアってのは本来もっとアンダーグラウンドなジャンルだからさ。誰かに束縛されたり、成功が義務づけられたりなんてこととは無関係で、自分たちの考えに従って自由にやれていたからさ。

レーベルではなく、ファンが好きなメタル・バンドを選んでいった。

メジャー・レーベルとの契約を得ることは、運をつかむための準備をすることだった。

たくさんのレーベル、レコード会社のスマートな人たちと仕事をしながら渡り歩いていると、いつの間にか自分たちの地位も上がってきて、そしてあるとき気づくことがある。"俺はこのまま彼らに流されていく必要があるのか？　自分が商品である限り、結局のところ彼らは俺らが作り出すフィジカルなものを求めているだけじゃないか！"ってね。そして彼らが間違っていたと気づくんだ。

俺はレーベルもレコード屋も経営したことがあって、流行っては廃れていくトレンドをたくさん見てきた。パパ・ローチがまだ契約を勝ち取っていない頃、毎日キッズがやってきては彼らのアルバムを求めていたよ。でも当時はまだナップスターが始まったばかりの頃で、カセット・テープを交換していた時代だった。口コミが頼りだった頃ってわけだね。でもA&Rの人間がレコード屋にいるわけなんてなく、ライヴの現場にさえ来ないんだから、そんなこと気づきようもないってことだよ！

俺らがアイオワでライヴをしたとき、30人ぐらいいる最前線のピットのなかにスリップノットのクラウンとポールがいて、ふたりが歌詞を全部歌っていたのを今でも覚えている。その頃から自分たちが何か特別なものを持っているってことに気づいていたんだけど、A&Rの連中たちを確信させるためには、彼らの鈍感さを剥ぎ取って、新たな感性を植え付けなければならなかった。彼らはまったくもって賢い人間じゃなかったから。

もしお前がバンドをやっているなら、常にビジネス的感覚を持っておけ。

もしマネージャーが参加するレコード会社のミーティングに、目をキョロキョロさせたり指をこねくり回したりするヘンなヤツがいたら、ソイツが責任者だ。もしお前が適切なマネージャーを雇っていなかったり、然るべき人に自分らのことを伝えられていなかったり、さらにはビジネスそのものを理解していなかったら、ときとして損をすることになるだろう。

キッズに人気のバンドをいくつも目にしてきたけど、マネージャーにすべてを任せきりで、バンドがやりたいことや目指していることをレーベルに伝えきれず消えてしまったケースも山のようにあった。自分たちが一所懸命作ってきたものを、なぜそんなヤツに託すんだよ。そこでは判断と戦略というものがあり、芸術を作る気持ちと同じくらい、バンドは仕事であるという意識も持っていなければならないんだ。

本物のレコード・コレクションに勝るものなんてないね。

"ビニール盤のレコードを買うなんてナンセンスなことだ。だって同じ値段で3ヵ月分のストリーミング・サービスが楽しめるし、900万曲も聴き放題なんだから！"……という話を聞くと、俺は必ず"でもお前は聴きたくもない8,999,990曲も欲しいのか？"って言い返している。

だからこういうのって、モノの見方なんだと思うな。俺の音楽コレクションは自慢のひとつで、これからもずっと手元に存在し続けるね。ストリーミング・サービスなんて1回でも支払いを忘れたら、データはすべて手元からなくなってしまうんだぜ。またコレクションを取り戻すためには、ポケットに手を突っ込んで、携帯電話を探すところから始めなくちゃならないだろ？

『ヘッドバンガーズ・ボール』を復活させたことは、俺にとってアメイジングな時間だった。

『ヘッドバンガーズ・ボール』の司会をやったことは、アメイジングな経験だった。すべてのことに学びや気づきがあったから。

撮影そのものはもちろん、編集作業だったりテレビ番組を制作するということ自体が新しい学びだった。世界各国に赴いて何人もの驚異的な人たちに出会い、再びメタルを人々にもたらせたんだ。

くり返しになるが、これはすべて俺がメタルの地位を高めたいという情熱に基づいている。この仕事に関われたことを、本当に誇りに思っているよ。

俺はスコット・イアンを目指すことにした。

俺は常にスコット・イアンにインスパイアされてきた。ジョン・ブッシュ時代のアンスラックスのどこがいいんだ？というヤツがいるかもしれないけど、それでも彼らはクラブを満員にしていたし、スコットはテレビにも出演していたじゃないか。それに雑誌の取材も受けたりと、常に活動を続けていた。彼には野望があり、事業家として積極的に携わり続け、そして本物の人格者だったぜ。俺はそんな彼から大きな影響を受けたんだ。

ただ、妬む気持ちしか持たないような"もうアンスラックスはビッグ4じゃないんだから、スコットはVH1の番組の司会でもやっていればいい"なんていうヤツらを目にすることもある。彼らのことを"大した成功もつかめなかった人たち"だなんて思う人もいる。そんなヤツらには、かける言葉すら失せてしまうよ。スコットの姿を見てきて、これは短距離走じゃなくマラソンだったんだ……ということに気づかされたからさ。

トミー・モーリー

音楽専門誌にて、通訳／ライターとして活動。先日ある雑誌の撮影に、私が所有するヴィンテージ・ギター1本を提供したところ、某女優さんと表紙を飾ることに。音楽と向き合う真摯な姿に、私も身が引き締まりました。本号とともに本屋に並んでいるかも？

STARS' WORDS

トミー・モーリー　シュザイの復習

EPISODE-4

Arigato to you too. I miss Japan!

──こちらこそアリガトウ。私は日本が恋しいわ！

By Amy Lee

当コラムでは、本誌通訳の私トミー・モーリーが、アーティストとの取材時に交わした会話のなかから、こぼれ話とともに、英会話としても使える言い回しをピックアップしていきます。今回取り上げるのは、充実したキャリアを積み上げ、作品ごとにスケールアップし続けるエヴァネッセンスのフロント・ウーマン、エイミー・リーの《Stars' Words》です。

過去のインタビューや映像から伝わるとおりのパワフルな方で、言葉がガンガン湧き出てくるさまはまさしく表現者という印象を受けました。私にとっては“はじめまして”のインタビューでしたが、緊張する暇などないままに終わってしまいました。アルバムに収まりきらなかった（であろう）想いをぜひ、インタビュー記事を読みながら確認いただければ幸いです。

さて、私はインタビュー冒頭で必ず相手に時間を割いてくれたことへの感謝を伝えておりますが、今回ピックアップした言葉も、その際にエイミーから間髪入れずに返ってきた言葉［miss］です。

この［miss］、実はさまざまな意味のある動詞ですが、今回は<〜を偲ぶ／〜が恋しい>という意味で取り上げたいと思います。ほとんどは口語的なシチュエーションで交わされる言い回しのため教科書で見かけることは少なく、逆に友人との会話、出会いや別れがテーマの映画などでよく耳にする言葉でしょう。

同じ単語でも動詞では別の意味で［miss：逃す／逸する］と使われることもありますし（例：I've missed the train! ／電車を逃した！）、名詞としては“ミス日本”といったコンテストなどでご存知のとおり［Miss：女性］を意味します。発音のうえでも同じがゆえに、意識していないとチンプンカンプンになってしまうので要注意！

感情に関する単語なだけに「Miss you」というタイトルで、ナット・キング・コールやエッタ・ジェイムズ、ローリング・ストーンズと、時代を超えて多くのアーティストが同名曲を発表しています。日本人は愛情表現を大っぴらにしないのでちょっと疎遠な言葉でもありますが、愛を歌う音楽の世界では頻出用語なのだと考えさせられました。

応用篇としては、この<〜が恋しい>は人に対してのみではなく、いろいろなモノ・コトに対しても使えます。海外旅行中の［I miss miso-soup! ／味噌汁が恋しい！］、外出自粛で［I'm missing party! ／呑み会が恋しくてたまらない！］など、ここぞとばかりに使ってみてください。

エイミーはコッテリ系の美味しいラーメンを欲して［miss Ramen!］な状態なようでもあるので、来日の際はぜひ私のラーメン・データを駆使して、お取り寄せセットを手土産に対面取材を実施したいと思います。

ではまた次の号でお目にかかりましょう！

[miss]　<動詞>

【意味】恋しい／ない（いない）のを寂しく思う

例文

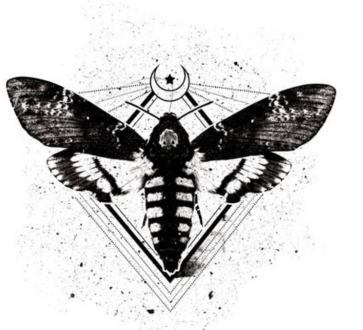
Don't you miss that girl gone?

（別れちまったあの娘が恋しくないのか？）

So nice to see you again. I missed you so much!

（また会えて嬉しいわ。あなたにとても会いたかったの！）

METAL HAMMER JAPAN ORIGINAL HOODIES
オリジナル・パーカー発売中!
フロント・ロゴは［ノーステイル・イエロー］と
［クラック・グレイ］の２タイプ。
バックは各ロゴに合わせデザインされた［SIX SIX SIX］／
［JUST LIKE A BEAST］のビッグ・プリントで野獣感をアピール。
軽い着心地のボディなので、春・秋はもちろん、冬場の重ね着にもGOOD！
model ＞ no-mer-cy、KMKZ
［ノーステイル・イエロー］
×
［SIX SIX SIX］
METAL HAMMER JAPAN
SIX SIX SIX
［クラック・グレイ］
×
［JUST LIKE A BEAST］
METAL HAMMER
JUST LIKE A BEAST
［クラック・グレイ］
×
［SIX SIX SIX］
［ノーステイル・イエロー］
×
［JUST LIKE A BEAST］
METAL HAMMER JAPAN
METAL HAMMER JAPAN
SIX SIX SIX
JUST LIKE A BEAST
■SIZE S／M／L／XL／XXL ■PRICE ¥6,300＋税（全カラー／送料込み）
※ロゴの大きさはボディ・サイズによって若干異なります。
詳しくは
オンデマンドTシャツ・サイト［TOD］をチェック！
https://t-od.jp/index.html



LET'S TALK METAL!

谷原章介

例えば演出家の方から
“今回はデス調でやってよ”、“今度はサバスっぽく”
と言われたら、やろうとはします。
ただ僕自身、何を大事に思うかといったら
“オーソドックスなものがきちんとできる”ということ。
アレンジを効かせるためにも、
地力という部分がしっかりついていないといけない。

大のメタル好きを自負するファンでも、服装や髪型で日常からそれを表に出している人は少ないのではないだろうか？　この春、情報番組のMCに抜擢された俳優の谷原章介も、優しくさわやかな笑顔、スタイリッシュにキメたジャケット姿のその内面でメロイック・サインを掲げる、そんな熱いメタル・ファンのひとりだ。

俳優としてさまざまな役を演じることは、人を楽しませ、自分も楽しむことだと語る谷原。自身のスタイルを崩さず、それでいてメタルも深く楽しむそのスタンスは、社会人リスナーが理想とするひとつの形とも言えるだろう。

取材・撮影：オカミ・タカヒデ

Profile

1972年生まれ、神奈川県出身。1995年に映画『花より男子』道明寺司役で俳優デビュー。以後ドラマ、映画、舞台、CMなど多数出演。近年は『アタック25』、『うたコン』、『きょうの料理』の司会やナレーションなど幅広く活躍。2019年には主演ドラマ『笑点ドラマスペシャル 五代目 三遊亭圓楽〜孤高の星の王子様〜』が日本民間放送連盟優秀賞を受賞 。2020年NHK大河ドラマ『麒麟がくる』では三淵藤英役にて出演。2021年3月29日よりフジテレビ新番組『めざまし8』メイン・キャスターに就任する。

単純に、僕らの時代って
メタルが一番人気のある音楽だった。

―― 今もって続くコロナ禍はさまざまな世界に大きな打撃を与えましたが、舞台や音楽などのエンターテインメント業界は特に影響を受けた業種のひとつと言えそうですよね。

そうですね。僕はコロナの自粛期間が明けたあとにドラマの撮影などがあって、去年の11月からは舞台の稽古に入ったんですけど、もろもろあって12月の初日が二週間くらい遅れたんです。そのときはやはりもう一回初日を迎えるテンションに持っていくのがすごく大変でした。でも、いざ幕が開けてみたら……普通の舞台だと、最終日にスタンディング・オベーションがあったりするんですけど、そのときは初日からオーディエンスの皆さんがスタンディング・オベーションをしてくださって。"あぁ、これだけ待ってくださっていたんだな" という気持ちと、僕ら自身もお客さんに喜びやエネルギーをすごくいただいたなと思って。

―― 与える側であり、与えてもらってもいたと。

僕らは何か人の役に立つものを作ったりすることができるわけじゃないですけど、心の栄養という意味では、エンターテインメントはとても意味のあることだなと改めて確認させてもらえた時間ですね。

―― まさにそのとおりですよね。そして、谷原さんの心の栄養になっている音楽のひとつが、実はヘヴィメタルであり、特にスラッシュ・メタルであると！　そもそも、大きくメタルに触れるきっかけとは？

単純に僕らの時代って、本当にメタリカを中心として、NWOBHM からスラッシュ・メタルが若者の間で一番人気のある音楽だったってことですよね。LA メタルがあって、ガンズが出てきてエアロが復活してみたいなときに、もうちょっとコアな先輩たちはメタリカやアンスラックス、メガデスとかを聴いていて、そこに惹かれていったのがきっかけです。

―― 中高生が、リアルタイムで普通にメタルを聴いていた時代という。

で、そのなかからスラッシュ・メタルにいく人、ミクスチャー、ハード・コア／パンク、ジャーマン・メタル……と、それぞれ好きな方向は分かれていきましたけど、だいたい最初はハードロック／ヘヴィメタルへ入っていったと思います。もっと極端に分けると、ちょうど僕らの頃って「いかすバンド天国」で J ポップを聴いている人もいましたけど、だいたいはハードロック、メタル。

―― そのようにいろいろカテゴライズされるサブ・ジャンルのなかで、谷原さんが特にスラッシュ系にハマっていったのは？

僕はヒップホップも聴きますし、いわゆるループ・ミュージックもすごく好きなんです。で、結局スラッシュ・メタルもリフをずっとループさせている気がして、あのベーシックのリフの重厚感に重きを置いていたところが好きだったのかもしれないですね。

―― 最初に衝撃を受けたバンドというと？

やっぱりメタリカを初めて聴いたときは衝撃を受けましたね。高校入学が 1987 年だと思うので、その前年に『メタル・マスター』が出たんですけど、カッコよかったですね。それで在学中に『メタル・ジャスティス』(1988 年)。

―― おぉ、いい時代に高校時代の幕が開けましたか。

ただ、実は一番好きなのがエクソダスで。『ファビュラス・ディザスター』(1989 年)はすごいハマりました。レンタル店で借りてテープに録ってずーっと聴いていましたね。

―― 10 代にとっては、より " 身近なお兄ちゃんがやっているバンド " というイメージもありますよね。

ファッションも、やっぱりメタリカはもうちょっとストイックでしたよね。ベイリア・クランチ勢の、横ノリっていうわけじゃないですけど、ナイキのスニーカーにピタピタのブラック・デニムを履いていながらも、ちょっとストリート・カルチャーっぽいところもあって。

―― 当時は谷原さんもそういったファッションを？

いや、僕はまったくなかったです。ライヴに行くときは、メタル T シャツを着てましたけど。初めて行ったスラッシュのライヴがニュークリア・アソルトで、クラブチッタ川崎だったんですけど、僕、ギターのピックを取ったんですよ！　その次がエクソダスの MZA 有明（※ディファ有明の前身）。あのときは確か《インパクト・イズ・イミネント・ツアー》だったかな（※ 1990 年）。すごく楽しかったですね。

―― おぉ、初来日ですね！　やはり西海岸勢がお好きだった？

ベイエリア勢……テスタメント、フォビドゥンもすごく好きでしたね。まぁスレイヤーは別格で、マーティ・フリードマンがいる頃のメガデスもすっごい好きでした。そういう王道はほとんど聴いてはいます。ちょうど在学中からレッチリの人気が出てきて、ミクスチャー系も広がってきた頃であったりとか、ヒップホップとのクロスオーバーが始まったりした頃でもあったので。いろいろなジャンルの音楽を聴くきっかけにもなりましたね。

―― では、スイサイダル・テンデンシーズなどもハマったのでは？

聴きましたけど、初期のスイサイダルってちょっと軽くて、スケート・コアだとか言われていたじゃないですか。"まあ悪くはないけどなー" なんて思ってライナーノーツを読んだら、「アクセル・ローズのバンダナは俺のやつをパクった」って書いてあって "メッチャおもれーな" と。そういう印象が強いですね（笑）。

僕はどちらかというと
自分が役のほうに近づこうとする人。

―― その後、ハードな音楽はデスやブラックへと派生していきますが、そちらにはいかなかった？

"境界線上にいるバンド" っていっぱいいるじゃないですか。なので、あんまりカテゴライズするのは好きではないんですけど、単純にグロウルでグワーッていうのはあまり好きではなくて。あの冒頭で鐘が鳴り、エレベーターが動き、アコギのマイナー調の旋律のあとに "ヴォォォ" と始まるあの様式美が、嫌いではないですけどあんまハマらなかったですね。せいぜいデス、オビチュアリー……ジェイムス・マーフィーが渡り鳥として歩いているバンドはいくつか聴いたりはしています。でも、セパルトゥラはすっげー聴きましたよ。『アライズ』(1991 年) あたりはデスなのかスラッシュなのか的なものがありますよね。

―― 初期から『アライズ』あたりは、まさに境界線上という。

やっぱり日本って情報がどこか偏っていて、ヨーロッパかアメリカじゃないですか。そこに南米から出てきた貴重さにプラスし

エンターテインメントは、心の栄養としてとても意味のあること。

て、あのカッコよさ。カナダからのヴォイヴォドも、あれはあれで良かったんですけど、やっぱ線がちょっと細かったり難しい感じがありますよね。そこにいくと、単純にカッコいい、重い、速いと言えたのがセパルトゥラ。

―― ですね（笑）。逆に“ドッシリ系”で言うと？

最近だとドゥーム系とか聴いたりします。アンクル・アシッド＆ザ・デッドビーツとかスリープとかオレンジ・ゴブリンとか、諸説ありますがああいうヘヴィでスローな、メタリカがブラック・アルバムで指し示したひとつの方向性をよりサバス的な方向に持っていったと言いますか、シンプルに重くしたものも好きです。

―― なるほど。今挙げていただいたバンドのように、いろいろな個性や時代のブームが融合して新しいスタイルができあがっていくのも、メタルのおもしろいところですよね。ちなみに俳優さんの演技にも、潮流や流行のようなものはあるんですか？

あると思います。やっぱり劇団の交流なんかもそうじゃないですか。ある劇団がワァーっと一世風靡して、また次の劇団が現われる。ひとつのムーブメントみたいなものもあったりして、最近でいうとドラマでの顔芸みたいな。ナチュラルな芝居じゃないですけど、それはそれでひとつの楽しみ方みたいな。

―― そのなかで、谷原さんはどういった演技のスタイルを追求していこうと考えますか？　スラッシュひと筋でいくのか、求められればデスでもブラックでもできるようにしておくのか。

演出家の方が求めることをやらなければいけないと思うので、例えば“今回はデス調でやってよ”、“NWOBHMで”、“それじゃ今度はサバスっぽく”と言われたらやろうとはします。ただ僕自身何を大事に思うかといったら、オーソドックスなものをきちんとできるっていうこと。アレンジを効かせるためにも“地力という部分”がしっかりついていないといけないと思う。そこを大事にしています。

―― バンドにとっても、最も大切な部分だと思います。

どうやるかじゃなくて、台本のなかにどういうことが書かれているのか、どういう可能性があるんだろうか、相手とどう芝居をするか、どう本を読み解くのか……ということのほうが大事かなと。

―― 例えば、血の気の多いテーマを扱うスラッシュやデス・メタルでも、当の本人はすごく陽気だったりすることも少なくありません。自分に近い役のほうがやりやすい／真逆のほうがノリやすいなどはあるものですか？

それも、いろいろなアプローチの仕方があると思うんです。役を自分に引き寄せる人もいるし、自分が役のほうに近づこうとする人もいる。僕はどちらかというと後者のほうなので、自分なりに近づいてはいきます。

―― 『麒麟が来る』では三淵藤英という、戦国時代の武将を演じられました。実在する人物と架空のキャラクターでは、どちらのほうが難しいものでしょう？

細かいテクニカルな部分はもちろんありますけど、役を演じるという意味ではそんなに大きくは変わらないと思います。ただ現代劇ですと、ざっくばらんに動きながら話しができるんですけど、時代劇のように封建社会で上下関係が決まっていると、お殿様の前で動きながら話すというのはありえないんです。でもまったく動かないで“やあ拙者なんとか……、殿なんたら……”と堅く難しい昔の言葉を喋るのは本当に難しい。動くとどこかグルーヴ感が出て、喋る言葉も出てくる。これは前川清さんぐらい難しいです。あの人の「そして、神戸」なんて、あの姿勢のままずーっとリズムもとらないで歌い続ける。あの人はめっちゃハードコアです（笑）。

―― ハハハ、なるほど！　ノシノシ歩きながら弾くから「ウォーク」のグルーヴが出るってダレルも言っていましたからね。

でも、前川さんは動かないでも「ウォーク」のグルーヴが出せるんですよ。すごいんですよ、前川さん流石です。

興味の持てないことに
興味を持つ必要はないと思うんです。

―― TV出演などで、自分の趣味を反映させた衣装を着ているタレントさんがいますが、谷原さんはそういったファッションで音楽好きをアピールすることはありませんよね。

んー、別にメタルを聴いているからって、

若き谷原に衝撃を与えた四大アルバム！

1

2

3

4

1『ファビュラス・ディザスター』(1989年) ／エクソダス
僕のスラッシュのすべてが始まったといっても過言ではないです。ゲイリー・ホルトが作る乾いていてなおかつ重いリフ。このアルバムのなかにエクソダスのおもしろさ、魅力が詰まっていると思う。「ザ・ラスト・アクト・オブ・ディファイアンス」から「ザ・トキシック・ワルツ」まで、ノンストップでどれを聴いてもいいですね。

2『メタル・マスター』(1986年) ／メタリカ
僕が高校生になって『メタル・ジャスティス』で、その後『メタリカ』でドカンと喰らいましたけど、やっぱり『メタル・マスター』ですね。彼らがトップで突っ走ってくれたからこそ、ここまでシーンが大きくなったのは間違いない。

3『俗悪』(1992年) ／パンテラ
当時はダイアモンド・ダレル……カッコよかったですよね、あのリフね。ちょっとハードロックっぽいというか、気持ちよくヌケている開放感があるというか。フィルのヴォーカルもクロスオーバーを感じるというか、重いけどグロウルではなくキチンと歌っている。

4『ビニース・ザ・リメインズ』(1989年) ／セパルトゥラ
高校生のとき、近所にアイルランド人が住んでいて、その彼が教えてくれたのがセパルトゥラだったんです。欧米出身じゃないバンドって、だいたい洗練されていなかったり、小手先のテクニックに逃げていたり、リフの構成が良くなかったりする印象があったんですけど、セパルトゥラからはすごい衝撃を受けましたね。リフを聴いた瞬間にシビれました。

メタルにどっぷりハマった格好はしていないんです。大人になったからじゃなくて、僕は高校の頃からそうなんです。ファッションというものと、自分が好きな音楽っていうものをバラバラに捉えているんですかね。その点では“もう自分のライフ・スタイルはこれしかないんだ”っていう感じではないです。逆に普通に家でもメタルTシャツを着ますし、近所に買い物に行くときも着たりしますよ。

―― 昨年からは“おうち時間”も増えましたが、家でメタルを聴いたりは？

たまに聴いたりして、子供にうるさいと言われたり（笑）。やっぱり全然触れたこともないですし、今メディアでかかるとしてもBABYMETALくらいですもんね。

―― では“お父さんが教えてあげよう”ということも？

あんまりしないですね。僕自身も親に薦められて聴いたわけじゃないので。聞かれれば教えますけど、そういう方向に興味が出るのかどうか……そのためにもたまには“うるせえな”と思われながらもかけたりはしていますけど（笑）。

―― スレイヤーは少し前に解散してしまいましたが、その世代のバンドは今もってすごく元気ですよね。やはり先輩世代の人の頑張りからは、谷原さんも力をもらうのでは？

そうですね。続けているバンドって多いし、ずっとやっていたからこそ再評価されたり。僕ら役者って一瞬を形にするためにずっと我慢をして抑えて、できたと思ったらまたじっと抑えるもので、ミュージシャンみたいに解放し続けられるわけではなく、同じエンタメの世界でやっていますが全然違うんですね。でも人を楽しませる、自分が楽しいことをしたいという意味では一緒なので、若い頃憧れて聴いていたバンドが頑張っているのを見るとすごく元気になります。

―― 若い頃のイケイケなサウンドは当然カッコいいですが、今の姿も味が出ていていいんですよね。これは役者さんも同じなのではと感じます。

ですね。やっぱりキャリアを重ねていくに従い、アプローチの仕方も変わってくると思います。本を読み込むのが大事だなとか、同じことを何回も何回もやって発見できることが大事だなと思う。ギターとかヴォーカルにしても、ずっとやり続けることで出てくる味というものがあるのかな、と。まあリズム体はどうしても限界はあって、ポール・ボスタフとかデイヴ・ロンバードとかはよくやったと。

―― やはり自分の信念をしっかりと持って、基本を大切にしつつやり続けるということが大切なんですね。これは俳優やミュージシャンだけではなく、どの仕事にも当てはまることでもありますね。

やはり温故知新……常に古い物から学び、新しいことも胸を開いてどんどん取り入れ続けることが大事なんだろうなとは思いますね。でも頭で考えてやることではないとも思っていて。興味の持てないことに興味を持つ必要はないと思うんです。昔よりも感度が鈍っているかもしれないけど、ぱぁーっと見て入ってきた情報のなかからも“あ、いいな”と思える物が見つかるかもしれない。だから知ろうとして開いていることが大事なのであって、常に全部を追いかける必要はないと思うんです。知ろうと思っただけで充分です。

―― 胸を開いていれば、自然と好きな音楽が見つけられるということですね！　さて、まだまだコロナの影が落ちる世間ですが、ライヴが再開され会場で谷原さんを見かけた際には、僕らメタル・ファンも声をかけても大丈夫ですか……？

全然大丈夫です。僕、よく声をかけられるんですよ。以前、ブルータル・トゥルースとナパーム・デスのライヴに行ったんですけど（※2014年公演）、その1～2年後くらいにつるの剛士君から“谷原さん、来てたでしょ”って言われて。彼も来ていたらしく“じゃぁ、そのとき声をかけてよ”みたいな（笑）。

JUST…, MOVING ON

Interview & Photo by
Takahide "THUNDER" Okami

BAND-MAIDのキャリア史上、最大級のワンマン・ショウとなる日本武道館公演。2月11日に行なわれるはずだったこのお給仕は、コロナ・ウィルス感染に配慮し、無念にも中止となった。しかし、彼女たちは前進をやめない。
そこまでのルートにはステイ・ホームでのバンド活動があり、そこから生み出された新作『Unseen World』があり、日本武道館の先に見据えた世界がある。小鳩ミク、SAIKIの両フロント・ウーマンが同公演を支点に、それまでの心境とこの先の展望を語る。

BAND-MAID

小鳩ミク&SAIKI

昨年2月、バンドにとって最大級のワンマンお給仕として発表された日本武道館公演。今や海外ツアーも常連であるBAND-MAIDではあるが、本邦の音楽ステージの最高峰のひとつでもある武道館であるから、その意味たるや大きく、彼女たちにとっても重要なひと足となるはずだった。しかし、"夏を越え終息するか"という世間の希望的見通しとはウラハラに、当コロナ禍は年末に向けても一向に出口は見えず、そして1月13日に彼女たちの日本武道館公演は中止の発表がなされた。

ファンはもちろんのこと、メンバーが最も悔しい思いをしたことは間違いない。ただし彼女たちは悲嘆に暮れているばかりではない。この"延期"ではなく"中止"であるということに、その意志が如実に表われているのだ。

SAIKI 日本武道館でのお給仕(公演)もできなくなってしまうかも……ということも抱えていました。2021年の2月まで社会状況が変わらず、また会えない1年が始まったらイヤだな、とは思ってたんです。でもあきらめたくないし、絶対やりたいっていう気持ちで常に準備はしていました。

小鳩 希望としては持っていたんですけど、みんな"断定はできないね"っていう不安もありましたっぽね。ただ、ちゃんとした決定……"自分たちはやらないという方向で動いたほうがいいんじゃないか"っていうのは、発表する1週間くらい前から話し合いをして、メンバーそれぞれの考えも踏まえたうえで、発表3日前くらいに中止の結論を出した感じでしたっぽ。

SAIKI 延期よりも中止って言ったほうが、ご主人様・お嬢様の気持ちも切り替えがつくかなって。このあともう一回でも、何回でも(日本武道館でのお給仕を)できるだろうとも思っているので。

小鳩 やっぱり私たちの最終目標は"世界征服"になるので、日本武道館が最後の地ではないんですっぽ。今後ステージアップをしていくなかで、また日本武道館でのお給仕ができるようになっていくという自信を込めて。

誰にとっても平坦ではなかった2020年。バンド活動にも大きな障壁をもたらした新型コロナ・ウィルスの猛威だが、その渦中には、限られた環境をもプラスに変えていった彼女たちの姿があった。

小鳩 夏には日本でのお給仕も決まっていましたし、海外でのお給仕ももちろんやる予定で動いていたので、それができなくなるっていう悔しさと悲しさはすごくありましたっぽ。でもステイ・ホームの間も、常にメンバーと連絡は取っていたっぽね。コロナの状況になるまで、365日中の300日くらいメンバーと顔を合わせていた日常だったので、急に会えなくなると不安感も増してしまうっていうのは、自分たちのなかでわかっていたので。常にミーティングとか、用がなくてもLINEを動かしていると

◎メジャー 4th アルバム

『Unseen World』ポニーキャニオン
●通常盤（CD）／PCCA-04993
●初回生産限盤（CD＋DVD）／PCCA-04992
●完全生産限定盤（2CD＋Blu-ray＋フォトブック）
PCCA-04991

か、ずっとテレビ電話をつないだまま、己の生活をそれぞれするっていうことをやっていたんですっぽ。自粛期間だからこそお互いの状況を言い合ったりとかはすごくやってましたっぽ。

SAIKI　ほかのメンバーが家でどう過ごしているかを知ることも増えましたよね。あ、ご飯この時間なんだとか(笑)。おうちにいるだけだとダラけちゃったりもあったので、“よし！　寝るよ！”とか“頑張って起きよう”とか、“ご飯はちゃんと食べないとダメだよ”とかをみんなで言い合いながら。

小鳩　スタジオに入っているはずの時間にはちゃんと起きて、その時間をミーティングにしましょうとか。生活のリズムをみんなで崩さないようにやってましたっぽ。

この団結力が彼女たちの強みであり、バンドとしての魅力につながっていると言えるだろう。

多くのミュージシャンはこのステイ・ホームの期間を楽曲制作に当てており、彼女たちも同様にこの時間を有効活用していたが、直接会わないという方法での楽曲作りに支障はなかったのだろうか？

小鳩　もともとジャムをして曲を作るということがあまりなくて、基本的にはギター

今後ステージアップをしていくなかで、また日本武道館でのお給仕ができるようになるという自信を込めて。――小鳩ミク

のKANAMIが作曲した基盤をメンバーでアレンジして詰めていくんですけど、それをちょっと前からデータでやるようにしていたんですっぽ。コロナになる前から始めていたので、今回の作業ではそれが成長したというか。メンバーそれぞれが家で録れる環境の質を上げて、データでのやりとりをいっぱいできるようにしたっぽ。いつもより曲に向き合う時間、制作する時間も増えたので、曲の完成度をデモの段階から上げていくっていう作業がすごくできましたっぽ。

SAIKI　これまではツアー中に楽曲を制作していることが多かったんですけど、ツアー中は毎日スタジオには入っていられないじゃないですか。それで家で作業をしてメンバー間でデータのやりとりをするようになってから効率が上がったので、私たちにはこれが合ってるねっていう話がもともとあって。コロナ禍になる前からこのスタイルでやっていて良かったねという話は何回もしましたね。

小鳩　やろうとしていたことが加速できたっていう感じですっぽ。それぞれ"こうしたほうがいい"、"ああしたほうがいい"というやりとりはしているほうなので、そこは気兼ねなくやれていました。

ネットを介しつつも変わらない距離感で生み出されたのが、1月にリリースとなった4枚目のフル・スタジオ作『Unseen World』だ。過去作に比べてよりシリアスかつタイトな作品になったという印象がある本アルバムだが、このサウンド指向にもコロナの影響はあったのだろうか。

SAIKI　そこには少なからず影響は受けていますね。

小鳩　KANAMIは、やっぱり外に行けない鬱憤や、今だからこそ吐き出せる気持ちを書いてくれましたっぽ。

SAIKI　ただ、先を見据えた希望も込めた作品作りだったので、そこにはとらわれすぎないようにしていかないとという意識もあって。お給仕ができていないという不安はあったので、レコーディングでライヴ感を失わないようにというのは意識しました。

また、2019年は海外公演を軒並みソー

日本だけの活動だったら、ここまでハードなロックはやっていなかったかもしれない。――SAIKI

ルドアウトさせるなど、世界的な活動がいよいよ本格化している彼女たちだけに、海外リスナーを意識した曲作りということも、少なからずあったようだ。

小鳩　やっぱり日本のご主人様・お嬢様が好きそうな曲、海外のご主人様・お嬢様が好きそうな曲っていうのはちょっとずつ違ったりするんですっぽ。なので"両方取り入れていきたいね"とか"これは海外で盛り上がりそうだね"とか、そういう曲作りは意識してやってますっぽ。

SAIKI　メロ進行とかに出ているかなって思います。例えば「Manners」は、海外のご主人様・お嬢様が好きそうなメロかなって。

小鳩　ミドル・テンポの重い感じから始まって、展開が少しキラキラしていて。でもメロはキャッチーで、洋楽感も感じられるようにしてもらったので。「Giovanni」もストーリー性のある展開がすごく多いので、海外のご主人様・お嬢様好みかなと。

SAIKI　展開が複雑なのは、海外意識が大きいですね。逆に「Youth」とか「CHEMICAL REACTION」は日本のご主人様・お嬢様が好きなんじゃないかなと思いながら制作した部分はあります。特別に細かい相談はないんですけど、時間もあったのでKANAMIにこういう曲が欲しいって要望することもできて。それを反映させてくれたっていうのも大きいと思います。

小鳩　大まかなところはKANAMIにお願いしてはいるんですけど、そこからのプラスαをほかのメンバーで話し合ったり。

これらの曲を携え、2021年以降もワールド・ワイドな活動を視野に入れる彼女たちだが、そのきっかけを作ってくれたのが、2016年にアメリカはシアトルでのイベントにゲスト出演したお給仕だった。そのときの衝撃が、その後の自信にもつながっていく。

小鳩　日本でのワンマンだと、その頃は200人キャパとかだったんですけど、呼ばれて行ったその会場で待っててくださった方はキャパ5000人のパンパンで。会場に入りきらないよ、みたいな感じで言われて。実際にそれまで感じたことのない歓声だったりとか圧とかがすごかったっぽ。海外でもこんなに私たちの音楽を聴いてくださっているんだっていうのは、すごく自信につながりましたっぽ。もっと海外でのお給仕をやっていきたいな、世界を視野に入れてやっていけるんだなって思いましたっぽ。

SAIKI　初めての海外ワンマンお給仕はメキシコだったんですけど、待ってたよ！っていう熱量と、やっと来てくれたんだね！っていう声をすごくかけられて。いつから知っていたんだろう？って思うことも（笑）。ソールドアウトすることもできて、すごく自信にもつながりました。

小鳩　海外ツアーをやるたびに成長してるなっていうこともたくさんあるので、やればやるほど自分たちの背中を押してくれる存在だなって思いますっぽ。

初の海外公演から好リアクションを受けたBAND-MAID。その足がかりになったのが、2015年に公開された「Thrill」のミュージック・ビデオ。偶然彼女たちを見つけた音楽番組（webラジオ）をきっかけに、2週間で約300万回視聴され、世界中の音楽ファンのなかでの知名度を一気に上げていった。小鳩は"最初は騙されたのかなとか、みんな同時に詐欺にあったんじゃないかとか、心配だったんですけど（笑）"と語るように、本人たちにとってもまさに青天の霹靂。その要因を、本人たちはこう分析する。

SAIKI　いまだに言われるのは、女の子がハードロック・バンドで楽器を演奏しているっていうのが海外ではだいぶ珍しいみたいで、それもすごく好いてくれています。

小鳩　楽器を演奏していてもシンガー・ソングライター系だったりオルタナ系にいっちゃう人が多いのに、BAND-MAIDはすごくカッコイイ方向に進んでいるから、珍しいとはよく言われますっぽね。そのギャップが海外のご主人様・お嬢様には気に入っていただけているんだなっていうのはすごく思いますっぽ。カワイイのにカッコイイとはどういうことだ！みたいな（笑）。

SAIKI　音を聴いてカッコイイって思ってくれていて。日本ではこれが普通なのか？とも言われたり。

小鳩　普通ではないんだけどね（笑）。

「Thrill」以降、より各人の個性が反映されたメイド衣装に変えたことも、キャラクターをよりはっきり認識してもらうための工夫だった。もちろん、音楽面でのバージョン・アップも欠かしてはいない。

SAIKI　楽曲に関しても、洋楽ロックをみんなで聴いて取り入れたり。日本での活動だけだったら、ここまでハードなロックはやっていなかったかもしれないですね。

この海外でのブレイクがなかったら、BAND-MAIDは解散していたかもしれないと小鳩は言う。

小鳩　「Thrill」は、自分たちの方向性が決まった曲でもあったんですっぽ。海外でのそういう反応があってから、1年後2年後を見据えて活動をしていくようになったので。それまでは未来を想定してっていうのはなかったので、果たしてここまで続いていたのかは謎だった……解散していたかもしれないっぽね。海外でのリアクションがあったから続けられてるのは大きいと思いますっぽ。

SAIKI　背中を押してくれたのはありがたいと思いますね。海外の方は表現が自由でストレートに言葉を伝えてくれる方が多くて、"君たちがやりたいこの世界があって、僕も好きだから応援します"って。

小鳩　好きなようにやったらいいよ！みたいな。もちろん日本のご主人様・お嬢様もそうですけど。

海外公演は、当然ながら"想定外"もつきものだ。

SAIKI　日本のライヴハウスでしかやったことがなかったので、初めてのツアーでは"ここがライヴハウスなの？"みたいな場所があったり、機材が全部壊れてるのか、みたいなところがあったりとか。

小鳩　"音が出れば問題ないっぽ！"、"寄せてこ寄せてこ！"って感じでしたっぽ。機材的な問題で、セットリストを急に替えたりもあったっぽね。

SAIKI　それを経験したから、自分たちがこんなにタフになったんだなっていうのもあります。どんな場所でも危機管理能力が上がりましたから。

ちなみに、海外でのそういったピンチで頼りになるメンバーとして、ふたりはそろってKANAMIを挙げてくれた。

SAIKI　普段はフワフワ、ヨワヨワしているけど、やったるぞ精神が意外と強い。窮地に立たされると別人になって、次の曲いけない！となったときには"よっしゃギター・ソロしてくるわ！"とか（笑）。

小鳩　普段絶対そんなことしないっぽ!?っていうのに。アンプに突っ込んでったのも海外っぽね？

SAIKI　テンションが足りない！とか言って、アンプに頭から突っ込んじゃって。

小鳩　でも弾いてはいるんですっぽ。弾いていてテンションが上がりすぎちゃって

守りに入るのではなく、新しいことも恐れずにやってきたい。── 小鳩ミク

突っ込んでいくみたいな。でもご主人様・お嬢様はパフォーマンスだと思っているので爆上がりする。日本じゃ絶対に見られないですね。

SAIKI　移動中に心強いのは小鳩です。サーチ能力が高くて、行きたい場所があると“オッケー、わかった！”って誘導してくれたり（笑）。あとは値引きしてもらったこともありますね。

小鳩　もともとひとりで旅行したり、調べたりとか好きなので、海外だからっていう恐怖感があんまりないんですっぽ。行くたびに対応力がすごく上がっていきましたっぽ。

SAIKI　事件もいっぱいあったもんね。ロスト・バゲージしちゃったりとか。どこでも寝られるバンドみたいな。

小鳩　どこでも生きていこうとするバンドっぽ（笑）。

有人のイベントができない時期には、配信でのお給仕も行なった。どのバンドも手探りで進めていた配信という形での無観客ライヴ、当然彼女たちにとっても初の試みで、不安を持ちつつのスタートだった。

小鳩　緊張感は違うものっぽね。１回目はどう表現することが正しいのかがすごく難しくて。

SAIKI　伝わっているのか不安だったんですけど、意外と伝わるもので。間違っていなかったなっていうのはありますね。

小鳩　1ヵ月後の２回目では、１回目を踏まえてやれたんですけど、３回目はちょっと間が空いたのと、初めてフル尺のステージだったんです。それで、それまでの60分のテンションのまま飛ばしすぎちゃったんですけど、全部吐き出すぐらいやりきれたのは逆に良かったのかなって思いましたっぽ。カメラをご主人様・お嬢様の目だと思ってやるとか、３回目だから余裕が出たところはありましたっぽ。

３回の経験で手応えを見出したBAND-MAIDにとって、配信でのお給仕は今後も活動形態のひとつとなりそうだ。

伝わっているか不安だったけど、間違っていなかった。———— SAIKI

SAIKI　多分コロナ以前のような状況に、完全に戻れるわけじゃないとは思うんです。自分たちが新しい方法を見つけたとポジティブに考えているので、そこは会場が無観客のお給仕でも配信していきたいなと思います。

小鳩　配信だからこそできること、映像と一体化するっていうのは今後も取り入れたり。それに海外のご主人様・お嬢様は普段のツアーは観られないんですけど、オンラインお給仕だと世界のどこにいても観られるので、嬉しいって声をたくさんもらえましたっぽ。

もちろん近い将来、必ずや大会場でのパフォーマンスを観せてくれるはずであり、彼女たちはそのための準備にも気持ちを向けている。

SAIKI　イメージ・トレーニングをよくするバンドなので、そこは引き続きやって。次に何をするのかハッキリとは決められていないんですけど、希望としては年内にツアーをしたいですし、漠然とではありますけど、それを希望に今年はやっていこうかなと思います。

小鳩　一刻一刻先が見えない状況は変わらないとは思うんですけど、守りに入るのではなくて、BAND-MAIDとして新しいことも恐れずいろいろとやっていきたいなと思いますっぽ。それがアルバムの『Unseen World』の"まだ見ぬ世界へ"という意味合いにもつながってくるような気がするので。

SAIKI　海外ツアーへも行きたいですけよね。2020年からここまでは我慢の年だったので、ネガティブな気持ちをポジティブな気持ちに変えて、まだまだ困っている全世界の人に勇気や元気を与えられるような存在になりたいなとは思います。

小鳩　楽曲の制作スピードはコロナ禍で上がったので、そういうことは今後にも影響は出てくるとは思いますっぽ。BAND-MAIDの制作作業に終わりはなくて、常に曲作りもやっているので、ライヴと制作の両方を進めていきたいと思っていますっぽ。

From Hell with Love

取材：岡見高秀
35周年アーティスト写真
撮影：堀内亮（CABRAW）
デザイン：土屋英俊（SOIL DESIGN WORKS）
黒ミサ写真：山田晋也

聖飢魔II to GUITARS!

ロック・ミュージックの魅力は多々あれど、最もカッコイイ！と言える要素と言えば、やはりエレキ・ギターのハードなサウンドだろう。これがヘヴィメタルとなれば、なおさらのこと！　ただ最近の音楽シーンでは、このギターの存在感がやや薄め……。いやいや、時代やブームが変わっても、ロック・ギターの魅力は不変である！ということを、メタル界きっての名ギター・コンビであるルーク篁参謀とジェイル大橋代官にとくと語っていただこう！　地獄よりギター愛をこめて。

自分の気持ちが動くメロディ、リズム、
ハーモニーを追求しているっていうのが
一番 あてはまる。

ルーク篁参謀

そもそもエレキ・ギターの音が好きで やってみたくてしょうがなかった。（ジェイル）

——今回は“ハードロック、ヘヴィメタルはギターがカッコイイ音楽だ！”というテーマで話を聞きたいと思います。やはり、世を忍ぶ仮の少年時代は、“ギターを弾くならハードな音楽だろう”という感覚でしたか？

ルーク　最初にギターを持ったキッカケが姉の拷問で、要は姉貴がパートナーとして弟の俺にギターを押しつけたっていうことなんだよね。その段階ではバンドを組もうなんて思ってはないんだけど、自分がそういう音楽が好きになって、自分でも奏でられるようになるんだ……みたいなことを考え始めたという意味でいうと、ロックをやりたいからバンドを組んだということになるね。

ジェイル　俺はそもそもエレキ・ギターの音が大好きで、やってみたくてしょうがなかったっていうのが始まりだから。だからバンドっていうのは、好きな音楽をやっていくうえで当たり前の通過点だったという。ほかの発想なかったから。

——当時の10代にとって“カッコいいギター＝ハードロック系”というのは共通認識でもある？

ジェイル　俺の世仮の小学生から中学生という時代で言ったら、洋楽のロックを聴いているやつなんて一学年で数人だった。なので一般の認識も何もないよね、“エレキは不良”の時代だったし。

ルーク　もうエレキ・ギターを持っていること自体が良くないと言われている世の中ではあったよね。でも俺の周りにはそれを言う大人がいなくて、学園祭があれば体育館でバンドができるみたいな学校だったんで、そういう意味ではラッキーなほうに入るんじゃないかな。

ジェイル　それはできたんだよ。なんだろな、まあその頃から大人ってのは矛盾していたってことです（笑）。

——具体的には、ロックなギターのどんなところに魅力を感じていたんでしょう？

ルーク　記憶を遡るに思うのが、多分『ヤング・ミュージック・ショー』（※NHKの音楽番組）で流れているディープ・パープルを観て、初めてロックの衝撃を受けたって気がするんだよね。それのどこに衝撃を受けたかと言うと、ギターを弾いているリッチー・ブラックモアが、曲のエンディングでギターをドラム台にこすりつけるとかグルッと回るとか、そういう姿にカッコよさを感じちゃったんだよね。なので、そういうパフォーマンスができる音楽がやりたかったし、そういうパフォーマンスができそうなバンドを組みたかった。

——棒立ちで弾いているのとは、見た目のインパクトは大きく違いますよね。

ルーク　まさにそうだよね。そういうところには突っ立って弾くという発想は全然なかったね。

ジェイル　俺は音なんだよね。あの当時はもちろんビデオなんかなくて、バンドが演奏してる映像なんてなかなか観られなかったんで。だから音だった。とにかくサウンドに惹きつけられたっていうか、“あのギンギンの音ばっかりの音楽ねえかなー”って思っていたら、それがロックだったっていうね。

——それこそ、小さい頃からロックな音が好きだったという。

ジェイル　ガチャガチャした音楽が大好きだった。それこそビートルズが1966年に日本に来て、それに影響を受けて日本にもブームが到来して、それが俺が1〜3歳の頃で、そこでギターというものを観ていたかどうかはわからないけど、ホウキを持って踊っていたらしいんだよ。

——同じギターでも、アコースティックなどの印象はどうだったんでしょう？

ジェイル　エレキよりもアコースティックのほうが風当たりは弱かったんで、クラスメイトも持ってたり。俺もまずはアコースティックから始めて、先にギターをかじっている連中からコードとかを教わったり。

——エレキをやるステップとして？

ジェイル　うん、もちろんエレキもやりたいんだけど、家のなかが特にものすごい風当たりだったから、まずはなんでもいいからギターに触れられればいいや、みたいな。

——ルークさんもアコースティックから入っていますが、“アコースティックはちょっと地味だな”みたいな印象も持っていたり？

ルーク　いや、全然ないよ。姉貴が押しつけてきたのがアコギで、姉貴が言った曲がフォークだったし、自分がおもしろいなと思ったのがNSPで。だからアコギがどうこうとか、フォークがどうこうっていう感覚は全然なくて、今でもどっちも好きだし。

ディストーションつまみを フルにして弾いていたっていう。（ルーク）

——ある程度知識がついてくると、どんなエレキ・ギターや機材を選ぶかにも傾向が出てきますよね。

ジェイル　俺はエース・フレイリーやジョー・ペリーとかが大好きだったから、もう断然レス・ポールだったね。練習スタジオに行けばマーシャルやヤマハのアンプが置いてあったけど、使い方もよくわかんなかったしね。エフェクターもとりあえず“オーバードライブやディストーションはああいう音がするらしい”ってあたりから理解していって。最初のうちは情報も選択肢もすごく乏しいし資金力もないから、決死の覚悟でひとつを買うっていう。

ルーク　俺はリッチーにガツンとやられたから、やっぱりストラト・タイプだったね。ただ実は、一番最初のエレキはリッケンバッカー・タイプで。うちの近くにモズライトを作っている工場があって、そこにあったリッケンバッカー・タイプがすごくカッコよく見えて、それを買ってしばらくは弾いていた。それであるとき学園祭に出ることになって買い換えたのが、グレコの［SE-600］っていうストラト・タイプ。

——やはり、リッケン・タイプだとちょっとパープルはではないな的な（笑）。

ルーク　そうなんだよね、これでリッチーだと形があまりにも違う。でも音的なものは一切わかっていなかったから“形がなー”と思い、それでストラト・タイプに買い換えたの。アンプもとりあえずヤマハの［J-45］を買ってきて、ディストーションつまみをフルにして弾いていたっていう。

——それでも、あまり歪まないんですけどね。

ルーク　そう、ノイズが増えるくらいの感じで、“これはなんか違うな”っと思っているうちに、先輩がいわゆるエフェクターを教えてくれて。で、その先輩が譲ってくれたディストーションがグヤトーンの［ZOOM BOX］でそれでもちょっと歪み方が違うなということで、パワー・ブースターをディストーションの前につないだり工夫をしていたよね。

——そうやって試行錯誤をしていったアマチュア時代ですが、当時の近い世代でのギター・ヒーローというと？

ルーク　プロになろうと思ったのは世仮の中学生だったんで、あの頃はキッスとかエ

アロスミスとか、クイーンとかが雑誌のグラビアを飾っていたよね。でも好きなギタリストは世仮の高2くらいまではずっとリッチーだったかな。だからパープルとレインボー一辺倒みたいな。

ジェイル　同世代かどうかわからないけど、80年代に入ってからはすごい出てきたよね。ただ、その辺にはそんなに惹かれなかったっていうのが正直なところで。ヴァン・ヘイレンとイングヴェイ以降はみんなペンタトニックが主流ではなくなるんだけど、俺はやっぱり一番多感な頃に影響を受けた70年代の、ペンタトニックを使うプレイヤーが好きだったよね。カッコよくプレイするペンタね。

——80年代は、多彩なスケールを駆使してというスタイルが主流になりますからね。

ジェイル　そうすると80年代の、特にアイアン・メイデン以降のギタリストって、もちろん聴いてはいたんだけど通り過ぎちゃったんだよね。"なんか違うんだよな"っていう。だからマイケル・シェンカーも、UFOからマイケル・シェンカー・グループになってからはなんか違うな、とか。

——なるほど。

ジェイル　やっぱり楽曲があって、そのなかでのギターの役割であり音だったり。そのあたりも総合的に好きだったんだよね。例えば曲を聴いてるはずなんだけど、ギター・ソロを待っちゃってるとかさ。退屈な曲が流れて"あーギター・ソロ始まった、あーなるほど"みたいなさ。それって違うだろってすぐに思ったよ。

——まずは曲自体が良くて、リズム・ギターでもしっかり聴かせろ、と。

ジェイル　曲も含めて、グルーヴ、音楽、全体、そのなかでカッコいいギターってのが当然だと思うからね。だから世仮の17～18の頃は巷に好きな音楽がなくなっちゃって、それで自分で曲を作り始めてた。

——聖飢魔Ⅱがデビューした1985年前後は、LAメタルがまだ全盛でシュラプネル系も出てきて、スラッシュ・メタルはピークを迎えつつあった頃ですが、いよいよスラッシュ系ギタリストはピンとこない感じでしたか？

ジェイル　リサーチ的に聴いて好きだったのはアンスラックスかな。

ルーク　その頃はこっちも聖飢魔Ⅱをやっていた頃なので、"これがトレンドか"と思って一所懸命ついていこうとしていたね。で、なんかもう、とんでもなく速い人がたちがいっぱい出てくるなって。スウィープってなんだ？って話になってきて、タッピングがどうこうって、"これはもう大変だぞ"と（笑）。

——そのなかで、趣味に合いそうなギタリストはいましたか？

ルーク　そういうことよりは、"こういう風にすると速く弾けるのか"とか"この人はこういう考え方で、こういう速い弾き方をしてるのか"とか、その分析にいっていて。いわゆる音の組み合わせではなく、音色的な部分ではあまり好きな人はいなかったんだけど、ウリ・ジョン・ロートはスコーピオンズの頃から好きだったんだ。ウリもエレクトリック・サン以降はかなりテクニカルなところに行き着くんだけど、音色・音使いも含めて全部好きだったね。いまだにヒーロー。

ジェイル　イングヴェイを最初に聴いたときはすぐコピーをしてみたし、スッとできちゃったんだけど、旋律はエレクトリック・サンのレコードを45回転で聴いた感じと同じだったよ（笑）。

ルーク　ハハハ！

ジェイル　自分にとってソング・オリエンテッドであるというのはとても重要で、どんな音楽でも楽曲の良さありきなんだ。ギター・プレイがどれだけすごいからって、そこだけで夢中になることはなかったかな。

——ルークさんは、90年代日本でのテクニカル・ギタリストの一端を担っていたとも思いますが、そういった研究のたまものでもあったんですね。

ルーク　でも、そんなに最先端をいっていたとは思ってないよ。頑張ってついていったって感じだから。

——逆に、そういったシュラプネル・ブームなどがなければ、速く弾かなくてもいいやとも思っていたんでしょうか？

ルーク　でもね、速く弾くのは基本的には好きだった。当時でいえば「ハイウェイ・スター」の有名な"タラタタ・タラタタ～"は流行りだったし、そういうのは聴くのも弾くのも好きだったから。やっぱりチャレンジだし、それができたときは嬉しいじゃない。そういう意味で速弾きってのは楽しいなって。

——16分のフル・ピッキング・フレーズは、ルークさんの十八番でもありますからね。

ルーク　スポーツ感覚というか、そういうチャレンジが好きなんだよね。

——ジェイルさん作曲の「FIRE AFTER FIRE」の強烈なギター・ソロからは、それこそ物語性、起承転結を強く感じます。

ジェイル　あれはね、世仮の17～18歳ぐらいのときに初めてオリジナル曲をやるバンドを組んで、そこで2～3曲目に作った曲なんだよ。さっき言ったように好きな曲が巷になかったから、"こういうのが聴きたい！"っていう俺のパッションが詰まっているという。もちろん10代で聴いてきたいろいろな音楽のインプットがあってのアウトプットだとは思うけど、何かを意識してというものはなくて、聴きたいものを作るのに夢中になってたよ。

——自分の聴きたい音楽を、自分でプレイする。

ジェイル　プレイするのももちろん好きだけど、より音楽を聴くのが好きなのよ。常におもしろい音楽、いい音楽を探してる。自分が大好きなものを一番間近で一番いい音で聴きたいっていう、それがプレイする動機だから。

——それを実現してくれるのが、自分自身ということですよね。ルークさんの作曲に対するマインドというと？

ルーク　やっぱり"心が動かされる"というのが基本だとは思うんだよね。それを聴くことによって元気が出るとか、あるときは悲しい気持ちになったりとかもするんだろうけど、その自分の気持ちが動くメロディ、自分の気持ちが動くリズム、自分の気持ちが動くハーモニーを追求しているっていうのが一番当てはまるかも。

——聖飢魔Ⅱという絶対的な世界観を持っているバンドで、活動初期は特にそのカラーが強かったと思います。その点はどれくらい意識されていたのでしょうか？

ルーク　俺が入った頃ってその世界観、いわゆる"悪魔ワールド"をどう音楽で表現するかっていうところに軸が置かれていて。それで4枚目（『BIG TIME CHANGES』1987年）を作ったんだけど、5枚目（『THE OUTER MISSION』1988年）でレベッカの土橋安騎夫さんと出会って（※同作のサウンド・プロデューサーを務める）。悪魔ワールドを念頭に置いた曲をたくさん作ったんだけど、土橋さんに聴かせたらあまり反応が良くなくて、"もっと自由になっていいんじゃないかな"って言われて、そこから一気に開けたというか。音楽的には、そこでかなり大きなステップが踏めたなとは思って

自分が大好きなものを、
一番間近で一番いい音で聴きたい。
それがプレイする動機だから。

ジェイル大橋代官

エレキ・ギターって、いろいろな音で成立する。それだけ時代も反映するし、技術を追求することもできる。――ジェイル

いるよね。
――その後の『恐怖のレストラン』(1992年)は、逆に自由ななかでのヘヴィな面を強く出した作品という?
ルーク　そういうことだよね。もちろんこれもできるから、やっておこうよっていう。
――ジェイルさんの作曲ということでは『地獄より愛をこめて』(1986年／3rd)が挙げられますが、同教典でも自分が好きな曲を作っていったという形ですか?
ジェイル　うーん……聖飢魔IIの始まりには"ダミアン・ワールド"という音楽の世界観があって、デビュー以降は俺が作曲を担当していくんだけど、俺はダミアン・ワールドを追従することはできなかったからね。俺にできることは、とにかくカッコいい音楽を作って、カッコいいギターを弾く。それ以上に意図的な何かができるほど器用じゃないよ。特に聖飢魔IIの最初の頃はイロモノ的な露出が先行して成功していたんでね、そこでしっかりロックを見せつけないといけないなって、俺はロックなんだよっていうもどかしさはあった。いつまで経っても色褪せないカッコいい音楽を作っていかなきゃって気持ちは一番強かった。
――そのとおりで、「アダムの林檎」に代表されるように、今もって人気の曲が収録されることになりました。同曲のオープニング・リフでは3度・4度に動きのある、パワー・コード一辺倒じゃない作りにも、そういった気持ちや個性が出ていると感じます。
ジェイル　その頃のハードロックって全部5度和音で"ゴゴゴゴ……"っていってるだけで、そういうのに全然魅力を感じなくなっちゃったの。それでもっとおもしろいこと、もっとハッとするようなこと、自分が夢中になれることじゃないと。誰もやってないことをやろうっていうのは、作曲やプレイする上で意識したことだったね。

自分のなかでのパンク体験は
グランジが当てはまると思うな。(ルーク)

――90年代後半からは、世界的にグランジのブームが出てきます。メタル的な派手なギターの人気がひっくり返った感じもありましたよね。
ルーク　ジェイルってその頃アメリカにいたよね。そのあたりの現地の感覚から聞いてみたい。
ジェイル　ガラッと変わったよね。音楽が変わったっていうよりも、世の中が変わった。景気後退が始まったり、湾岸戦争が始まったりとかアメリカ中がグレーな時代の空気に包まれた。能天気なパーティ・ミュージックがまったくリアルに響かなくなってしまったというか、そのカウンターでシアトルの音楽の暗い感じがばっちりハマっちゃったんだよね。でもニルヴァーナとか、デイヴ・グロールのドラムは強力だったし、売れるのは当たり前だなってあとから思ったんだけど。俺は最初はね、なんか暗くて嫌だった。ネガティブな感じがね。"演奏なんかうまくできなくてもかまわない"みたいな。だけどギター・ソロ中心の音楽にも辟易としてたから、よく世相を反映した"時代の音"なんだろうな。
ルーク　自分のなかでのパンク体験はグランジが当てはまるなと思う。ジェイルが言ったとおり、ロー・ファイな演奏にショックを受けて。例えばメタルだとハウっちゃいけないからミュートをするところも、グランジだと鳴っていてOKなんだよね。強烈に歪んだフィードバックをそのまま収録したみたいな、俺のなかではある意味すごいロックだなって。ニルヴァーナとかパール・ジャムとかストーン・テンプル・パイロッツには懐かしさも感じて"あ、また古いロックが新しい形を持って出てきたんだ"と思ってすごい好きになっちゃったのよ。
――グランジ勢からの、ブラック・サバスに影響を受けたなんて発言ありましたからね。
ルーク　もっと60年代にあったブルース・ロック的な匂い……音楽的なことじゃないかもしれないけど、すごい匂いを感じるんだよね。しかも歌詞には"みんな死んじゃえ、クソったれ"みたいな感じがあって、それって今までカッコ悪いから言わなかったんだけど、言ってみたらウケちゃったみたいなとこがある気がして。そういうコンフェッションみたいなものって美しいなと思うんだよね。
――90年代中盤以降の日本では、今度はメロコアが流行ってきて"ギターをやるならパンクだぜ!"という流れに。同時に、ギター・ヒーロー的な存在は少なくなった傾向も。
ジェイル　ギター・ヒーローになるには、結構な努力が必要なんだよ(笑)。だけどエレキ・ギターって、いろいろな音で成立する。そんな楽器ってギターのほかに考えらんない。それだけ時代も反映するし、気持ちだけでも弾けるし。もちろんその技術やスキルも追求することができる楽器だし。ギターの魅力をどう引き出すか、どこに惹かれるのかっていうのが、嗜好によって違うっていうだけの話。
――ジャンルという言葉でどう区切ったとしても、ギターという楽器の良さは変わらないということですね!
ルーク　トレモロ・アームでチューニングを狂わしたっていい楽器じゃないですか。そういう意味ですごい楽器だなって思うよ。
ジェイル　エレキ・ギターってのはピアノほどピッチの安定はないけど、鍵盤と鍵盤の間の音も出せる。楽器として非常にフレキシブルというか、気持ちに直結した音が出る。そこはやっぱり魅力だよね。
――近年は、ギターが前面に出ていないバンドも少なくはないですよね。そのあたりで寂しさを感じることは?
ルーク　うーん、俺はそんなに寂しくないんだよね。音楽がおもしろくて、それで成立しているなら全然OKだし。ただ、自分で作る、自分で歌うとなると、そこにはやっぱりギターが入ってくるな。
――ジェイルさん的にはどうでしょう?
ジェイル　やっぱり時代とともにプレイヤーもリスナーも進んでいてね、結局、ソング・オリエンテッドであるべきだっていう結果なんじゃないかな。今は細分化していて、メインストリームがあってないような時代だから。だからギターをガンガン弾いているグループもいるし、速弾きをやっているギタリストもいるしさ。それぞれどこにフォーカス

▲ルーク篁参謀、ライデン湯澤殿下、デーモン閣下、ゼノン石川和尚、ジェイル大橋代官／L to R

ギターが前に出ていなくても、音楽がおもしろいなら全然OK。ただ自分で作るとなると、やっぱりギターが入ってくるな。──ルーク

を当てるかなんだよな、やっぱり。

──メタル・ファン、ギター・ファンとしては、ぜひ今後もそのふたつの要素が融合した音楽が生まれてくるとうれしいところです。

ジェイル　ハードロック、ヘヴィメタルに絞って言うのであれば、やっぱりギター・サウンドはキーになるからね。もちろんすべての楽器が重要なんだけど、ギターは個性が格段に出る楽器だから。でも、その音だけじゃ成立しないんだよね。アンサンブルがあり、ベースとギターの音のつながりであったり、ビートの整合感だったりとか。

──ですね。

ジェイル　ギターは割と音数が多くなる楽器なんで、一番客観的に聴かなくちゃいけないポジションだし、逆に楽しく聴けるポジションだよね。そこにいろいろ放り込めるのがおもしろい。ちょっと刺激してみようとか、ここで遊んでみようとか、こんなことしたらどんな反応するかなとか、キャッチボールが多いというか。ギタリストは音楽を広い範囲で総合的に関われるポジションだね。

ルーク　本当にそう。アンサンブルこそ音楽の魅力だって思うから。どうしてもひとりだと誰かと一緒にやる楽しさって味わえないし、誰かと一緒にやるからこそ、そこが発表会になるわけで、向上心も芽生えてくる。やっぱり人と合わせるってのが楽しいんだよね。

──そういった楽しさを求めて、リスナー系の音楽ファンにも、楽器を手にとってもらえるといいですね。

ルーク　そうだね。まあ聴くのが楽しいのは確かだと思うから。ちょっとでもやってみたいと思うんだったら誰かとやるってのをお薦めするよね。

──さて、本日はギターを軸に、いろいろな話を聞くことができました。きっと近い未来に、聖飢魔Ⅱの新曲を聴くこともできるのでは……と楽しみにしていますが、そこではハードなギターを期待してもいいですか！？

ジェイル　ベストを尽くすよ（ニコ）。

ルーク　約束する（キラッ）。

Informations

◆ルーク篁参謀
FM福岡にて『エースとルークの魔界接近遭遇リターンズ』が放送中
〇放送時間：毎月最終金曜日／ 26:00 ～ 26:55
〇出演：エース清水長官、ルーク篁参謀

◆ジェイル大橋代官
エフエム豊橋にて、大橋隆志がパーソナリティーを務める音楽番組『MIND-O-NATION』が放送中
〇放送時間：毎週土曜日／ 19:00 ～20:00
〇公式アプリ：https://fmplapla.com/tees-843fm/

●［ライヴ情報］
TAKASHI O'HASHI & The Sound Torus
- 5556 Birthday Live-
〇日程：5月5日（水）
〇会場：東京・秋葉原 CLUB GOODMAN
〇出演：大橋隆志（g、vo）、石川俊介（b）、田中徹（d）、扇田祐太郎（g、vo）

●［シグネイチャー・ギターが発売］
アリア・プロⅡより、新シグネイチャー・モデル“PE-JAIL GLITTER”が発売決定！
紹介はHPまで（http://www.ariaguitars.com/jp/items/electric-guitars/pe/PE-JAIL-GLITTER/）。

The latest article from UK

Text by Dave Everley
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』342

[A MESSAGE FROM THE CLERGY]

GHOST ARE TEN

聖職者からのメッセージ　～ゴーストはサイコーだ

ゴースト

不気味なマスクをかぶったホラー・チックなヴィジュアルとシアトリカルな世界観、そしてヘヴィメタルとゴシックとポップスを渾然一体とさせた音楽性で、2010年のデビュー以来、多くのファンを魅了してきたゴースト。特に欧州では絶大なる支持を得ている彼らだが、その主宰者であるトビアス・フォージは、最初から成功の道を歩んできたわけではない。最後のチャレンジと目してきたこの活動が大輪を咲かせるまでの10年の軌跡。

何か奇妙なことが進行していたが、リー・ドリアンはそれが何なのか把握できずにいた。2010年の初頭、近年彼が運営しているレーベル［ライズ・アバヴ］と“不思議な魅力を持った新しいバンド”ゴーストは契約を結んだ。そしてバンドのフロントマンかつブレインであるトビアス・フォージは、身にまとうローブを買うための資金を求めた。

“あの当時彼らがどんなルックスだったのか、俺はまだ見たことがなかった”と、カテドラル及びナパーム・デスの元シンガーが振り返る。“トビアスは何度も金の用意を求めてきて、その額面は次第に増えていったよ。彼が言うには写真撮影のためのローブが必要だったってことで、しまいには撮影の総費用以上にローブに金をかけることとなっていたね。俺は「大層ご立派なものを用意してくれるんだろうな！」という感じだったさ”。

好奇心を抱いたリーは渋々ながらキャッシュを渡し、スウェーデンのリンシェーピング（※同国南部の都市）からやってきた秘密主義のミュージシャンが一体何を目指しているのか明らかになるのを待った。“できあがった写真で彼らの姿を初めて見たときの俺らといえば「なんだこれは……」って感じだったね”。

スリップノットがシーンに現われて以降、マスクを被ったバンドは幾十も出てきた。しかし彼らの容姿は、それらをさらに凶悪にしたものだった。黒頭巾をかぶった連中のなかに、死霊の司祭らしき者がたたずみ、その頭には刺繍を施したターバン、顔にはデスマスク、そしてとても高価なローブをまとった姿が写真に収まっていた。

立身のきっかけを作ったリー・ドリアンとともに

トビアスは“あの頃はタイミングと俺たちの野望がそろい、そして死に物狂いだった”と、当時バンドがシーンに与えたインパクトについて語り、それは単に彼の新たなレーベルのボスに対してのみならず、メタル・シーン全体にインパクトを与えるものであったと言う。“その陰で、俺は人生をかけてずっと準備をしてきたんだ”。

写真の中央に立ち、そしてゴーストの本体でもあるこの男は、彼がこれから世の中に投下しようとするものが何であるかを明確に理解していた。唯一彼が予見できなかったのは、自身が抱く大きくクレイジーなヴィジョンが世の中に受け入れられるか否かということだけ。

ゴーストが、自分にとって最後のチャンスであったと、トビアスは認めている。彼は10代半ばよりバンドでプレイしてきたが、大きなチャンスに恵まれたことはなかった。当時彼は30歳になろうとしていて、結婚もしており双子の子供も養わなければならない状況だった。“2009年の時点で、俺は死に物狂いだった。翌年には親になろうとしていて、どうしてもお金が必要になるという現実に直面していて。そういったこともあって何かをやろうと決意していたんだ”。

13歳年上の兄・セバスチャンの影響で、彼は幼い頃からロックンロールに触れていた。音楽、コミック、ホラー映画といったものにおけるセバスチャンのテイストは、そのままトビアスへと受け継がれていった。セバスチャンがキッスの1977年のアルバム『ラヴ・ガン』を家に持ち帰ったとき、幼きトビアスはジャケットに描かれた鮮烈でコミック・ヒーローのようなキッスのメンバーに惹かれていく。“兄貴は「このレコードをお前にやろう。お前のほうが俺よりも気に入ったみたいだからな」と言って、俺にレコードをくれたんだ”。

プロの写真家でありアマチュア・ミュージシャンとしても活動していた父は、子供の頃にギターを教えてくれた。“俺はミュージシャンになること以外、野望を抱くことはなかった”と言い放つ。10代中盤になる頃にはすでにいくつかのバンドを渡り歩いており、16歳で学校を中退。それから10年間、彼はさまざまなスタイルのグループで活動をしている。反体制的なデス・メタル・バンドREQUGNANT、インディ・ロックな出で立ちのSUBVISION、オルタナティヴ・ロックのMAGNA CARTA CARTEL、そしてヘア・メタル・リバイバルのようなバンド、クラッシュダイエットにまで手を出して活動していた。“19歳から29歳の頃の俺は、ミュージシャンとしては成功から程遠い存在だった”と顔をしかめながら話す。

2006年には自身の履歴書に新たなプロジェクトを書き連ねた。ブルー・オイスター・カルト、マーシフル・フェイト、ミスフィッツといった、彼が聴いて育ったバンドたちのレコードにインスパイアされた曲を書き始めるようになるのだ。クラシック・ロック、メタル、パンクといった要素をビッグでポップなメロディに織り交ぜる……それでいてオカルト的でアンダーグラウンドな何かが流れていたところ……前述バンドのそういったスタイルは、彼のハートを鷲づかみにしていた。

“I WAS AT A POINT OF DESPERATION”

――当時の俺は死に物狂いだった。

ゴーストというワンマン・バンド・プロジェクトを開始させたトビアスだが、これはそもそも彼が目指してきたいくつかの音楽性のなかのひとつを追及するためのものだった。状況が変わり始めたのは 2008年のある週末のことで、友人でありREQUGNANTのベーシストであるグスタフ・リンドストームとともにストックホルムのスタジオに入り、トビアスが書き上げた「プライム・ムーヴァー」、「スタンド・バイ・ヒム」、「デス・ネル」の３曲のレコーディングを行なう（※３曲とも、のちに『オーパス・エポニモウス』に収録）。そして、その週末が終わろうとしていた頃、ふたりはレコーディングした楽曲を聴き返していた。“あのとき初めて、自分たちが奇妙なサウンドを作っているということに気がついたんだと思う。自分たちが気に入れば、ほかの人たちにも気に入ってもらえるだろうという確信を持ったよ”。

彼は、自分が書いた曲を気に入っていたかもしれないが、それらを自ら歌うことはまったく望んでいなかった。“俺はずっとスラッシュとキース・リチャーズの大ファンだった。シンガーになるよりも、クールなギター・プレイヤーになりたいと思っていたから”。そこで、それらの曲を歌ってみる気はないか？と、何人かの実力派シンガーにコンタクトを取る。そのなかにはキャンドルマスの元フロントマンであったメサイア・マーコリン、グランド・メイガスのヤンネ“JB”クリストファーソン、そして以前イングヴェイ・マルムスティーンのバンドで活躍したマッツ・レヴィンといった面々も含まれていた。

しかし残念ながら彼らが参加に至ることは微塵もなかった。消極的な選択ではあったがトビアスは次第に自分でやってみるということも視野に入れ、最終的にはそうせざるを得なくなってしまう。彼が思い描いていたのは、カトリック教会のローブやメイクアップを身にまとったおぞましい出で立ちの男がフロントに立ち、“パパ・エメリトゥス”と名乗る司祭と対峙する悪魔的なキャラクターだった。彼はキッスやキング・ダイアモンドといったバンドを好んでいたことから、独自の解釈やひねりを込めた邪悪でオカルトなものをやりたいと考えていたのだった。

これは大きな野望を込めた計画だったが、それと同時に家族を養いながら生活費を稼がなくてはならないという実情もあった。コンセプトの全体像が具現化しようとしていた頃、彼はまだスウェーデンの電話会社のコールセンターで働いていた。“俺は電話やコンピューターについて何も知らなかったし、とても馬鹿げた話だったさ”と、笑いながら続ける。“俺は単にクソみたいな仕事をマスターするスキルを手に入れていたんだ”。

コールセンターの仕事をしながら、曲やコンセプトについてアイディアを固めていったトビアス。客からの電話に対応しながら、ゴーストのロゴも当時すでに思い浮かべていた。“俺はデスクに座りながら、別の人生が起こることを願っていたんだよ”。

そしてついに、彼のもとに別の人生が舞い込んできたのだ。幼い家族を養いながら、トビアスはさまざまな方向にアンテナを張り続けていた。同時に、残された時間が少なくなっていたことも理解していた。“2009年の終わりに向かい、俺は残された時間のなかで本腰を上げてひとつのことに集中しなければならないと感じていて。そこで動き出したゴーストは、俺が今までに行なってきたなかで最高の出来事だったね”。

2010年3月12日は、良くも悪くもトビアス・フォージの運命が大きく変わった日となった。

ゴーストとしてレコーディングを行なった楽曲をMyspaceにアップロードし、それから数時間REQUGNANTの面々とともにリハーサルをして、どのようにしてゴーストを世界中に知らしめるかを思案していた。その晩、彼は母が暮らすアパートを訪れパソコンを開いたとき、自分のMyspaceのページがバズっていたことに初めて気がついたのだ。

“妻は出かけていて子供たちは寝静まり、そして母はソファーで寝込んでいた。俺はパソコンの前に座り込み、そこで起きていることに多幸感を感じていたね”。

深夜になって電話が鳴った。“母が電話に出たんだけど、その後はすべてが凍りついたようだった”と、感情をあらわにして当時のことを振り返る。

兄のセバスチャンが家で倒れ、帰らぬ人となったのである。彼は急な心不全によって命を落とした。誰も兄に死が迫っていることに気づくことはなく、ましてや彼のことをアイドル視してきた弟は、そんな別れが急にやってくるとは思いもしなかった。

“何かとても奇妙な取引があったんじゃないかと感じたよ。俺がバンドで成功するのと引き替えに、兄貴を持っていかれたんじゃないかってね。「これはもう起こってしまったことだし、俺には何もできない。この引き継いだバトンを手にして走るしかないんだ」と自分に言い聞かせ、それ以来俺はずっと突っ走っている”。

ダークスローンのドラマー、フェンリズによってリー・ドリアンはトビアスの存在を知ったが、Myspcaeにアップされた彼の楽曲の方向性や目指すものについてはすぐに理解できなかったようだ。“俺があのデモを初めて再生したのが金曜日のことで、日曜日になった頃にはすでに30回は聴いていたと思う。ほかの何とも違う新しいサウンドだったんだよ。ポップでありつつも悪魔的で、とにかく独特でオリジナルだったから”。

一週間もしないうちにリーはゴーストへライズ・アバヴから3枚のアルバムを出す契約のオファーをし、ベーシストであり旧友のグスタフ・リンドストーム、セッション・ドラマーのラドウィッグ・ケンバーグとともにリンシェーピングの地下スタジオにて『オーパス・エポニモウス』をレコーディングする予算を与えた。

“トビアスはまったく気取らない、本当にフレンドリーな男だった。しかし彼はゴーストに1000%……全身全霊を捧げていたよ。ゴーストはアイツにとってのすべてだったんだ”。

リー・ドリアンにすれば“どうしてそんなものに大枚をはたいたのか不思議でならない”ほど高価なローブに身を包んだバンドのプロモーション写真は、トビアスの妹により友人宅のリビングで撮影された。“あの場には俺、のちにバンドに加入する男がひとり、そして彼の隣人および友人、あともうひとりくらいいたはずだ。あの写真はまったくの作り物なんだよ”。

しかし『オーパス・エポニモウス』に込められた野望とオカルトへの執念はニセモノではなかった。“俺はずっと悪魔と結託して生きてきた。俺はずっとポップなカルチャーと悪魔的なものにアイデンティティを見出し、触れながら成長してきた。聴いてきた音楽、観てきた映画、触れてきた芸術にはそれらが常にそろっていたんだ。世界を吹き飛ばしたいと願う怒れるティーンエイジャーにとって、サタンは完璧に崇拝すべき存在だろ。俺はすでに怒れるティーンエイジャーというわけではないが、これは単に俺の自己表現を行なう方法なんだよ”。

トビアスはこれらの音楽を書いたときから、ライヴではどうパフォーマンスするべきか常にコンセプトを抱いてきた。彼の頭のなかでのゴーストのライヴ・パフォーマンスというのは、キッスやアリス・クーパーのような最高峰にシアトリカルなものというわけではなかった。その代わり、もちろんほかの要素が存在する。幼少期、彼は母に連れられて定期的にオペラを鑑賞しており、目や耳から入ってきたそのどれもが好きにはなれなかったが、そのオペラの空間からは常に何か神秘的なものを感じていた。

“劇場の内装、スモーク、匂い、そしてカーテンが上がる直前の静けさだね”。彼はそれらと同じマジックを求めていた。“Tシャツを着ただけのふたりの男が自分たちのオリジナルを3曲と、あとはマーシフル・フェイトのカバーってのをバーでやるのとは違うと、最初からずっと言葉にしていた。スピーカーから聴こえてきた楽曲たちには、それ以上の価値があったんだ”。ほかのバンドと同じことをやってみたり、トイレが汚いスウェーデンのライヴハウスをプレイしてまわるというのは、彼が願っていたことではない。ゴーストはそれ以上のことをするに値していた。

彼のバンドが公に披露されたのは、2010年10月23日、ドイツのヴュルツブルクにて開催された［Hammer Of Doom］というフェスティバルだった。その翌日にはロンドンに飛び立ち、500人のキャパシティを誇るカムデンのアンダーワールドというクラブで行なわれた［Live Evil Festival］に参加した。

ロンドンでのショーに参加したリー・ドリアンは、“彼らを観にきた人なんてほとんどいなかったと思う。そもそも、どこからやってきたのかすら知らない人がほとんどだっただろう。しかし彼らがステージに上がった途端に「ウォ！　コイツらは一体何者なんだ？」という感じになって”と振り返る。

シーンに与えた衝撃はすぐには消えなかった。ゴーストを巡る熱気は数名の著名人たちを介して徐々に本格的になっていった。『オーパス・エポニモウス』はフィリップ・アンセルモの手に渡り、このフリーキーなスウェーデンのバンドはマーシフル・フェイトやブルー・オイスター・カルトのようなサウンドと称賛された。そして［メタル・ブレイド］の設立者ブライアン・スレイゲルは、このアルバムをジェイムズ・ヘットフィールドに渡した。

ジェイムズはスウェーデンのテレビ局［SVT］による2011年のインタビューにて、**“俺は彼らのファンクラブに入会している”**

“I’VE LIVED MOST OF MY LIFE IN CAHOOTS WITH THE DEVIL”
――俺はずっと悪魔と結託して生きてきたんだ。

と打ち明けた。**“映像を観るまで、彼らがどんなルックスなのかまったく見当がつかなかったよ。最初に彼らの音楽を聴き、とてもグレイトでユニーク、そして強烈にメロディックでメタルに新たな息吹を吹き込むものだと直感したね”**と絶賛したのだ。

バンドはパラダイス・ロスト、トリヴィアム、マストドンらをサポートするライヴに恵まれ、2012年4月に満を持して“Join Their Cult(ようこそカルトの世界へ)”という言葉とともに、『METAL HAMMER』の表紙を飾った。彼らが人気を得ていった背景には、ミステリアスな露出のさせ方も大きなポイントだったと言えるだろう。トビアスはインタビューにおいてキャラクターを常に維持し、ほかのバンド・メンバーは一切口を開くことはなかった。一般大衆はこのマスクの下にどんな素顔があるのか不思議に思い、それはまさしくトビアスの狙いどおりだった。

“こういった戦略を取ったのは、俺がシャイだったからとか姿を見られたくなかったからというわけではない”と、考え抜かれたこの匿名性について話す。**“このプロジェクトにはそんな狙いはまったくなかった。俺は空想にふけったり、夢を見ながら生きてきた。何もかもが曝け出された現代の状態というのは実は好きじゃなくてね。「何でもかんでものめり込んで知りたがるような人たち」というのは厄介だけど、「情報をたくさん手にしたあとにすぐ飽きてしまう人たち」というのはさらに厄介なものなんだよ”**。

『オーパス・エポニモウス』に伴う一連のキャンペーンの最後のショウを2012年8月19日にオランダの[Lowlands Festival]で行なったころ、アルバムはライズ・アバヴ最大の売れ行きを誇る作品となっていた。リー・ドリアンはこのバンドをとても愛していたが、自身のレーベルでは彼らを次のレベルへと展開させる予算や体力がないこともわかっていた。**“あの頃はトントン拍子で何もかもが大きくなっていき、ステージ規模はさらに膨らもうとしていた”**と当時を振り返る。**“彼らと契約した内容を守りながら、どのようにしてリリースを行なっていけるか話し合いを始めた。かなり難しく辛いことでもあったけど、彼らを邪魔するわけにはいかなかったんだ”**。

バンドはライズ・アバヴを離れてユニバーサル傘下の[Loma Vista]へと移籍し、2013年に2ndアルバム『インフェスティスマム』をリリースした。そして活動開始から10年目を迎えようとするまでにゴーストはさらに2枚のアルバムをリリースし、2018年のアルバム『プレクウェル』は大西洋の両側でトップ10入りを果たした。すべてを目撃し、知ってきたアンデッドな司祭であるパパ・エメリトゥスは、自分たちが成功をつかむことを知っていたかもしれない。しかしトビアス・フォージはそうではなかった。

“もともと俺が純粋に考えていたのはライズ・アバヴみたいなレーベルに所属して、彼らとしっかりしたアルバムを何枚かリリースすることだった。そして時折そこそこの規模のライヴをやれたらいいかなくらいに考えていて。こういったメインストリームでの成功をつかむなんて、俺らはまったく考えていなかったよ。現在目の前で起こっていることなんて、思いすらしなかったさ”。

悪魔主義的なマスクやローブを身にまとったポップ・メタルのグループが、10年の年月をかけて重要なポジションを勝ち取った。これ以上に想定外のことなど、そう簡単に見られるものではない。しかし悪魔というのは常にミステリアスで予測のできない動きをするものだ。一体これから何が起ころうとしているのだろうか？

The latest article from UK

Text by Eleanor Goodman
Photo by Piotr Kwasnik
Interpretation by Tommy Morly
Original by『METAL HAMMER』344

ヘンリー・デ・ヨング(d)、ルイス・デ・ヨング(vo&g)、ツランガ・モーガン・エドモンズ(b) ／ L to R

WHERE THERE'S SMOKE...

煙立つところに……

ALIEN WEAPONRY

エイリアン・ウェポンリー

エイリアン・ウェポンリーをご存じだろうか。ニュージーランド出身の彼らは、まだ修学過程を終えたばかりという年齢ながら、“マオリ文化”をスラッシーなサウンドに落とし込み、世界で最もホットな若手メタル・バンドとして台頭してきている。南米から北欧まで、土着的文化をサウンドに持ち込むバンドは少なくないが、彼らはキャラクターとしてだけではなく、自分たちのルーツが持つ歴史や理を周知させるという使命感をも音楽に落とし込んでいる。

エイリアン・ウェポンリーは、母国ニュージーランドでのツアーの途中であった——と、通常ならそう伝えられるはずだった。しかしライヴを行なうこと自体が規制されている現在では、彼らが同国サウスアイランドのダニーデンにある小さなバーで行なったライヴについて聞くインタビューとなってしまい、いささか奇妙な印象だ。もはや彼らにとって別の惑星、別の次元での出来事でもあることだろう。

一連のライヴは《レベル・ワン・ツアー》と名づけられており、これはニュージーランドにおける現在の新型コロナ・ウィルス感染拡大の警戒レベルが最も低い状態にあることに由来している。

“これって俺たちが今までにプレイしてきたなかで、最もクレイジーなギグのひとつだったと思う。ライヴを終えたあと、誰かの鼻っ柱をくじいてやったくらいの気持ちだよ”と、フロントマンのルイス・デ・ヨングは興奮気味に話す。

“そうだね、アレは痛快だったな！”と、ドラマーでもある兄のヘンリーが加える。**“オーディエンスのなかのひとりは目が点って感じだったし、ギグのあと俺のところにきて完敗ってツラを見せてきたんだぜ！”**。

彼ら兄弟は、普段はそれぞれのパートナーとともに暮らしているが、今回のインタビューはダニーデンから北方に 960 マイルも離れた街、両親が住むワイプより応じてくれた。現在でもこの街はバンドにとっての本拠地で、週３回は練習しているという。ヘンリーはリビングより［ズーム］で参加し、ルイスは**“寝っ転がることだってできて、快適だからね”**という理由でベッドルームから応じてくれた（**“こいつはいつもこうだから！”**と、ヘンリーは“ビッグ・ブラザーな笑顔”を見せた）。彼らは現状が混沌としていることを認めた。**“もちろん素晴らしいし、壮大で、最高な環境ではあるけどさ！”**とルイスは笑う。言い換えるならば、自身の部屋でくつろぐ 18 歳の少年の姿そのものである。

エイリアン・ウェポンリーが結成されたのは、ルイスがまだ８歳、ヘンリーが 10 歳の頃で、のちに友人のイーサン・トレンバスをベーシストとして迎える。彼らはその若過ぎる年齢を隠してバーでプレイし、国内の若者向けコンテストで優勝を果たす。特筆すべきはその若さのみでなく、彼らの才能、そして飛び抜けたサウンドであり、それがすべてを物語っていた。

英語とマオリ語によるヴォーカルにグルーヴ・メタルを織り交ぜ、自分たちの生活のみならず、マオリの人々が戦い続けてきた過去や植民地化という“正義を欠いた歴史”についても歌っている。

彼らのデビュー・アルバムとなった 2018 年の「Tū」は、英国軍の侵略に抵抗し戦った彼らの曽祖父の語りから始まっている。彼らは昨年、北米最大のネイティブ・アメリカンの保留地であるナヴァホ・ネイションに大統領によって招かれプレイする機会があり、我々『METAL HAMMER』もその演奏を観ている。先住民と植民者たちの衝突という過去の歴史を両者はともに背負っており、打ち解け合うまでに時間はかからなかったようだ。

彼らはニュージーランドのジャシンダ・アーダーン首相に対面する機会があり、[ヴァッケン]や[ダウンロード]といった高名なフェスを始め世界各地でもプレイをしてきた。2019 年２月には 2000 人のキャパシティを誇るオークランド・タウン・ホール——この 2000 人という数字は、国土に比べて少ない人口という観点から考えると決して小さくはない——にて、ホームタウンでの最大規模となるライヴを開催する予定でもあった。また秋にはスレイヤー、ゴジラ、マストドンらを手掛ける[Rick Sales Entertainment Group] とマネージメント契約を結ぶ。彼らは上昇気流に乗っていると言っても過言ではないだろう。

“俺らは今までに聴いたことのないものをやっているという点で、多くの人たちの興味を惹いているんだと思う。もちろんポルトガル語で歌っているセパルトゥラと多くの類似点を感じている人がいるのもわかっているし、ネイティブな言語や物語をメタルと組み合わせているバンドもいるよね。でも俺らは自分たちらしさを持ってやっているんだよ”とヘンリーが説明してくれた。

2020 年３月、エイリアン・ウェポンリーは 2nd アルバムにて“自分たちらしさを”次のレベルで見せつける準備を整えていた。車を２時間走らせて向かったオークランドのラウンドヘッド・スタジオにてスタンバイをしている頃、政府は国内に向け《警戒レベル 4》を宣言し、ひと月というロックダウンを過ごすこととなった。彼らはパッキングを行ない、パニックのなかで物資を買い貯めるためにスーパーへ向かう人々の渋滞を避け、無事帰路に着いた。**“実はこれってある意味ラッキーなことでもあったんだ。スタジオを取っていた期間に見合うだけの素材がなかったから、新曲を用意するチャンスを与えてもらえたようなところもあって”**とルイスは告白する。

次のアルバムは、彼らがすでに作りあげてきたものの上に成り立っているが、今回はマオリの伝統をさらに熟考して深堀りしていくものとなった。そのなかの１曲は『ハツパツと鳥女』（原題『Hatupatu And The Bird-woman』）という寓話に基づいている。この曲は——“ハツパツ”という 10 代の少年が、“クランガイツク”という鳥のような羽と爪、クチバシを持つ女性に囚人と間違えられ洞窟に閉じ込められるものの逃げ出すが、ニュージーランドのノースアイランドのワカレワレワにて沸き立つ灼熱の泉のなかで煮られて殺されてしまう——実はかなり物騒な話でもある……。

“多くの人にとっては伝説とされている話だけど、俺らの系譜にあるワカパパの地域で起こった話なんだよね”とヘンリー。続けて**“ちょっとゾッとするような話だけど、おとぎ話っぽくもあり、子供たちに読み聞かせていく話なんだ。成長していくにつれて、マオリの歴史にそんなことは起こっていなかったと言われるようになり、実はフィクションだと気づかされる。でも＜ニュージーランドは、マウイによって海底から漁網で引き上げられた＞という言い伝えは、そういうものだと受け入れているじゃないか！　マオリの世界ではそうなっているんだよ！”**。

もしエイリアン・ウェポンリーのライヴを観たことがあれば、彼らがハカによってショウを始めているのも観たはずだ。これはマオリが戦争時に行なってきたチャント（※歓声による鼓舞）で、ヘンリーはこの祝詞によって恐ろしい雰囲気を呼び寄せる

ことを好んでいる。この新曲のエンディングでは、独自のハカを書いたことを明かしてくれた。**“俺はハツパツの視点から書いていて、この悪魔を迎え撃つことを目指したんだ。とてもアメイジングなサウンドに仕上がったんで、俺としてはかなりの達成感を感じたよ。聴き返す度に背筋がゾクッとするし、聴いてくれた人にも同じように感じてもらえたら嬉しいな”**。

もうひとつの新曲は、彼らがオークランド・タウン・ホールで初披露した「Tangaroa」。マオリにおける海の神の名前から頂戴しており、歌詞は人類がどのようにして地球を破壊しているかを歌っている（「We think we're changing things but it's too late / a dying creature we continue to suffocate'」――我々は何かを変えようとしているが、ときすでに遅し／死にゆく生き物たちが首を締め続けている）。

エイリアン・ウェポンリーがゴジラのファンであることは知られており、ヘンリーにいたっては『The Way Of All Flesh』（2008年）のアートワークの幼獣をタトゥーとして入れている。これらのことは、彼らがゴジラの環境意識、特に捕鯨反対を支持していることに追随しているように感じている。

“これってみんなで一丸となり対応しなくちゃならない課題だと思っている”とはヘンリー。**“たったひとつのバンドだけで指摘するだけじゃダメだと思うんだ。人々の行動って群衆に従うところがあって、数人でも追随するようになればもっと多くの人がフォローしてくると思う。両親は、この地球や周囲で起きていることに対して興味を持つよう育ててくれた。そしてマオリの教えの大部分は森や鳥の神々という、マオリの神聖なるものを破壊してはならないというところにあるから”**。

昨秋、バンドは国営テレビ局のニュース番組で、マオリの言語を使おうとするミュージシャンたちが“爆発的に”増えていることについて語った。

このムーブメントについて彼らはその一部になっていると感じていて、音楽はニュージーランドの文化を形成し、難しい課題についての議論を生んでいることを認めている。ヘンリー曰く**“マオリが何世代にも渡って迫害され続けてきたことを、多くの人は認め難く思っている。そしてそれを充分に知らないことから、語ること自体を難しく感じている。だからこのことに関する音楽を作ることで、人々に学びたいという欲求を抱かせる、もしくは学ぶために必要な情報を提供することにつながるのではと思っているんだ”**。

世界中のさまざまなバンドが、この課題について議論する準備をしている。フィーバー333のジェイソン・エイロン・バトラーが昨年起こった“ブラック・ライヴス・マター”運動について語った際、現代の若者たちは歴史上、そして現在まで長きに渡り続いている正義の不在について真正面から向き合おうとしていると提唱した。エイリアン・ウェポンリーが描き出すストーリーや問題提起は、厳密な意味ではそれらとは異なっているかもしれない。しかし変化をもたらす可能性は自分たちの手のなかにあり、その未来は音楽によって手繰り寄せられるかもしれないと考えているという点で、非常に似ている。

“俺らの世代っていうのは、ひと昔前の人に比べ、政治や世界が抱える問題についてオープンに語っている”とヘンリーは言う。**“俺らの音楽が実際にそうなのかは、自分たちではわからない。でも、この先の展開を見守っていきたいよ”**。

では新曲はどういったサウンドになっているのか？　バンドはそのことについてあまり多くを語ってはくれなかったが、ここ2年で積み上げたものをさらに深掘りしていったと語る際には熱がこもっていた。このことからも、音楽的なさらなる展開が期待できるだろうし、今までとは異なったヴォーカル・テクニックも披露されるかもしれない。これについてルイスは微笑みながら次のように語る。**“今のところ俺らが言えるのは、ドロップAで書いた曲があるということかな”**。**“かなりヘヴィな曲だね”**とヘンリーも認める。

2枚目のアルバムの制作が水面下で進んでいたこととは裏腹に、ファンを驚かせたのは、8月にベーシストのイーサンがバンドを離れると発表されたことだ。Facebookに投稿されたビデオ・メッセージのなかで＜長きに渡って家族や友人から離れることは彼にとって耐え難く、とても難しいことであった＞と説明する。

“今や俺たちは海外ツアーに出なければならず、それは毎回数ヵ月にも及ぶ大規模なものとなっている。長い間、家から離れなければいけないことに耐えられなかったり、しっかりとした睡眠が必要だったりと、さまざまなストレスに耐えられなければキツいかもしれない。俺だってときにはストレスで潰されそうになっているくらいさ”とルイスは語る。**“そういうライフ・スタイルを楽しめないのも、やっぱりしょうがないと思う。俺は友人としてイーサンのことを愛しているし、あいつをハッピーにさせてやりたいんだ”**。

“知ってのとおり、俺とルイスは兄弟だからかなり激しく言い合うこともある”とヘンリーは加える。**“それに俺らは両親と一緒にツアーにも出ている。お袋はツアー・マネージャーでありマーチャンダイズも担当し、親父はサウンドマンを務めている。家族総出で旅に出ているわけだから、俺らにホームシックは関係ないんだ”**。

ここで本日のズーム・インタビューの3人目の参加者が、ルアカカ（※ニュージーランド北方の都市）より静かに入ってくる。彼、ツランガ・モーガン・エドモンズ曰く**“かなりきれいな部屋”**からの参加のようだ。

彼はウェリントンにてデザイン関係の学位を2年半かけて修了する予定で、その初年度をマオリで過ごしていた。その際に古くからの学友であるヘンリーに、イーサンの後釜としてプレイしてもらえないかと電話をもらったという。彼自身ギター・プレイヤーだったことから、ベースを購入してオーディション用のビデオをラウンジで録画し、その後さらに数人の候補まで絞り込まれ、バンドとステージ演奏をするために飛行機に乗って彼らのもとに向かう。ライヴでプレイするために、実に470マイルも北に移動せざるを得なかったのだ。

“ウェリントンを引き払って大学も中退しなくちゃいけなくなり、そして家に戻ることになって”と説明する。**“実家に戻ってきただけだから大した問題じゃなかったし、一時的ではあるけれど、昔使っていた寝室に戻ってきたってことだね”**。

“「ねぇ、父さん母さん、戻ってきていいかな？　大学を辞めたいんだ」って感じだったんだろ？”とルイスが茶化す。

“もうちょっとしっかりした話し合いだったんだぜ！”とツランガは笑う。

イーサンはすでにニュー・アルバムのベース・パートを書きレコーディングもしていて、さらにはイーサンがメイン・ヴォーカリストとなる曲まで用意されていた。**“今はどうやってライヴでやったらいいか、考えているところなんだ”**とヘンリーは認める。その一方でルイスは笑いながら**“ツランガはもっとイーサンっぽいサウンドにしなきゃ！”**と話す。

今回のツアーでは、新ラインナップでのテストが行なわれた。オーディエンスが大喝采で応えたことから、ツランガはすでにバンドの一員と呼べるだろう。次にやるべきことはアルバムをリリースしてワクチンが行き渡ることを祈り、世界ツアーが少しでも早く再開されることを願うのみである。

この間に彼らはバンドの所有する部屋をリノベーションし、新たに[Patreon]（※動画配信サイト）のアカウントを開設してライヴ配信もできるようになった。エイリアン・ウェポンリーはまだ若いかもしれないが実に才能豊かなバンドであり、例えるなら2000年代初頭におけるトリヴィアムのような期待値を持っている。

2019年のナヴァホ・ネイションでルイスにインタビューを行なった際、彼が思い描く究極の野望はサッカー・スタジアムでプレイすることであると話していた。その野望は今でも持ち続けているのだろうか？

“もちろんだよ。でもそこに行くまでにはいくつものステップを踏まなければならない。ただ単に、何かが起こるのを願っているだけで、何もしないってわけにはいかないよね”。さらにヘンリーが次のようにつけ加える。**“＜Do the mahi, get the treats.＞ということわざがあってね。＜mahi＞は仕事を意味していて、つまり一所懸命何かをして、そこで初めてご褒美がやってくるということさ”**。

我々のインタビューは終わり、彼らはウェリントンでの次のショウへ向かっていった。彼らの音楽に対する献身性とそのクオリティから判断するに、その報いを得る日は近い。

DISC REVIEWS
P.118

2月1日～4月31日リリースの新作をピックアップ！

METAL NEW GEAR
P.123

メタル・ミュージシャンにお薦めのニュー・ギアを紹介！

CRYSTAL LAKE × KISS RUM
P.126

キッス・オフィシャル・ラムをCRYSTAL LAKEのふたりが呑み干す！

Special Presents!

本誌だけのスペシャル・アイテムをドドンとプレゼント！
希望者は右のQRコードからアンケートにお答えのうえ、希望アイテム（番号と商品名）を記入してください。
◎締め切りは［6月10日（木）］まで
当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
たくさんのご応募、お待ちしております！

①METAL HAMMER JAPAN Vol.5 オリジナルTシャツ
＜250名様＞
※サイズはLのみ

②メンバー・サイン入り BAND-MAIDポスター
＜1名様＞

③asamiサイン入りLOVEBITESマスク
＜2名様＞

④聖飢魔Ⅱオフィシャル・マスク
＜2名様＞
※ルーク柄、ジェイル柄をご指定ください

⑤YD＆MITSURU（CRYSTAL LAKE）サイン色紙
＜1名様＞

⑥谷原章介サイン入り METAL HAMMER JAPAN手ぬぐい
＜2名様＞
※デザインはランダムとなります

...AND JUST A LITTLE INFO FOR ALL

『ザ・ビター・トゥルース』

エヴァネッセンス

ユニバーサル／ UICN-9038（初回限定盤）
3 月 24 日発売

①アートファクト／ザ・ターン／②ブロークン・ピーセズ・シャイン／③ザ・ゲーム・イズ・オーヴァー／④イェー・ライト／⑤フィーディング・ザ・ダーク／⑥ウェイステッド・オン・ユー／⑦ベター・ウィズアウト・ユー／⑧ユーズ・マイ・ヴォイス／⑨テイク・カヴァー／⑩ファー・フロム・ヘヴン／⑪パート・オブ・ミー／⑫ブラインド・ブリーフ／⑬クルーエル・サマー（ライヴ・フロム・ホーム）⑭／ザ・チェイン（フロム・ギア5）
（※⑬⑭はボーナス・トラック）

FOR FANS OF：ウィズイン・テンプテーション／プリティー・レックレス／ラクーナ・コイル／ Pay money To my Pain

デビュー時に打ち立てた世界観を迷うことなく貫いた10年ぶりの新作

現代アメリカン・ロック界最強のディーヴァ、エイミー・リー率いるエヴァネッセンスの新作がついに発売となる。2017年の『シンセシス』はオーケストラとの再録作だったので、純粋な意味でのオリジナル・アルバムとしては、2011年発表の『エヴァネッセンス』以来10年ぶりだ。

ギターがジェン・マジューラに交代しての初作品となるが、その変化も、10年のインターバルもまるで感じさせない盤石の仕上がり。冷ややかなイントロ①から続く②、エイミーの絶唱が切ない③というゴシック・メタル色強めの曲から、R&Bらしさもある④、ピアノがリードする⑩や開放感のある⑪⑫まで曲調はバラエティに富んでいるが、ゴシック・メタルの基礎にしっかりと足を乗せながら、メジャーで通用するサウンド＆メロディを聴かせるというエヴァネッセンス独自のスタイルが全篇で貫かれている。デビュー作で提示した型を守りながら新しい曲を作り続ける難しさゆえかもしれないが、10年待った甲斐ありの新作だ。　（舩曳将仁）

ラウドロックの様相をまとうことでより高らかに響く“歌”の表現力

2000年代初頭、ミクスチャーやヘヴィロックが成熟した頃に登場したエヴァネッセンスは、“女性ヴォーカル＋抒情的な楽曲”というスタイルで注目を浴び、その後のラウド・シーンの方向性に大きな影響を与えた。メンバー・チェンジやエイミーの出産による休止期間を設けながら活動を続けていた彼女らであるが、エイミー自身は子供向け作品のリリースや、ブリング・ミー・ザ・ホライズン、ヘイルストームらとのコラボなど、ここ数年は外に向けて活動しており、その湧き出る創作意欲の泉が本作の充実度に色濃く反映されている。

一見、ラウド・ロックの様相をまとった音楽性において、エイミーの“歌”を軸にした綿密な音作りに注目してほしい。各楽器は、パート単体で印象づけるというよりも、歌を生かすことと、楽曲の世界観を表現することを命題にして機能していることがわかるはずだ。コロナ禍を経て発表する本作では、彼らの手法を濃縮させることで、未来への希望や決意を表現しているのである。　（近藤隆久）

『デス・バイ・ロックンロール』
プリティー・レックレス

ソニー／SICP-31419
※発売中
FOR FANS OF：ヘイルストーム／イン・ディス・モーメント

表題曲が全米1位に輝いた 気骨のロックンロール・バンド

素晴しい出来映えだ。TVドラマ『ゴシップガール』出身のモデル兼ミュージシャンのテイラー・モムセン(vo)率いる４人組。テイラーは容姿端麗のルックスをいい意味で裏切る本格派シンガーであり、彼女のロック・スピリットが楽曲の生命線となっている。先行シングルが見事全米チャート1位を獲得した本4thアルバムは、ヘヴィなロックンロール路線を貫いた傑作である。

「オンリー・ラヴ〜」ではサウンドガーデンのマット・キャメロン＆キム・セイル、「アンド・ソー・イット・ウェント」においてはトム・モレロをゲストに迎え、どちらも躍動感に富むグルーヴ感を魅せつける。また、ダークな歌メロでエモーショナルに聴かせる「25」、豪快なシャウトが炸裂する「マイ・ボーンズ」など特に前半はハードな攻めっぷりを発揮。後半には彼女が大好きなビートルズ・インスパイアと思われるインド音楽を隠し味にした「ターニング・ゴールド」、堂に入った歌いっぷりにシビれるブルージィな「ロックンロール・ヘヴン」と粒立ち鮮やかな楽曲が目白押し。（荒金良介）

『ナウ・アンド・ゼン』
ポール・スタンレーズ・ソウル・ステーション

ユニバーサル／UICY-15975
※発売中
FOR FANS OF：キッス／エース・フレイリー

R&B／ソウルへの愛が溢れた ポール・スタンレーもうひとつの顔

2015年にポール・スタンレーがスタートさせたソウル・ステーション。偉大なR&B／ソウルの名曲たちを一流ミュージシャンとともにカバーする本プロジェクトが、ついに1stアルバムをリリース。ソウル往年の名曲9曲と、オリジナルの新曲5曲が収められた本作は、キッスのフロントマンであるポールのロック・スターのイメージとはまた違ったムーディな音楽が詰まった良作だ。

バンド・メンバーにはベイビーフェイスやホイットニー・ヒューストンなど多くのアーティストのディレクション＆レコーディングをしてきたアレックス・アレッサンドローニ(k)を始めとする腕利きミュージシャンが名を連ね、そのなかには盟友エリック・シンガー(d)も。

もともとR&B／ソウルはポールの音楽的ルーツとも言えるジャンル。スモーキー・ロビンソンやテンプテーションズのカバーを筆頭に、本作で披露されたオリジナル・ナンバーからもルーツに対するリスペクトが溢れている。メタルではないが、彼の別の一面として聴いて損はしないだろう。（西沢文孝）

『カース・オブ・オータム』
ウィザーホール

ソニー／SICP-6378
※発売中
FOR FANS OF：ドリーム・シアター／サヴァタージ／カコフォニー

今までにないヴォリューム感！ 新たなフェーズを感じさせる渾身の一作

元ホワイト・ウィザードのジョセフ・マイケル(vo、k)とジェイク・ドレイヤー(g)を中心に、2013年よりロサンゼルスで活動をスタートさせた本バンド。

3rdアルバムとなる本作品。前作までのバンド・イメージの中心は、やはり古典的なプログレッシブ・メタルにインスパイアされたヘヴィなサウンドと叙述性にあった。今作もシュレッド・ギターとハイ・トーン・ヴォイスのかけ合いは、②⑤⑧なので遺憾なく発揮されているが、注目したいのは⑥⑨⑩の荘厳で悲哀に満ちた楽曲たちだった。⑪⑫⑬でも見て取れるが、このアルバムで表現したいのは彼らのパワー・メタルの裏にあるコンポージング力。つまり、音楽家としてテーマではないだろうか？

“いつもリスナーを旅に連れ出せるようなものを作ることを目指している”と語るマイケルだが、今作品でこそ、その信念は発揮されていると思う。メタルの範疇に囚われないバンドとしての新しい解釈を提示した1枚になっているはずだ。（原田右恭）

『ロイヤル・デストロイヤー』
ザ・クラウン

マーキー／MICP-11604
※発売中
FOR FANS OF: アット・ザ・ゲイツ／ザ・ホーンテッド

スラッシュ、デス、グラインド、メロディ すべてを飲み込んだ傑作

クラウン・オブ・ソーンズ名義時代も含めると、もう30年以上活動をしているスウェーデンのベテラン・デスラッシュ・バンドの10枚目。これまでに3度の来日公演を行なっており、ここ日本でも高い人気を誇っている。

冒頭で便宜上"デスラッシュ"という言葉を使ったが、クラウンのスタイルをひと言で説明するのは意外と難しい。海外ではデスラッシュという表現が一般的でないこともあり、メロディック・デスとされることも多い彼らのスタイルだが、いわゆるメロデスほどクサいメロディに溢れているワケでもない。本作についてベースのマグナス・ウルスフェルトは"メロディ、スラッシュ、パンク、グラインド、ヘヴィメタル、そしてエピックでドゥーミィなものまですべてが詰まっている"と表現しているが、まさにこれらの要素がすべて消化された結果、"デスラッシュ"あるいは"メロディック・デス"としか表現できない彼ら独特のスタイルに仕上がっている。

フレドリック・ノルドストロムによるプロダクションも見事。（川嶋未来／SIGH）

『フロンタル』
タービュランス

P ヴァイン／PCD-25320
※発売中
FOR FANS OF: ドリーム・シアター／メシュガー／テッセラクト

中東の国、レバノン共和国発！ 次世代を担うプログレッシブな刺客が来襲

豊かな歴史を持ち、宗教的・民族的にも多様なカルチャーが混じり合うレバノンという地で、2013年に結成されたタービュランス。そのアイデンティティには、プログレッシブを土台としながらもメロディアスに聴かせる部分や、サイケデリックに魅せる部分などハイブリッドさが感じられる。初の日本盤となる本2ndアルバムは、そのバックグラウンドが最大限に発揮された1枚として日本のメタル・ファンに認識されるはずだ。

全篇を通したテクニカルなギター・リフとシンセ・リフのコンビネーションはもちろん注目だが、このバンドのおもしろさは、スローなフレーズの使い方と拍子の変化がもたらす曲展開にこそある。③⑤⑧など、どこかEDMを感じさせる緩急と独特な雰囲気は、彼らが次世代プログレ・メタルと呼ばれる理由になるはずだ。

このアルバムを機に、日本国内でも徐々に浸透していくだろう彼らだけに、これまでをキャッチアップできるYouTubeチャンネルも要チェックも即行。次世代らしい彼らの音楽がそこに詰まっている。（原田右恭）

『ザ・メタル・オペラ・バイ・マグナス・カールソン』
ハート・ヒーラー

マーキー／MICP-11607
※発売中
FOR FANS OF: ラプソディ・オブ・ファイア／トビアス・サメッツ・アヴァンタジア

女性メタル・シンガーの共演による 絢爛豪華なメタル・オペラ作

数多くのアーティストに楽曲を提供していることでも知られる、プライマル・フィアーのギタリスト、マグナス・カールソン。彼が新たに始動させたメタル・オペラ・プロジェクトのデビュー作。

男性シンガーを中心に起用していたフリー・フォールの発展形と言えるものだが、何とここでは女性シンガー限定となっている。メンバーは豪華そのもので、バトル・ビーストのノーラ・ロウヒモ、元ナイトウィッシュのアネット・オルゾン、元シレニアのアイリンといったベテランから、グロウルとクリーン・ヴォイスを使い分けるセヴン・スパイアーズの才女エイドリアン・コーワンら若手まで、計7人の女性シンガーが参加。

いずれも声に特徴のある人物ばかりで、それぞれが役を演じているかのように思えるなど、まさにオペラという名にふさわしい物語性を感じさせるシンフォニック・メタル作となっている。この企画力に負けない、女性シンガー映えする華やかな曲を一手に担うマグナスの作曲能力の高さにも敬服だ。（舩曳将仁）

『シェイ・ケイン』

シェイ・ケイン

マーキー／ MICP-11608
※発売中

FOR FANS OF：リタ・フォード／ハート

煌びやかな80sサウンドを体現する パワフル・ガール降臨！

LAメタルを含む80sメタルを最大級にリスペクトし、デンジャー・デンジャーやファイアーハウスにも匹敵する高品質ナンバーを届けるスウェーデン発のクレイジー・リックス。そのダニー・レクソン(vo)全面プロデュースにて、イギリス出身の女性シンガー、シェイ・ケインが初のソロ作を発表。

楽曲も「ダイ・イン・ザ・ネーム・オヴ・ラヴ」のみマルチ・プレイヤーであるマイケル・パレスと共作、それ以外はすべてダニーがソングライティングを手掛けている。

キラキラした鍵盤とホーンを導入した冒頭曲「ベター・ザン・ラヴ」からまさにバック・トゥ・ザ・80s！　続く「オール・オヴ・イット」はビッグ・コーラスを用いたアリーナ・ロックで気分は高揚するばかり。ほかにもボン・ジョヴィやデフ・レパードをリファレンスしたようなストレート＆キャッチーな楽曲が並び、歌い出したくなる衝動に駆られてしまう。欲を言えば曲調にもっと幅がつけば、彼女の歌声のグラデーションも広がりそう。次作に期待したくなる処女作と言っていい。　　　（荒金良介）

『リキッド・テンション・エクスペリメント3』

リキッド・テンション・エクスペリメント

ソニー／ SICP 31424 ～ 5
3 月 24 日発売

FOR FANS OF：ドリーム・シアター／ジェイソン・リチャードソン

ロックダウンにより実現 待望の3rdが22年振りにリリース！

2020年12月、メンバーそれぞれのSNSで発表された再始動。22年ぶり、ついに待望の3rdが発売となる。

疾走感のある①の冒頭から、22年の月日を感じさせないLTEワールドに一気に引き込まれるはずだ。エキゾチックな世界観の③や、④でのジョーダン・ルーデスの壮大なピアノ・ソロなど、どのトラックにもさまざまな構成が詰まっており、じっくりと味わいたくなる楽曲が目白押し。

また今作ならではの楽曲として、“クラシカルでありながら少し攻撃的なトーンも持ったベースとドラムが絡み合う”という新鮮な体験ができる⑤や、ピアノの伴奏にエモーショナルなギター・メロディを乗せるジョン・ペトルーシとルーデスのデュエット⑦が白眉。さらに彼らのテクニックが存分に詰め込まれた「ラプソディ・イン・ブルー」のカバーも収録している。

なおディスク2にはジャム・セッションから抜き出した5曲も収録。こちらは彼らのセッションのよりリアルな空気を感じられる1枚になっている。　　　（原見理香）

『ディーモンズ・ウィズイン』

イーヴル・ドライヴ

スピリチュアル・ビースト／ IUCP-16339
4 月 2 日発売

FOR FANS OF：アーチ・エネミー／チルドレン・オブ・ボドム

フィンランド出身らしいフレーズ溢れる 女性ヴォーカル・メロデスの3rd

フィンランド出身のメロディック・デス・メタルのイーヴル・ドライヴは、結成は2013年とわりと若いバンドである。本作は3枚目で、レコーディングの最中にベーシストとドラマーが相次いで脱退するという災難に見舞われたため、難産の末に生まれた作品となったようだ。

音のほうは、アイアン・メイデンのメロディ＋スレイヤーの疾走感＋セパルトゥラのヘヴィネスという感じで、正直オリジナリティを見出すのは困難であるが、逆に言うとこういうスタイルが好きであれば、安心して聴ける内容。ヴォーカリストが女性というだけでなく、曲展開的にもかなりアーチ・エネミーを意識している感もある。メロデスは、メランコリックなメロディを愛するフィンランドのお家芸と言えるものだが、本作も実にフィンランドらしい美しくキャッチーなフレーズで溢れており、日本人の心に訴えかけてくるものがある。リズム体が一新したことで、過去のアルバムに比べ一段と演奏がタイトになっている点もグッド。日本盤ボーナス3曲入り。　　　（川嶋未来／ SIGH）

『アウト・オブ・ディス・ワールド』
アウト・オブ・ディス・ワールド

ビクター／VIZP-166（2CD限定盤）
4月2日発売

FOR FANS OF：ヨーロッパ／フェア・ウォーニング

令和の時代にこんなメロハーを聴けるのかと叫びたくなるほどの必聴盤！

元ヨーロッパのキー・マルセロ(g)と、フェア・ウォーニングのトミー・ハート(vo)によって結成された当バンド。ほぼ同じメンバーでの前身バンド、キー・オブ・ハーツとして2017年にアルバムを出しているが、今作はキーが全篇メインで作曲をしているところが決定的な違い。彼のキャッチーなメロディ・センスが光る作品に仕上がっている。

①から⑤まで完璧なメロハーで駆け抜けて、⑥ではシャッフル・ナンバーのハードロックと飽きさせない構成。キーの爽やかなギター・ソロ、トミーのパワフルに伸びるヴォーカルは健在で、彼らが活躍していた時代が刻み込まれた⑧もいい。令和の時代にこんなメロハーを聴けるのかと叫びたくなるほどにクセになる要素を詰め込み、すべての曲がファンのツボを突いてくる。"あの頃"を思い出させてくれるのだ。

お薦めナンバーは①④⑧。キー時代のヨーロッパとフェア・ウォーニングの旨味を合体させた、メロハー・ファンの必聴盤となるはず。（佐々木アキ）

Remaster

サバス流ヘヴィ・グルーヴが詰まった『4』がデラックス・エディションで発売

▼CD4枚、ポスター、ハードカバー・ブックが収めたれた豪華な内容にうっとり！

初期ブラック・サバスの作品はどれも強烈な個性を発しているため、一番の名盤を選ぶなんてことは到底できないが、それでもドロリとしたヘヴィ・グルーヴを突き詰めた作品はと言えば、1972年リリースの『ブラック・サバス4』を挙げる人が多いのでは。

そんな同作が、オリジナル楽曲の最新リマスターに加え、アナログ・マルチ・トラック・テープからのアウト・テイク、スタジオ内での会話も収めたトラックなどボーナスを満載した特別版として発売。ほかにも当時のセット・リストを再現したライヴ音源、ハードカバー・ブックも封入され、非常に貴重なマテリアルが詰まった商品となっている。

持っていない人が少ないサバス・アルバムではあるが、フリークならばぜひこのアイテムもお手元に。

『ブラック・サバス4［スーパー・デラックス・エディション］』
ワーナー／WPCR-18408
※発売中

Movie

"インナーサークル"の内側を描き出すブラック・メタル・ファン必見映画が公開！

昨年から映画館は『鬼滅の刃』一色だったが、同作に登場する鬼よりもバイオレンスな人間模様を描いた映画が公開する。ノルウェーのブラック・メタル・シーンを伝える『ロード・オブ・カオス』だ。

ブラック・メタルの本拠地ノルウェーから流れてくる逸話は、ある意味では都市伝説的なレベルだったとも言える。それを本作ではバソリーのドラマーでもあった監督のジョナス・アカーランドが、メイヘムを中心とした1980年代後半からの狂気の日々をリアルに描き出している。ユーロニモスを演じるロリー・カルキンの、鬱々とした迫真の演技にも注目だ。

公開は3月26日から。まだ肌寒いこの季節、この映画で心から凍えてみては……。

『ロード・オブ・カオス』
◎3月26日（金）より、シネマート新宿／シネマート心斎橋ほかにて順次公開。

© 2018 Fox Vice Films Holdings, LLC and VICE Media LLC

試奏・文：梶原稔広
東京都出身、ALHAMBRAのギタリスト。数々のレコーディング、ライヴ・サポートを行ない、MI TOKYOにて後進の指導にも携わる。楽器メーカーの商品開発やデモ演奏のほか、ギタリスト向け教則本も執筆。
写真：鈴木千佳

BLACKSTAR
ID:CORE V3 STEREO 10

価格：16,000円（＋税）

Specifications

●**出力**：10W（5W＋5W）
●**入出力端子**：インプット、ヘッドフォン、ライン・イン、USB
●**コントロール**：ヴォイス、ゲイン、ヴォリューム、EQ、エフェクト・タイプ、エフェクト・レベル、MODスイッチ、DLYスイッチ、REVスイッチ、マニュアル・スイッチ、TAPスイッチ
●**外形寸法**：340（W）×185（D）×265（H）mm
●**質量**：3.7kg
※20Wモデル、40Wモデルもラインナップ

さらなるサウンドの向上と豊富な機能を追加したV3

手頃な価格で手に入れやすいエントリー・クラスの10W出力アンプだが、見た目以上のハイスペックとなっている。

アンプとしての基本サウンドには、同社が今までに培ってきたノウハウがしっかりと投入されており、弾いていてその完成度の高さが実感できた。かつ、以前のバージョンや同出力の別シリーズに比べて、とてもナチュラルで素直なサウンドという印象。コントロール・パネル部も視覚的にわかりやすく、直感的な操作を可能にしている。

主軸としては6種類のヴォイシングが選択でき、タイプごとに質の高いサウンドが出力され、搭載エフェクトを含めたサウンドメイクは本体のみでも充分だが、フリーの専用ソフトを使用することでさらに踏み込んだ音作りもできる。またIOも内蔵するため、USBで直接PCにオーディオ・データを送ることも可能だ。

フラットな特製を生かしたエクステンション・スピーカーとしても活用できるので、外出もままならないご時世だからこそ、練習用アンプだけでは終わらない本アンプで音楽ライフを楽しんでみるのもいいのでは？

ブラックスターの特許技術であるISFコントロール。アメリカを代表とするヴォイシングからイギリス的なトーンまで、シームレスにサウンドメイク。

●問い合わせ：コルグ／KIDお客様相談窓口
☎0570-666-569
◎https://www.blackstaramps.com/jp

FENDER
BOX SERIES TELECASTER HH

価格：140,000円（＋税）

Specifications

ボディ：バスウッド
ネック：メイプル
指板：ローズウッド
フレット数：22
ピックアップ：Boxer Humbucking×2
コントロール：ヴォリューム、マスター TBXトーン・コントロール、3ウェイ・ピックアップ・セレクター、タップ・スイッチ
ブリッジ：6サドル・ハードテイル（裏通し）
カラー：トリノ・レッド（写真）、インカ・シルバー
付属品：ギグ・バッグ

スタンダードとモダンさを融合させた意欲作

　フェンダーから新たにジャパン・メイドの意欲的なテレキャスターが数量限定で登場。モダンな佇まいに高いポテンシャルを秘めた１本だ。

クリーン・サウンド オーソドックスなピックアップ仕様のテレキャスターでは再現が難しい、ハムバッカー搭載器ならではの温かく太いクリーンはもとより、コイルタップ・スイッチを使用することで、逆に“2ハム構成のギター”からは想像できない繊細なサウンドを創出することができた。

歪みサウンド クセのないフラットな特性のバスウッド・ボディと、本モデル専用のピックアップはマッチングが良く、タイトかつウォームなサウンドを出力。サドルが独立したフィックスド・ブリッジでテンション感も申し分ない。また本器の特徴と言える［TBXコントロール］により、ダウン・チューニングした際の低音のモタつきも適宜調整可能で、最適な音作りが可能となっている。

　一見すると以前本誌で紹介したモダン・シリーズのテレキャスターと似ているが、そこはフェンダー、似て非なるモデルを製作したと言えよう。

▲特殊な２連ポットを使用したTBXコントロール。センター・クリックがあり、ハイ・カットとロー・カットを使用環境に合わせて使い分けできる。

●問い合わせ：フェンダーミュージック
☎0120-1946-60
◎FENDER.CO.JP

IBANEZ
RG5170B-BK

価格:300,000円(＋税)

Specifications

ボディ:バスウッド
ネック:メイプル/ウェンジ(5ピース)
指板:マカッサル・エボニー
フレット数:24
ピックアップ:フィッシュマン製Fluence Modern Humbucker Alnico(フロント)、同Fluence Single Width Ceramic(センター)、同Fluence Modern Humbucker Ceramic(リア)
コントロール:ヴォリューム、トーン、5ウェイ・ピックアップ・セレクター、2ウェイ・ヴォイシング・スイッチ
ブリッジ:ロープロ・エッジ・トレモロ
カラー:ブラック
付属品:ハードシェル・ケース

2021年新モデルは ヴォイス・コントロール付きRG!

国内外で評価の高いRG Prestigeシリーズに新モデルが登場。優れたプレイアビリティはもちろん、フィッシュマン製アクティブ・ピックアップをフィーチャーするなどこだわりが満載。

クリーン・サウンド もともと音色の幅が広いRGだが、アクティブ化することでさらに踏み込んだクリーンが出力できるように。特にコイルタップ時のアコースティック感は文句のつけようがない。

歪みサウンド アクティブ・ピックアップに"出音がクリアな分、素っ気なくもある"という印象を持つギタリストは少なくないが、ここに搭載するフィッシュマン製ピックアップでも同じことが言えるだろうか。パッシブに比べてノイズレスなのは言わずもがな、ピッキング・レスポンスも良く、倍音もキレイに出力される。

ヴォイシング・スイッチにて、歪みの特性を<モダン～オーガニック>な音と選択できるのも特筆点。これは曲調でフィーリングを変えたいときはもちろん、演奏環境に対応させるためなど、フレキシブルなトーン・コントローラーとしてとても重宝しそうだ。

▲ボディ、指板サイド及びヘッドには、べっ甲柄のバインディングが巻かれている。ありそうでなかったデザイン&質感が好印象。

●問い合わせ:星野楽器販売
☎0561-89-6900
◎https://www.ibanez.com/jp/

YD & MITSURU [CRYSTAL LAKE] KISS RUM

濃厚な口づけの如く……大人なメタル・ヘッズはラムを楽しむ!

ライヴハウスやロック・バーなどでワイワイお酒を呑むときは、ビールやハイボールがベストマッチと言えそうですが、自宅でも“やっぱりビールや缶サワーかな”という人は多いのでは？　そんな貴兄に試してもらいたのが、今回紹介する[キッス・オフィシャル・ラム]。カクテルのベースとして使われることが多いラムですが、今回は重厚なダークラムをCRYSTAL LAKEのYDとMITSURUがストレートでダンディにテイスティング！

オススメの呑み方

じっくりと熟成したラムで作られる“ダークラム”は、ストレートで味わいたい。そのときは、ぜひグラスにもこだわってみよう。シェリー・グラス（もしくはショット・グラス）に注ぎ、少量ずつ呑んでみてほしい。グラスを手で包み温度を上げていくと香りに変化が出るので、そのグラデーションを堪能するのもダークラムを楽しむポイント！

KISSデトロイト・ロック・プレミアム・ダークラム
●希望小売価格：6,700円（700ml）　●アルコール度数：45%

KISSブラック・ダイアモンド・プレミアム・ダークラム
●希望小売価格：5,500円（500ml）
●アルコール度数：40%

世界一のエンターテインメント・ロック・バンド、キッスのオフィシャル・リカーである[KISSブラック・ダイアモンド・プレミアム・ダークラム]と[KISSデトロイト・ロック・プレミアム・ダークラム]。

[ブラック・ダイアモンド～]は、ジャマイカやドミニカなどのカリブ海諸国で最大15年熟成したラムをブレンド。ドライ・フルーツやバニラの香りを内包しつつも甘すぎず、輪郭のくっきりとした味わいが特徴だ。

[デトロイト・ロック～]は、8～15年間熟成させたドミニカ産の最高級ラムをブレンドした1本。スパイシーなニュアンスとオークの香りが立ち、時間や温度の変化によってダーク・チョコレートやアプリコットを想起させる重層的な甘みも広がってくる。アルコール度数は45%とラムとしては高めだが、呑み口は非常にスムーズ。

バンド・オフィシャル・ラムならこちらもチェック!

各種リカーをそろえるモーターヘッド・シリーズには、ラムもラインナップ。最大で8年間熟成したドミニカ産のラムをブレンドし、良質なブランデーのような端正な香りと爽やかな酸味を楽しめる。贅沢にコーラ割りもお薦め。

“メタル・ゴッド”ジューダス・プリーストのラムは、クローブやシナモンなどを加え豊かなフレーバーをつけたスパイストラム。輪郭のあるスパイシーさとキャラメルやレーズンなどの柔らかな甘みが溶けあう、個性豊かで呑みやすい1本だ。

ジューダス・プリースト・ファイアーパワー・スパイストラム
●希望小売価格：5,000円
●アルコール度数：37.5%

モーターヘッド・プレミアム・ダークラム
●希望小売価格：6,000円　●アルコール度数：40%

ライヴを観ながらはもちろん、仕事をする前にエスプレッソ感覚でひと口呑んでも(笑)。――YD

INFORMATION ハードコア／メタルコア要素にキャッチーかつユニークなメロディを織り交ぜた“クリスタル節”で、国内外の多くのヘヴィ系リスナーから支持を受けるCrystal Lake。 初期作品を現メンバーで再録したアルバム『The Voyages』が発売中だ。

Y (YD) ［ブラック～］はグラスを近づけた瞬間から香りが華やかで、甘く軽やかな匂いにそそられます。口に入れるとカラメルっぽい甘みが感じられて、かつブドウ感もありブランデーにつながるイメージですね。インパクトがあって、それでいて呑みやすい。

M (MITSURU) 普段ラムを呑まない僕でも呑みやすいっていうのが第一印象です。すごく新鮮な甘みがあって、ブドウを使っていないのにレーズンのような香りがして。女性も好きそうです。少し時間が経つとさらに香りが立ってきて、まろやかな匂いが鼻の奥までくるという。

Y 温度で甘みの質感が変わるっていうのが、ラムのおもしろいところなのかな。［デトロイト～］はすごい軽やかで、45度っていう高い度数を感じさせない呑みやすさがありますね。［ブラック～］とは香りが異なって、鼻の抜け方も軽やかにスッと通り過ぎる印象を受けました。

M うん、［ブラック～］のほうが時間をかけて鼻にくる感覚で、［デトロイト～］はスッキリした一瞬でくる鋭利な匂いというか。

Y それでいて継続して呑んでいると、甘みも感じてくる。ガッツはあってもキレイなディストーションみたいな、ミュート感も出るアンプって感じ(笑)。

M これがもし楽屋にあったら、出番前に半分以上はなくなっていると思う。あとで裏を見て“45度”って書いてあって、ヤベえみたいな(笑)。

Y カクテルでドリンカブルに呑むのもいいんですけど、こういうおいしいダーク・ラムは、ストレートでチビチビいくのがいいなと思いました。氷を入れるとまた印象も変わりそう。

M 特に［デトロイト～］はロックも合いそうですよね。

※

Y ジューダス・プリーストの［ファイアー～］は、爽やかな甘みがスムーズに入ってきて、そっと消えていくような呑み口。キッスのラムは深い味わいを口のなかで感じながら変化を楽しんだのに比べて、［ファイアー～］は喉越しさえ味わえるような。

M 僕はアルバム『ファイアーパワー』がすごく好きなんですけど、［ファイアー～］はその印象に近い。あのアルバムはすごくキャッチーで、モダンなメタルとしても往年のメタルとしてカッコイイっていうのがある。［ファイアー～］もラム酒好きな人は絶対好きだろうし、初めての人も呑みやすいみたいな。

Y めっちゃいいこと言うじゃん！ 今日イチ感動しました(笑)。時間が経つとよりフレーバー感が加わって、スパイストラムらしい印象が出てきますね。

M モーターヘッドの［プレミアム～］はすごく渋い感じというか、樽感があるというか。でも、ラム初心者の僕でも呑みやすい。

Y 甘さを感じながら樽感もいけるから、比較的お酒が強くない人も楽しみやすいんじゃないですか。

※

M ラムには、勝手に取っつきにくいイメージを持っていました。でも慣れ親しんでいなかっただけで、意外と間口が広いというか、お酒の苦手な人でも好きになれるんじゃないかな。純粋にハマっちゃいそうな感覚ですね。

Y もともとはモヒートとかラム・コークとか、割りもので呑む印象が強かったんですけど、ラム単体で味わい深く旨味を楽しめるんだなって勉強になりましたね。食事をとったあとデザートとともに、コーヒーと同じような感覚でラムを呑むのもいいんじゃないですか。仕事をする前にエスプレッソ感覚でひと口呑んでもいいかも(笑)。もちろんライヴを観ながら呑んでテンションを上げるのにも合う！

M 以前はライヴ前も、僕らふたりだけ呑んでいたんですよ。

Y ラムやウィスキーはスタート・アップにいいんですけど、呑みすぎちゃうこともあってほどほどにしています(笑)。

M “これぐらいはテンション上がるけど、これ以上だと演奏ができない”ってところを探りながら。ただ、メンバーには“こいつ今日も全然弾けてねえな”って思われているのかも(笑)。

本日のBar●Pepe Trick

日本一の繁華街、歌舞伎町は区役所通りにあるロック・バー。店内にはさまざまなロック／メタル系グッズが並び、BGMが程良い音量のためゆっくりとした会話も楽しめる空間だ。年中無休・営業時間は20時～朝5時まで。

住所●東京都新宿区歌舞伎町1-2-7 星座館7F
電話●03-6205-6609
Twitter●@PEPETRICK_BAR

※お酒は二十歳になってから。
未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

都商会ロック酒通販サイト
【MIYAKO WEB CHANNEL】

METAL HAMMER JAPAN
メタルハマー・ジャパン Vol.5

RittorMusicMook

電子版　2021年4月1日　第1版発行
（底本　2021年4月1日発行　第1版1刷）

【発行所】
株式会社リットーミュージック
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
https://www.rittor-music.co.jp/

発行人　松本大輔
編集人　永島聡一郎

【本書に関するお問い合わせ先】
info@rittor-music.co.jp
本書の内容に関するご質問は、Eメールのみでお受けしております。メールの件名に『メタルハマー・ジャパン Vol.5（電子版）』と記載してお送りください。ご質問の内容によりましては、しばらく時間をいただくことがございます。なお、電話やFAX、郵便でのご連絡、本書記載内容の範囲を超えるご質問につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

編集長
岡見高秀

ビジネス・コミュニケーション部
吉田勇治
西澤文孝
横尾彰
原見理香
原田右恭
須賀琢郎

海外渉外担当
平井潤

表紙デザイン
村藤治（RAD）

デザイナー
山田直登（株式会社ナックスタイル）
辻井知（Design Works SOMEHOW）
石原崇子

電子版制作　大日本印刷株式会社

©2021 Rittor Music, Inc.

＊本書記事／写真／図版などの無断転載・複製は固くお断りします。
＊この電子書籍は固定レイアウト形式で作成されています。
　文字の拡大・縮小や、検索、ハイライトなどの機能は利用できません。
＊電子版は紙版とは異なる部分があることをご了承ください。

▲初対面は取材ではなく、とある場所で“ライター貸してくれないか”と声をかけられて。喫煙者じゃなくてゴメン！

HAMMER　FUTURE

本書の記事は、Future plcグループ企業であるFuture Publishing Limited, UK 1983が著作権を保有またはライセンスを受けているMetal Hammerから翻訳または複製されています。 Metal HammerはFuture Publishing Limitedの商標またはライセンスを受けているものです。Used under license. All rights reserved.
Future plcグループが発行する本雑誌およびその他の雑誌の詳細については、http://www.futureplc.com へアクセスください。